沖縄県文化財調査報告書第17集

津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書

1978年3月

沖縄県教育委員会

キガ浜貝塚〈正　　表〉

頁	行	誤	正
目次	9	土　壙	土　壌
6	11	竪穴住居地	竪穴住居址
6	22	19 78年	1977年
7	3	琉球石灰岩	琉球石灰岩
8	4	上部遺跡	上部遺構
11	21	前期初頭の	前期初頭の
12	6	人意的	人為的
18	20	思かれるが	思われるが
19	1表	A －Ⅲ 30／40	A －Ⅲ 30／45
20	2表	千板岩	千枚岩
20	2表	石灰質泥び	石灰質及び
44	2	刃部として	刃器として
27	17	嘉手貝塚	嘉手納貝塚
28	2	横位のの	横位の
31	4	深形土器	深鉢形土器
31	8	あどが	などが
33	1	構式	構成
33	14	横擦	横採
35	10	C地区	B地区
37	6	大学部	大学文学部

頁	行	誤	正
38	8	幅0.90m	幅0.90m
40	16	,37－0第Ⅲ層	,4は37－0第Ⅲ層
41	15	エナメル資	エナメル質
43	3	7個,D地区	7個,C地区22個,
45	1	（柄の幅0、7	（柄の幅0、7
45	22	コボウラ	ゴホウラ
46	4	長	長軸
48	12	下部1、40m,模	下部1,40m,他
48	17	琉球大法	琉球大学法
50	11	漁護	漁獲
50	13	漁護	漁獲
50	16	補護	捕獲
50	17	渡嘉仁	渡喜仁
51	17	（PL,2,	（PL35,2,
51	18	D・F地区	D・B地区
51	19	（RL	（PL
54	10	前者の個	前者の3個
4	29	図監	図鑑
L.	6	A地区Ⅳ層	A地区Ⅵ層
L.	34	ハリセンボン	ハリセンボン

沖縄県文化財調査報告書第17集

津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書

1978年3月

沖縄県教育委員会

津 堅 島 遺 跡 分 布 図（1976年撮影）

序

本報告書は，昭和５１・５２年度の文化庁国庫補助金と，県の自己財源によって調査した成果を収録したものであります。

津堅島の地割遺構とキガ浜貝塚が圃場整備事業にかかることになり，昭和５１・５２年度にかけて，地割調査と発掘調査を実施しました。地割遺構については，昭和５２年３月に報告書にまとめ，今回は発掘調査の成果をまとめました。

キガ浜貝塚は範囲確認調査によって，およそ５０００㎡の範囲であることがわりました。その結果をもとに，県農林水産部と遺跡の保存について協議を行ない「保存」することで合意しました。最近，遺跡破壊，緊急調査があいつぐ中で，このように保存される遺跡があることは喜ばしいことであります。

発掘調査に際しては，県文化財保護審議会専門委員の嵩元政秀氏，勝連村教育委員会，津堅区長緑間栄昌氏および，津堅区民に多大の御協力を得ました。記して感謝を申し上げます。

昭和５３年３月

沖縄県教育委員会

教育長　仲宗根　　繁

例　　言

1. 本書は，沖縄県教育委員会が，国庫補助を受けて，１９７６・１９７７年度に実施した，津堅島キガ浜貝塚範囲確認調査の報告書である。
2. 本報告書の執筆はつぎのとおりである。なお，編集は金武があたった。

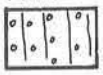
Ⅰ　序　言	金　武　正　紀
Ⅱ　遺跡の位置と環境	金　武　正　紀
Ⅲ　層　序	金　武　正　紀
Ⅳ　遺　構	金　武　正　紀
Ⅴ　遺　物	
1～2	金　武　正　紀
3～6	比　嘉　春　美
Ⅵ　総　括	金　武　正　紀

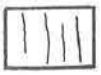
3. 出土品の整理，実測等はつぎのメンバーで行なった。

石器実測	金　武　正　紀
土器，骨製品，貝製品等の実測	平　安　秀　子・比　嘉　春　美
拓　　本	比　嘉　春　美
貝殻分類	花　城　潤　子
獣魚骨分類	狩　俣　邦　子
写真撮影	金　武　正　紀

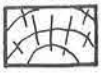
4. 石質の同定は県立博物館学芸員大城逸朗氏，貝の同定を那覇高等学校教諭知念盛俊氏の協力を得た。記して謝意を表する。
5. 出土遺物の図とＰＬ．は対比して見られるように編集した。（例：第９図１とＰＬ．７の１）
6. 石器の実測図は構造を表わす図として作成し，その凡例は下図のとおりである。

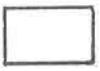
(1) 自然面


自然面

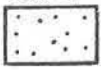

水による自然研磨面

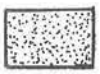
(2) 製作時


剥離痕


研磨面

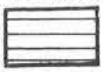
(3) 使用時


敲打痕

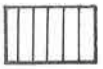

敲凹痕

使用時の破損

(4) その他（主に使用時？）


節離面

折痕


大きな割痕

(5) 横断面

横断面

目　　次

序

Ⅰ　序　　言……1

1. 調査にいたる経緯……1

2. 調査の経過……2

Ⅱ　遺跡の位置と環境……7

Ⅲ　層　　序……8

Ⅳ　遺　　構……11

1. 竪穴住居址……11

2. 土　礦（?）……12

3. 石 組 遺 構……12

Ⅴ　遺　　物……17

1. 石　　器……17

2. 土　　器……21

3. 骨 製 品……38

4. 貝 製 品……43

5. 石製品，土製品……48

6. 食料残滓……48

Ⅵ　総　　括……56

図・ＰＬ.

第1図　津堅島位置図（1/50,000）

津堅島キガ浜貝塚(つけん)発掘調査報告

Ⅰ 序　言

沖縄県教育委員会は，津堅島のほぼ全域について圃場整備が実施されることに先がけて，遺跡の分布調査及びキガ浜貝塚の範囲確認調査を実施した。本冊は，１９７６年度，１９７７年度に実施したキガ浜貝塚範囲確認調査の成果をまとめたものである。

1　調査にいたる経緯

勝連村津堅島県営畑地帯総合土地改良事業が，１９７５年から１９８０年までの６年間にわたって実施される。県教育委員会がこの計画を知ったのは１９７６年１月であった。早速遺跡の分布調査を実施し，津堅貝塚，津堅第二貝塚，津堅第三貝塚，キガ浜貝塚，和名浜貝塚，ヤジリ浜貝塚，泊浜遺物散布地，クボウグスクの計８つの遺跡と，島のほぼ全域に広がる地割遺構が確認された。その中で，地割遺構とキガ浜貝塚が土地改良にかかることがわかった。ただちに県農林水産部と協議し，

① １９７６年７月～９月にキガ浜貝塚及び，地割遺構の範囲確認調査を実施する。

② 調査にもとづき，再協議する。

③ 協議が合意した後に工事に着手する。

の３点を確認した。調査後に遺跡の取扱いについて再協議した。その結果，

① 地割遺構については，島のほぼ全域に広がっており，保存することは無理なので，今回の調査による記録保存（１９７７年３月県教育委員会から「津堅島地割調査報告書」が刊行されている）にとどめる。

② キガ浜貝塚については，遺跡として確認した約5,０００㎡を現状のまま保存する。

の２点を確認し，土地改良事業は進行している。

キガ浜貝塚の範囲確認調査は単年度の予定であったが，予定通り完了することができず，２カ年事業になった。

2　調　査　の　経　過

本遺跡の発掘は，１９７６年７月１２日～７月２６日までの１５日間と，１９７７年８月２日～８月１９日までの１８日間の２回にわたって実施した。初年度は主に全体的な遺跡の範囲を確認する目的で，遺跡の周囲から中心部へと試掘グリッドを設定して発掘し，２年度は初年度でおさえた遺跡の性格を解明する目的で発掘を行なった。

(1) 伐　開　作　業

遺跡は個人有地と字有地（保安林）にまたがっている。個人有地は地目は畑であるが，１０年以上も耕作していないので，ギンネムが繁茂している。調査はこのギンネムの伐開からはじめた。鋸，ナタ，鎌などを使って２日間かかった。第２次発掘でも同じようにギンネムの伐開で２日かかった。ギンネムは成長が早く，１年では林になってしまう。

(2) グリッド設定

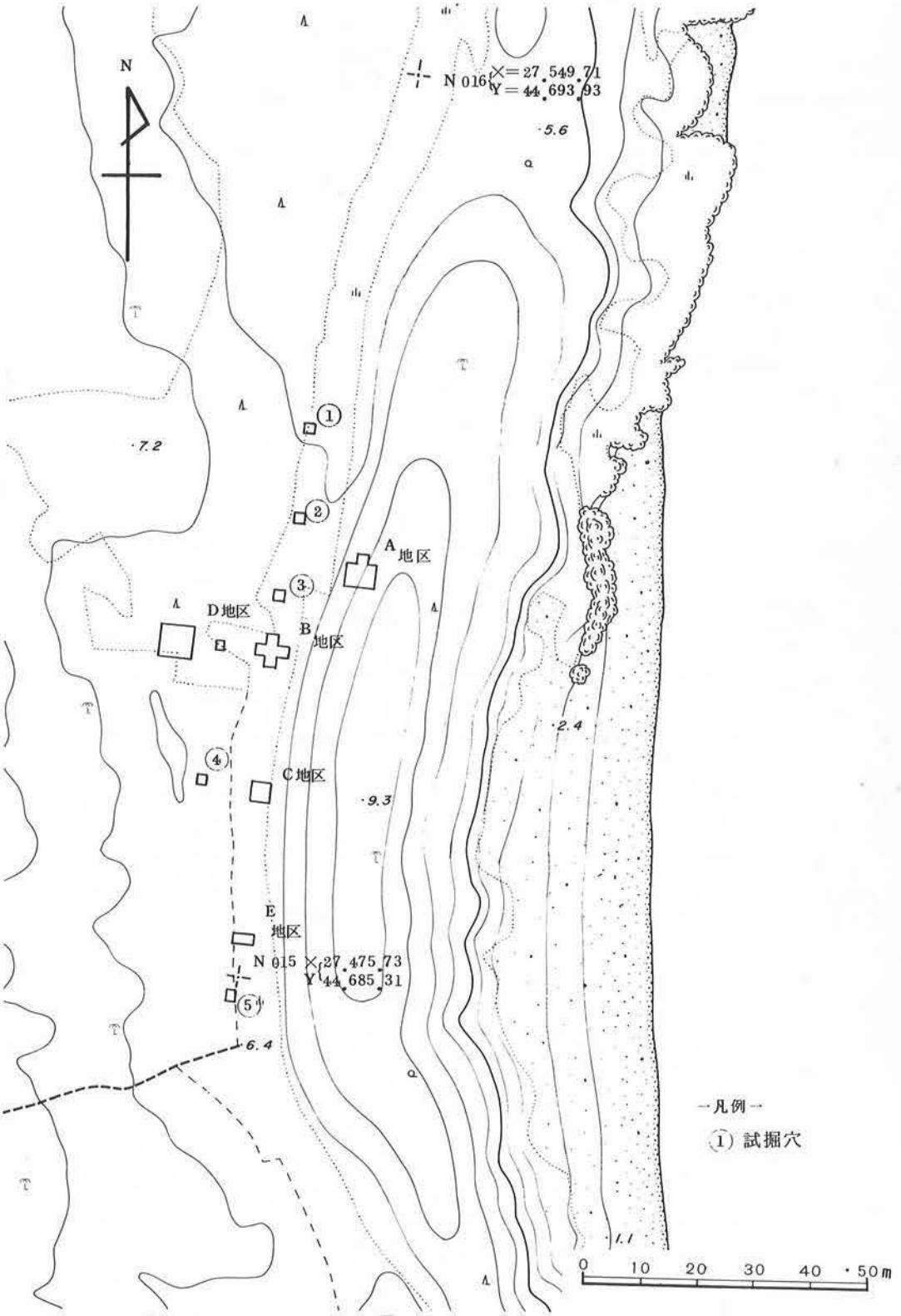
伐開してからグリッド設定にかかる。圃場整備のための測量が行なわれ，そのとき使ったトラバー杭が遺跡内に２点あった。No.１５のトラバー杭が，Ｘ＝２７・４７５・７３，Ｙ＝４４・６８５・３１，No.１６のトラバー杭が，Ｘ＝２７・５４９・７１，Ｙ＝４４・６９３・９３の座標値が出ている。No.１５からNo.１６までの距離は７４・４７ｍで，角度は6° 38′ 04″である。No.１５を基準杭として，No.１５からNo.１６への一本線を基準線とし，基準線を０として，西へはＷ１，Ｗ２……東へはＥ１，Ｅ２……とする。南北へは，No.１５を２０として，北へは２１・２２……，南へは１９・１８……として２ｍ×２ｍのグリッドを第３図のように設定した。

(3) 発　掘　作　業

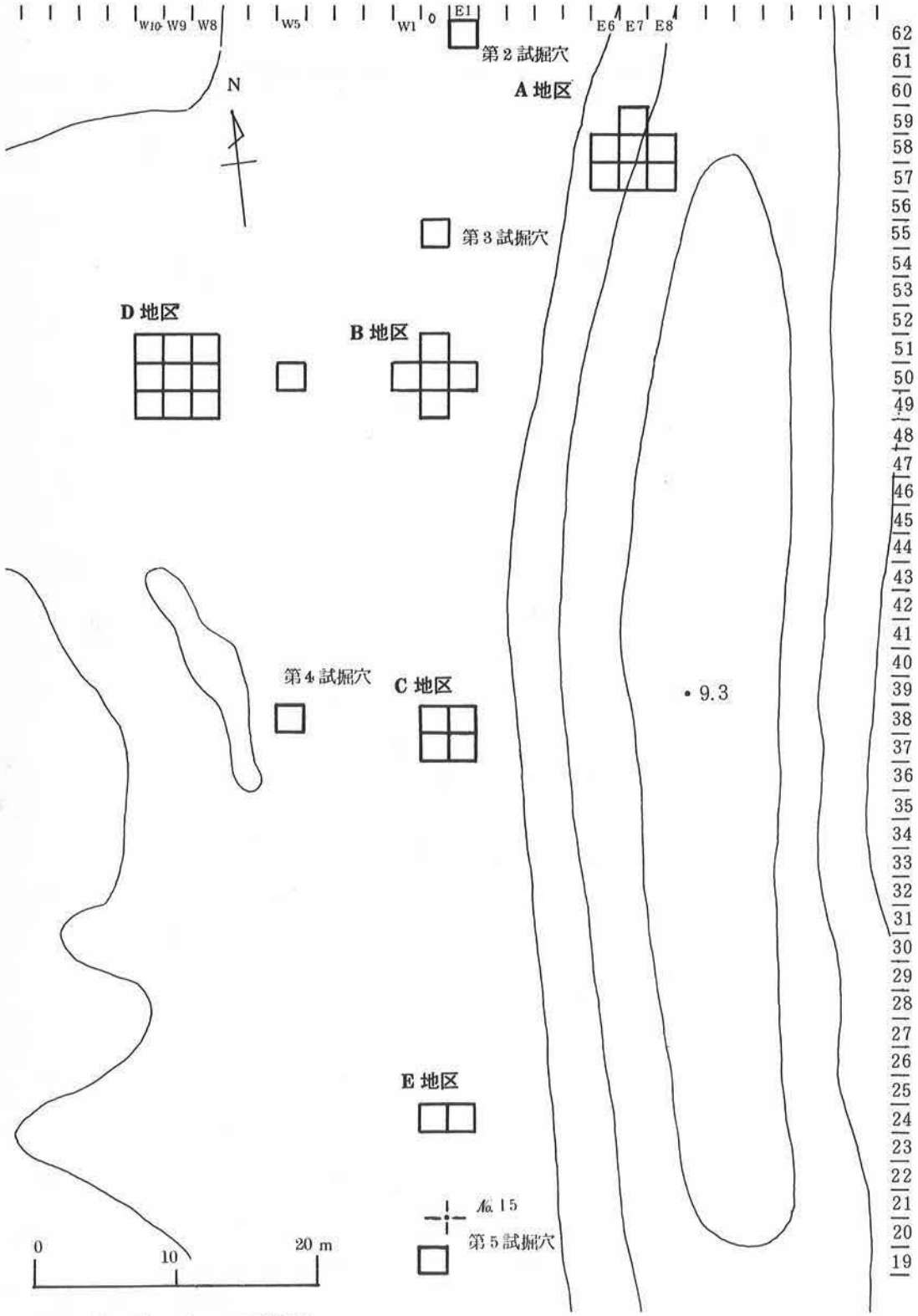
発掘は第１次，第２次とも猛暑の７・８月で，しかも，保安林とギンネムにとりかこまれ，無風状態の毎日であった。さらに条件の悪いことに，砂地で，熱が高く，蒸し風呂にはいっているようであった。自衛手段としてPL. 3-1に見られるようにギンネムで影をつくって暑さをしのいだ。

(4) 発　掘　日　誌

１９７６年　７月１２日（晴）　ギンネムの伐開作業
１３日（晴）　〃
１４日（晴）　グリッド設定，２４－０，３８－０，７０－Ｅ１の発掘を開始。
１５日（晴）　２４－０，３８－０，７０－Ｅ１は昨日の続きを発掘。６２－Ｅ１，５０－０の発掘をはじめる。



第2図　キガ浜貝塚の地形図


W10 W9 W8
W5
W1 0 E1
E6 E7 E8
第2試掘穴
A地区
N
第3試掘穴
D地区
B地区
第4試掘穴
C地区
• 9.3
E地区
No. 15
第5試掘穴
0
10
20 m
62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19

第3図　グリッド設定図

1976年　7月16日(晴)　作日の続き。

17日(雲)　台風9号接近で強風の中での発掘。50－W5，38－W5，51－0，49－0の発掘をはじめる。38－W5は遺物なし。

19日(晴)　51－0，50－W5，49－0の発掘を続ける。50－W9 19－0の試掘にはいる。

20日(晴)　49－0，50－W9は昨日の続き。50－W1，24－E1を始める。

21日(晴)　49－0，50－W1，24－E1は昨日の続き。50－E1を始める。

22日(晴)　49－0，50－W1，24－E1，50－E1は昨日の続き。59－E7の発掘をはじめる。

23日(晴)　19－0，24－E1，59－E7の発掘を続ける。19－0は遺物なし。断面図の作成と断面の写真撮影にはいる。

24日(晴)　59－E7の発掘終る。埋戻しにはいる。断面図作成。

25日(晴)　埋 戻 し。

26日(晴)　埋戻し。第1次発掘調査完了。

1977年　8月　2日(晴)　ギンネムの伐開。この1年間で遺跡へ通ずる道路も草木が繁茂してわからなくなっている。

3日(晴)　ギンネムの伐開。グリッド設定を行なう。No.15とNo.16の杭を確認し。昨年と同じようなグリッド設定をする。

4日(晴)　58－E7，38－E1，37－0の発掘からはじめる。C地区第Ⅲ層の土はすべて3㎜フルイにかけ，さらに1㎜フルイで水洗いをする。貝製品や多くの魚骨が見つかった。

5日(晴)　58－E7，38－E1，37－0の第Ⅲ層の発掘。

6日(晴)　昨日の発掘を続ける。50－W9は昨年の発掘グリッドで，その周囲に50－W8・W10，49－W8・W9・W10のグリッドを設けD地区として発掘をはじめる。

7日(晴)　D地区の発掘を中心に行なう。

8日(晴)　〃　〃

9日(晴)　〃　〃

10日(晴)　昨年発掘した38－0の周囲に38－E1，37－0，37－E1のグリッドを設けC地区として発掘をはじめる。

11日(晴)　D地区の遺構の平面図及び断面図作成。C地区の発掘。

8月12日(晴)　C地区の発掘を終る。C地区の断面図作成及び写真撮影。昨年発掘した59－E7の周囲に58－E6・E7・E8,57－E6・E7・E8の6グリッドを設け，A地区として発掘する。

13日(晴)　A地区の発掘。

14日(晴)　A地区の発掘。

15日(晴)　A地区の発掘。

16日(晴)　A地区の発掘。D地区の埋戻し。

17日(晴)　A地区第Ⅳ層（上部遺構）と第Ⅴ層の発掘。

18日(晴)　A地区第Ⅵ層（下部遺構）の発掘。C地区埋戻し。

19日(晴)　A地区竪穴住居地の実測と写真撮影。A地区埋戻し。第2次調査完了。

(5) 調査組織

1976年・1977年度における調査組織の構成はつぎのとおりである。

調査責任者	沖縄県教育委員会教育長	仲宗根　繁
調査員	興南高等学校教諭	嵩元政秀（1976年・1977年）
	〃	長嶺　操（1976年のみ）
	沖縄県教育庁文化課専門員	金武正紀（1976年・1977年）
	沖縄国際大学OB	比嘉春美（1977年のみ）
調査参加者	沖縄県教育庁文化課主幹	名嘉正八郎（1976年・1977年）
	〃　専門員	上江洲敏夫（1976年のみ）
	〃　主事	屋良利通（1976年のみ）
	沖縄国際大学OB	嵩原安智（1977年のみ）
発掘人夫	1976年度は毎日15名	
	1977年度は毎日15名	

Ⅱ 遺跡の位置と環境

本遺跡は沖縄県中頭郡勝連村字津堅小字与那原１９４７～１９５２番地と１９９３番地に位置し，約5,０００㎡の広がりをもつ。

津堅島は面積1.92㎢の小島で，琉球石岩を基盤とする。 島の北西側には海に突出した島尻層が少し見られる。島の周囲にはセナハ浜，アギ浜，キガ浜，和名浜，ヤジリ浜，泊浜など砂丘が多い。島をとりかこむ形でリーフが発達しており，砂浜とリーフまでの間は魚貝類の宝庫である。この自然環境を現代人も古代人も生活の場にしている。

遺跡は津堅第二貝塚（セナハ浜），津堅貝塚（アギ浜），キガ浜貝塚（キガ浜），和名浜貝塚（和名浜），ヤジリ浜貝塚（ヤジリ浜），泊浜遺物散布地（泊浜）と発達した砂丘に圧倒的に多く砂丘にない遺跡は津堅第三貝塚とクボウグスクの２遺跡だけである。

キガ浜貝塚は島の東方にある砂丘に形成されている。キガ浜を俗にキガガニクとも言っている。一帯は霊域で，島の人々はこわがって行きたがらない。５・６０年前までは海の祈願が行なわれた所だという。津堅１７４７番地の宮城恒雄（７８才）は「祭りの日は漁夫が総出で，西の海でザン（ジュゴン）をとって，ヤジリ浜で船からおろし，そこからキガ浜まで，海岸線をみんなで引っぱって運び解体した。ザンの肉をザンガーサ（オオバギの葉）にのせ，石の上に供えて長老が東の海に向って祈願した。婦女子の参加は認められなかった」と話してくれた。話の内容は少し違うが仲松弥秀氏もこの話を収録している。(1)

キガ浜の東方にはリーフが発達しており，島の人々は潮干狩やいざりで多くの魚貝類を取ってくるという。発掘中に一度潮干狩へ行ったがサラサバティ，イモガイ，クモガイ，マガキガイ，ヒザラガイなどが採れた。古代人もこの海を多いに生活の場にしていたと考えられる。それは後述する貝・魚の種類と量でも理解できよう。

本遺跡の近くには湧水が確認できない。水をどうして確保したのだろうか。現在島には西海岸にだけしか湧水はない。(2) 西海岸にはホートガー，クラチャガー，イスチガー，ミーガーなどの湧水があり，特にホートガーは水量も多い。キガ浜貝塚人はこの西海岸の湧水を利用したのだろうか。あるいは東海岸にも当時は湧水があったのだろうか。

注　1・2 仲松弥秀「村落形成と祭祀民俗」　津堅島地割調査報告書　　1977
沖縄県教育委員会

Ⅲ　層　　序

本遺跡の層序は第４図に示すとおりである。遺跡を第３図のようにＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地区にわけているので，各地区ごとの層序を見ていきたい。

Ａ地区は，第Ⅰ層黄褐色砂層，第Ⅱ層暗褐色砂層，第Ⅲ層黒褐色砂層，第Ⅳ層黒色砂・石灰岩礫混入層（上部遺跡），第Ⅴ層黒褐色砂・石灰岩礫混入層，第Ⅵ層黒色砂・石灰岩礫混入層（下部遺構）の６層からなり，第Ⅶ層は地山（マージという琉球石灰岩風化土）である。第Ⅲ層と第Ⅳ層との間に一部ではあるが，黄褐色砂層の間層が見られ，いくらかの時間差を見る。第Ⅰ層と第Ⅱ層の０～１５㎝までは沖縄の貝塚編年の後期の土器が検出される。若干前期の土器も混入するが，それは混入遺物であり，層序としては後期である。第Ⅱ層の１５～３０㎝と第Ⅲ層の０～１５㎝一帯がカヤウチバンタ式土器を中心とする所で，前期末と考えられる。第Ⅲ層１５㎝以下はカヤウチバンタ式土器はほとんどなく，大山式土器や伊波・荻堂式土器などが共伴し，奄美系土器も多い。Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層はカヤウチバンタ式土器や大山式土器は見られず，奄美系土器も僅かである。ほとんど伊波・荻堂式土器である。

なお，Ｃ１４測定によって，第Ⅳ層が３１８０±９５Ｙ・Ｂ・Ｐ，第Ⅴ層が３２００±６５Ｙ・Ｂ・Ｐ，第Ⅵ層が３４２０±１００Ｙ・Ｂ・Ｐの年代が出た。

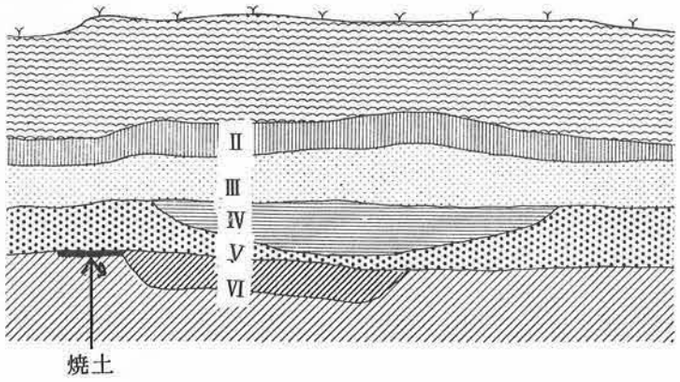
Ｂ地区は，第Ⅰ層黄褐色砂層，第Ⅱ層暗褐色砂層，第Ⅲ層黒褐色砂層である。第Ⅱ層と第Ⅲ層０～１５㎝まではＡ地区と同じで，カヤウチバンタ式土器が主体である。特にカヤウチバンタ式土器はこの地区で多い。第Ⅲ層１５㎝以下は伊波・荻堂式土器や大山式土器が共伴する。

Ｃ地区は，第Ⅰ層黄褐色砂層，第Ⅱ層暗褐色砂層，第Ⅲ層黒褐色砂層，第Ⅳ層黄褐色砂・軽石混入層，第Ⅴ層黄褐色軽石層，第Ⅵ層は地山（マージ）である。この地区は第Ⅱ層は土器が僅かに検出されたが遺物包含層という程ではなく，第Ⅲ層が遺物包含層である。Ａ・Ｂ地区と違って，カヤウチバンタ式土器が見られないのが特徴である。伊波・荻堂式土器の層である。第Ⅳ層からも僅かに検出されたが，第Ⅲ層からの落ち込みと考えられる。第Ⅳ層で軽石がかなり混入しているが，第Ⅴ層は砂が僅かでほとんど軽石である。意識的に軽石を持ち込んだようではないし，海底火山の爆発で大量に軽石が打ち上げられたのではなかろうか。

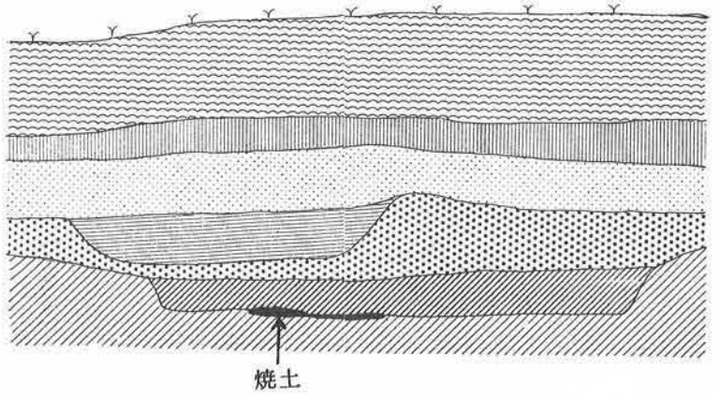
Ｄ地区はＡ・Ｂ・Ｃ地区と違って砂丘ではなくマージである。砂丘はＣ地区とＤ地区の間で切れている。マージ層であるので，約４０㎝で琉球石灰岩の基盤に達する。層序は耕作でほとんど撹乱されている。第Ⅲ層というのは遺構内で，ここだけは未撹乱層である。荻堂式土器も少し見られるが，主に大山式土器からカヤウチバンタ式土器にかけてが多い。Ｄ地区とＢ地区の第Ⅱ層・第Ⅲ層０～１５㎝，Ａ地区の第Ⅱ層・第Ⅲ層０～１５㎝はほぼ同じ時期で，大山式土器からカヤウチバンタ式土器の時期と考えられる。

Ｅ地区は，第Ⅰ層黄褐色砂層，第Ⅱ層・第Ⅲ層とも暗褐色砂層だが，第Ⅲ層は第Ⅱ層に比して硬い層である。第Ⅱ層・第Ⅲ層とも遺物包含層で後期の遺跡である。Ｃ地区の前期遺跡はこの地区ま

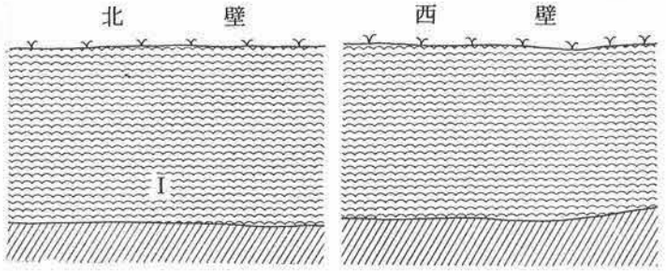
A地区　57－E7・58－E7の東壁断面図



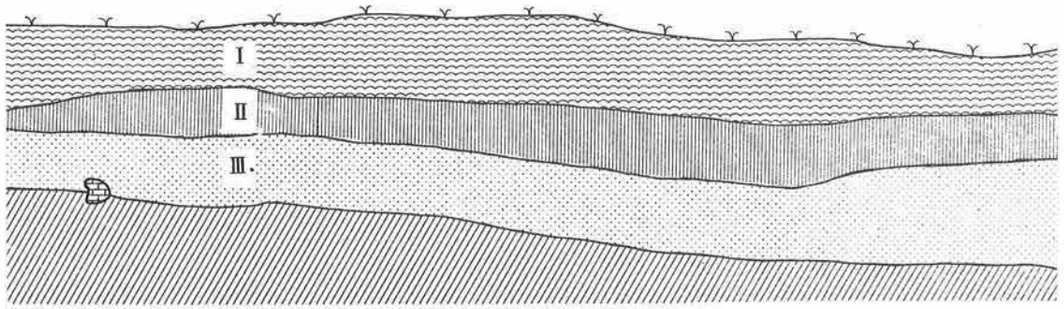
A地区　58－E6・58－E7南壁断面図



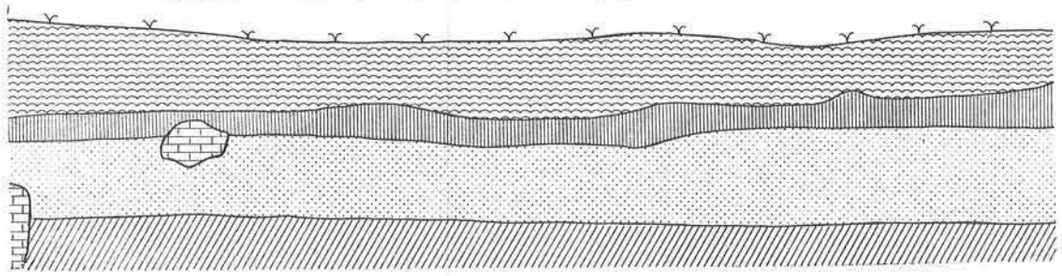
第1試掘



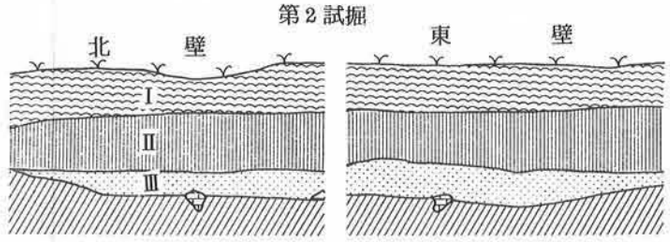
B地区　50－W1－50－0－50－E1の北壁



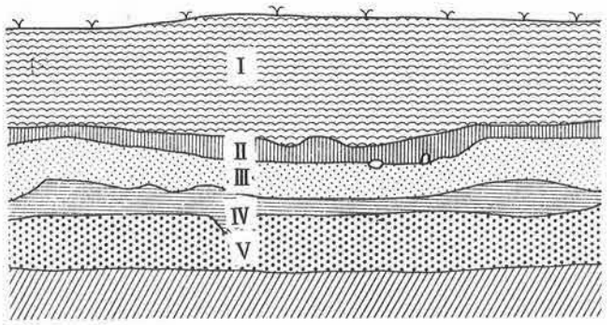
B地区　51－0・50－0・49－0の東壁



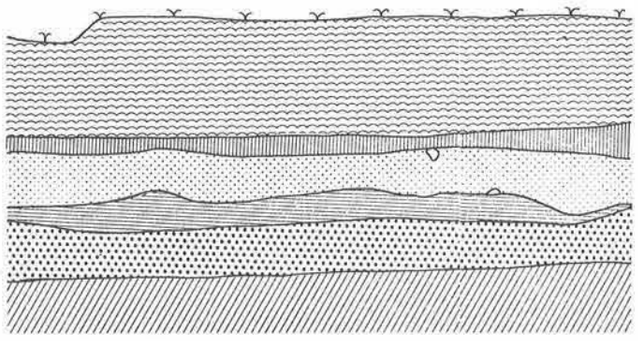
第2試掘



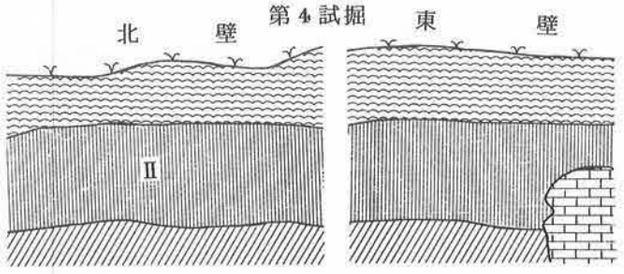
C地区　東　壁



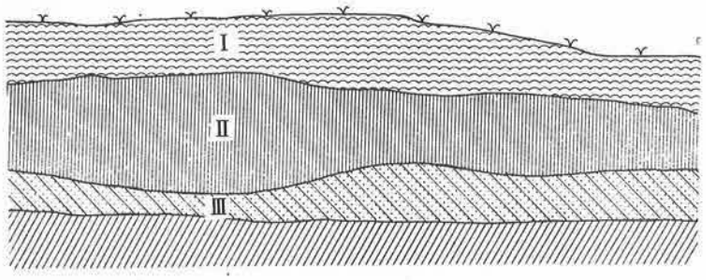
C地区　南　壁



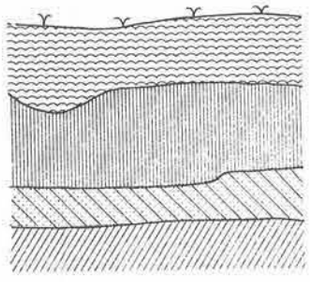
第4試掘



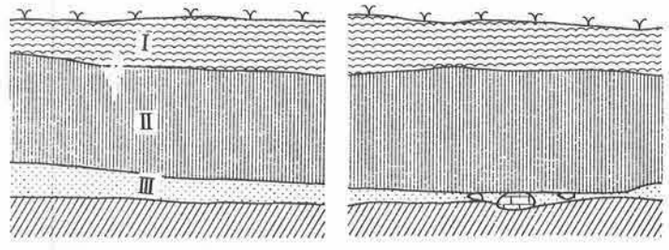
E地区　24－0・24－E1北壁



E地区　20－0　西　壁



第5試掘



第4図　発掘地区断面図

では延びていない。

試掘グリットは試掘２・４・５で遺物が僅かに検出されたのみで，あとはまったく遺物が見られなかった。

Ⅳ 遺　構

1 竪穴住居址

検出された竪穴住居址は第５図（ＰＬ．６）と第７図（ＰＬ．５－１）の２基である。

第５図はＡ地区第Ⅵ層で検出された竪穴住居址で，約２ｍ８０㎝×２ｍ５０㎝のほぼ方形のプランである。マージ（琉球石灰岩の風化土で赤褐色土）を約３０㎝掘り込んでつくられている。中央には炉跡と考えられる焼石と焼土の部分があり炭が多い。入口はほぼ西方に向けて，マージを掘り残して幅約６０㎝の傾斜した入口をつくっている。

柱穴は検出できなかったが，この竪穴の場合，床面はすぐ琉球石灰岩の基盤になっているので，床面に柱穴を掘ることはできなかったと考えられる。したがって外にしか考えられないが，それが確認できなかった。周囲に雑に置かれている石（琉球石灰岩）は住居址と関係のあるものではなかっただろうか。

この竪穴内からは伊波・荻堂など古い土器が検出され，大山・カヤウチバンタ式土器などは見られない。伊波・荻堂式土器でも伊波式土器が多い。炉跡の木炭でＣ１４測定をした結果，３４２０±１００という年代が出ており，ほぼ妥当な年代ではないかと考えられる。

これまで伊波・荻堂式土器に伴なう住居址は確認されていない。このように竪穴住居址がはっきりと確認されたことにより，沖縄における竪穴住居址は，伊波・荻堂式土器の時代まで遡ることが確認できた。これまで確認されている竪穴住居址は西長浜原遺跡における前期末の竪穴住居址(1)，宮城島シヌグ堂遺跡における中期の竪穴住居址(2)などであり，前期初の竪穴住居址はこのキガ浜貝塚での検出がはじめてである。

第７図はＤ地区第Ⅲ層で検出された遺構である。発掘地区の北東角（５０－Ｗ８グリッド）に一部だけ検出されたが，時間がなく，全体を検出することはできなかった。この遺構は竪穴住居址の一部と考えられる。竪穴はマージを掘り込んでつくられており，竪穴内には土器，貝殻などが多い。時期的には前記の住居址よりは下り，前期末で，西長浜原遺跡の竪穴住居址などとほぼ同時期のものかと考えられる。荻堂式土器も僅かに検出されたが，大山式土器やカヤウチバンタ式土器などが主である。竪穴の外に柱穴と考えられるのが２つ検出された。

2　土　　壙（?）

第6図(上)はA地区第Ⅳ層で検出された遺構で,約2ｍ20㎝×1ｍ80㎝のほぼ楕円状の遺構で,深さは約20㎝である。住居址ではないし，土壙かと思われる。この遺構を上部遺構と呼ぶ。遺構内から多くの土器片が検出された。特にまとまった土器片で，復元した土器のうち3個はこの遺構内からである。土器は単篦の荻堂式土器がほとんどである。

第6図(下)はC地区第Ⅴ層の軽石層(無遺物層)にある穴で，第Ⅳ層から掘り込まれており，人意的なものと考えられるが，用途が不明であり，一応ここに記載しておく。

3　石　組　遺　構

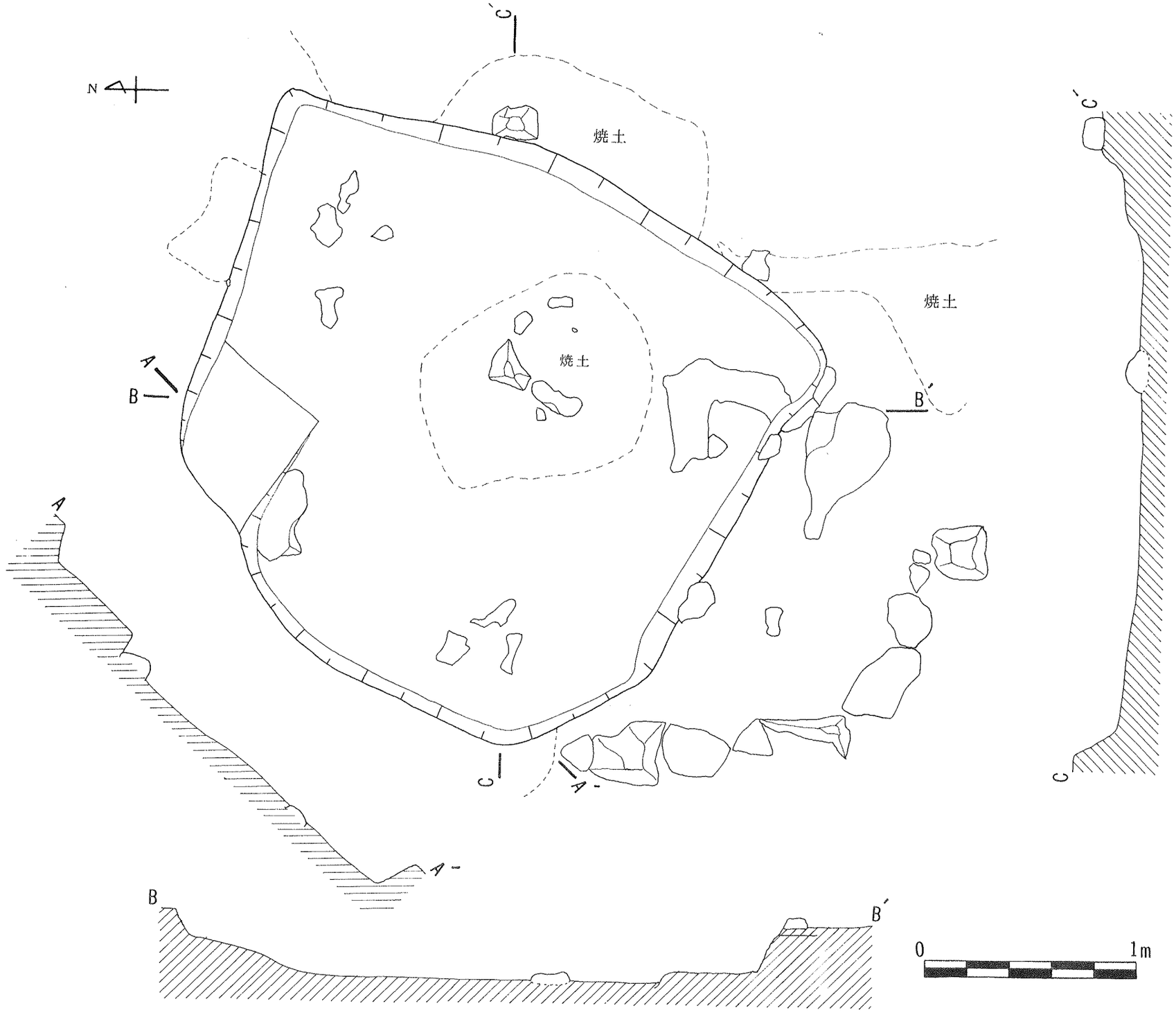
第7図（PL．5）に見られる石組遺構で，琉球石灰岩を不規則に並べているようである。石組内のところどころに焼土の部分がある。図の中で点線で囲んだ部分である。この石組は石敷住居址の一部なのか，別の目的の石組なのか，今のところ不明である。

収　　束

遺構と考えられるのを述べたが，明確に遺構の性格がわかるのは竪穴住居址だけである。伊波・荻堂式土器の時代の竪穴を確認したことは成果だと考えられるが，今後は発掘面積を広げて，点としての住居址から，面としての集落の解明が急務であろう。

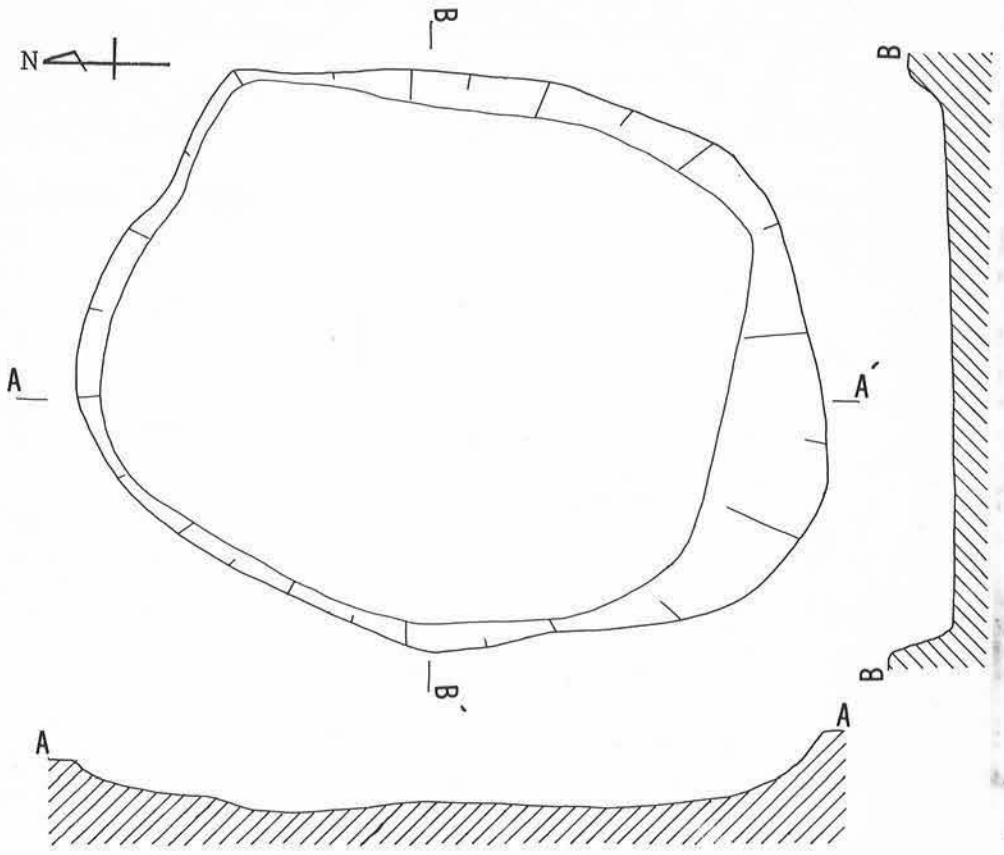
注1. 宮城長信「西長浜原遺跡発掘調査ニュース第4号」１９７７
沖縄県教育委員会

注2. 安里嗣淳「宮城島シヌグ堂遺跡」１９７７
与那城村教育委員会

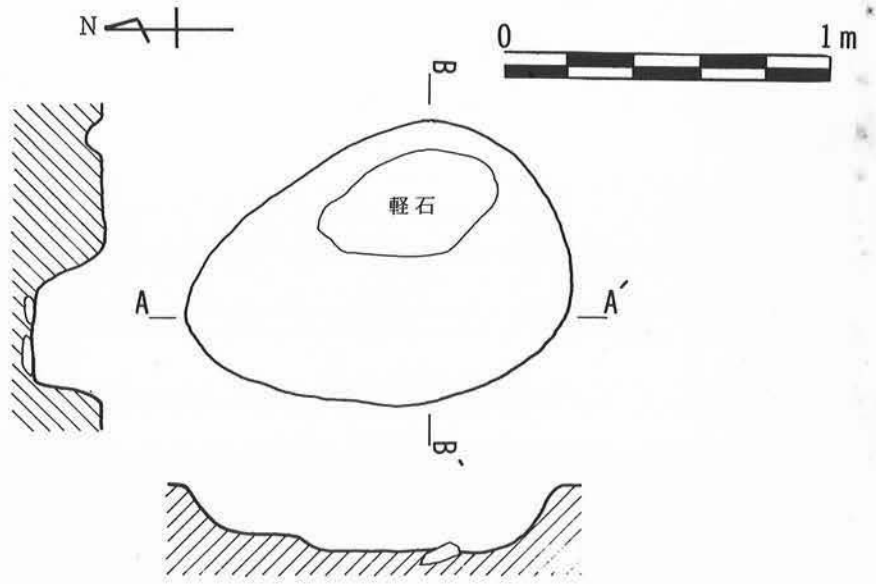


第5図　遺構（A地区Ⅵ層の竪穴住居址）

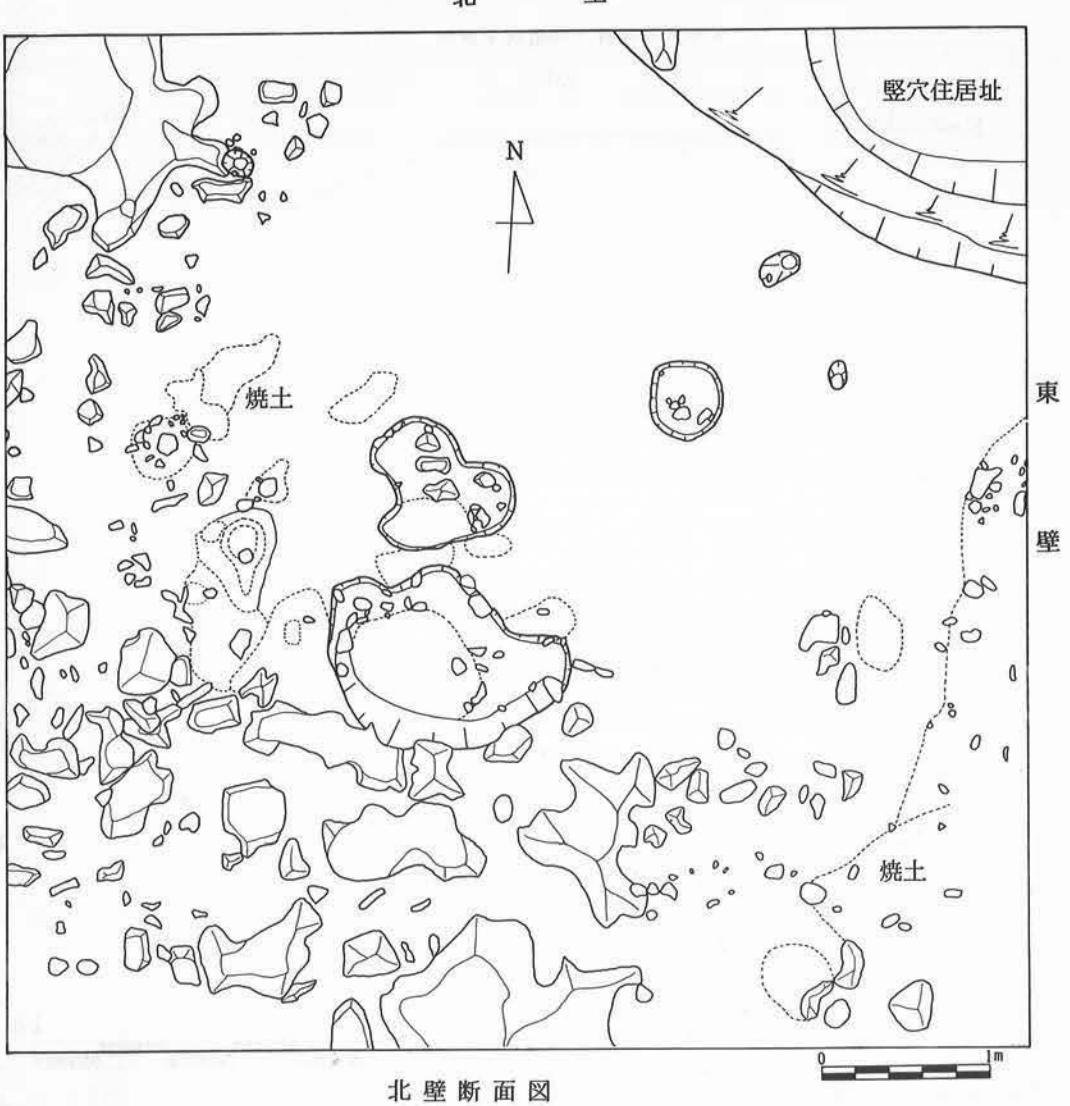
A地区第Ⅳ層上部遺構平面図



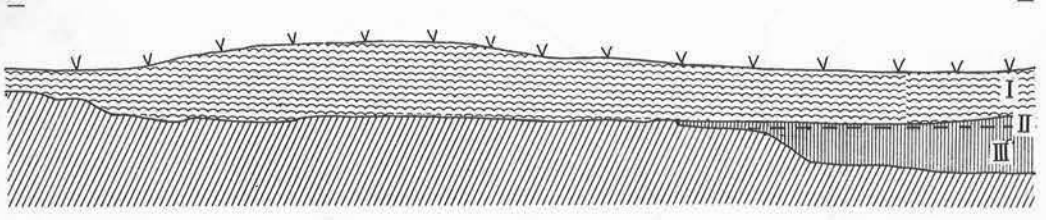
C地区第Ⅴ層（軽石層）にある掘り込み平面図



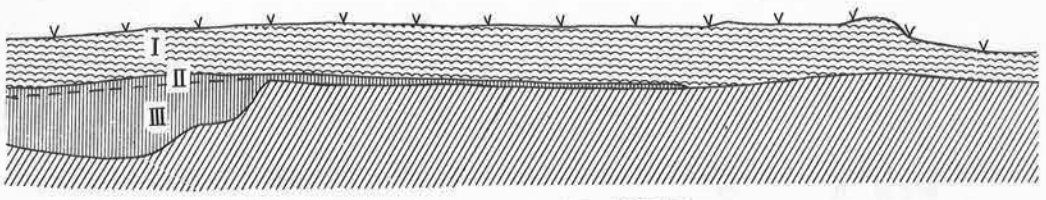
第6図　遺　　構



北壁断面図



東壁断面図



第7図　D地区遺構平面図・断面図

V 遺　物

1 石　器

石器は第1表に示した24個で，種類は石斧14個，敲石4個，凹石2個，石皿1個で用途不明のが3個である。石質は砂岩(10)，砂質片岩(4)，片状砂岩(2)，輝緑岩(2)，緑色片岩(1)，結晶片岩(1)，角閃石(1)，不明(2)である。

なお，石器片として第2表に示してあるのは，研磨痕や打痕などが残っているが，小破片のため，どのような石器の破片なのか明確でないものである。

(1) 石　材

石器をつくる石材には多くの種類があるが，本遺跡出土の石材は第2表に示した12種類である。津堅島で産出せず，石器をつくるために持ち込んだと考えられるものを石材，津堅島で産出する石，あるいは石器としての使用例のない礫を自然礫として大別した。石材と考えられるものは，砂岩，細粒砂岩，粗粒砂岩，粘板岩，千枚岩，結晶片岩，石灰質砂岩，チャートの8種類である。

持ち込まれた石材の種類別出土状況を見ると，砂岩が620個で34,450g，個数で60.96%，重量で68.48%と圧倒的多く，ついで粗粒砂岩が個数で12.38%（126個），重量で7.03%（3,536g）となっている。最も少ないのはチャートで2個だけ検出された。

(2) 石　斧

第9図1～7，第10図1～5・8・9に示した14個で，A地区6個，B地区4個，C地区3個，D地区1個の出土状況である。すべて破損品で，石斧全体の大きさや，使用痕などは不明である。石斧には両刃と片刃があるが，片刃は1個だけで，あとはすべて両刃である。

第9図1は厚手の石斧で，刃部はよく研磨されているが，あとは自然面のままである。片方の刃部に再研磨の痕があり，刃が小さく破損したので，その部分を研磨して再使用したと考えられる。第9図3・4・7も刃部はよく研磨されているが，胴部から頭部にかけては自然面のままである。7は胴部に凹状をなした打痕があり，使用するときの機能的なものと考えられる。おそらく柄を付ける為のものではなかろうか。

第9図5は唯一の片刃石斧でよく研磨されている。破片のため全体の形状や製作手法などは窺えないが，中期によく検出される片刃石斧に似ている。カヤウチバンタ式土器を主体とするB地区第Ⅱ層からの出土である。

第９図６は全面磨製の両刃石斧であったと考えられるが，横に大きく割れている。その割れ痕に研磨痕が少しあり，片刃状のまま再使用したと思われる。第１０図１は全面磨製の石斧で，扁平である。第１０図１は第９図６と同様に横に割れたあと割れた部分を研磨して片刃石斧の状態で再使用したと考えられる。

(3) 敲　　石

第１１図２・５・６の３個で，Ａ地区から２個，Ｂ地区から１個検出された。第Ⅰ層，第Ⅱ層からは１個も検出されず，すべて第Ⅲ層以下である。第１１図２・６は敲石と同時に磨石としても使用していたと考えられる。敲石としては小型のもので，中期に出てくる大きめのものは見あたらない。

(4) 凹　　石

第１０図１１，第１１図１の２個でいずれもＡ地区第Ⅵ層の出土である。第１１図１は打痕，研磨痕などもあり，いろいろな用途に用いられたと思われる。第１０図１１は一面は破損しているが，一面と両側面に凹があり，おそらく破損したもう一面にも凹があったと考えられる。

(5) 石　　皿

第11図3に示す1個で，Ｂ地区第Ⅲ層から検出された。破損しているが，研磨面がよく残っている。石皿は前期前半の遺跡からの報告はあまり見られないが，前期末から中期には多い。西長浜原遺跡[(1)]や宇佐浜遺跡Ａ地点[(2)]などからは多く検出されている。

(6) 用途不明石器

第10図6は川の円礫から割れた破片の割面に刃状に研磨痕がある。石包丁のような何かを切るための刃器として使用したのではないかと思かれるが，類例がなく断言できない。

第10図10は側面が刃状になっている。おそらく細長の石器で両側面とも刃状になっているのではないかと思う。上下については不明。この種にやや類似の石器がシヌグ堂貝塚から採集されている[(3)]。

第11図4は非常に薄い短冊状の石器で，両面・両側面ともよく研磨されている。ただ上下が破損しているので全体の形状は不明である。

収　　束

検出された石器は２４個で，使用不能な破損品ばかりである。使用できるような石器は集団の移動のとき持ち出したのだろうか，興味のあるところである。

石質は第１・２表でわかるように，津堅島で産出するのは１個もない。もともと琉球石灰岩の島であり石材になるような石は産出しない。よって石材は，嘉陽層（砂岩），名護層（砂質片岩，緑色片岩，片状砂岩，結晶片岩），今帰仁層（チャート）など沖縄本島北部から主に求めている。さらに北部だけでなく，遠く慶良間諸島（輝緑岩，角閃石）からも求めている。

石器の中で特に石斧について観察してみると，厚手の石斧は刃部のみはよく研磨されているが，胴部から頭部にかけてはほとんど自然面である。石斧に使える手ごろな石を川や海から探して，刃部のみ加工し，研磨したように考えられる。扁平（薄手）の石斧は全面磨製で，石斧としての大きさも厚手よりはいくらか小型のように思われる。この厚手と薄手の石斧の層序的違いは確認できなかったが，今後の研究に期待したい。

注１.　１９７７年の西長浜原遺跡の発掘で多く検出された。

注２.　宇佐浜遺跡Ａ地点の発掘で検出された。

注３.　金武正紀「宮城島の先史及び原史遺跡調査概要」郷土第２号　１９６５

図番	版号	器種	法量 最大幅	最大長	最大厚	重量	石質	石材出土地	出土地点及び備考
9	1	両刃石斧	4.2	7.4	2.8	110	砂岩	嘉陽層	破損　Ｂ－Ⅲ
	2	両刃石斧	2.9	10.5	3.1	98	砂質片岩	名護層	〃　Ｃ－Ⅲ15
	3	両刃石斧	3.5	6.5	3.3	98	輝緑岩	ケラマ？	〃　Ａ－Ⅱ
	4	両刃石斧	3.8	10.5	1.6	113	砂質片岩	名護層	〃　Ｃ－Ⅱ
	5	片刃石斧	4.1	5.8	1.5	44	〃	〃	〃　Ｂ－Ⅱ
	6	両刃石斧	3.7	7.1	0.7	30	緑色片岩	〃	ほぼ完形　Ａ－Ⅲ
	7	両刃石斧	5.9	8.3	3.3	245	砂岩	嘉陽層	破損　Ａ－Ⅲ
10	1	両刃石斧	5.1	6.8	1.7	95	〃	〃	破損　Ｂ－Ⅲ0／15
	2	石斧の頭部	5.1	8.5	3.2	242	〃	〃	Ｂ－Ⅲ30／45
	3	石斧の頭部	5.1	3.6	3.1	90	〃	〃	〃　Ａ－Ⅲ
	4	両刃石斧	4.4	3.9	0.7	18	輝緑岩	ケラマ？	Ａ－Ⅲ
	5	不明	2.4	6.1	2.5	71	結晶片岩	名護層	破損　Ｃ－Ⅲ
	6	石斧の頭部	6.9	4.4	1.2	33	砂岩	嘉陽層	〃　Ａ－Ⅳ下
	7	不明	6.8	5.1	1.3	55	？		〃　Ａ－Ⅵ下
	8	不明	4.2	6.3	2.2	88	片状砂岩	名護層	Ａ－Ⅱ下
	9	石斧の胴部	4.3	3.7	1.7	39	〃	〃	破損　Ｄ－Ⅰ
	10	石斧の頭部	3.3	3.8	1.1	25	角閃石	ケラマ	〃　Ｃ－Ⅱ
	11	凹石	7.9	10.2	4.3	549	？		〃　Ａ－Ⅵ下
11	1	凹石	6.7	5.3	3.6	202			Ａ－Ⅵ下
	2	敲石	5.7	7.2	5.3	345	砂岩	嘉陽層	Ａ－Ⅲ30／40
	3	石皿	17.8	26.7	5.8		〃	〃	Ｂ－Ⅲ15／30
	4	不明	4.1	8.3	0.7	45	砂質片岩	名護層	Ｂ－Ⅲ
	5	敲石	7.0	8.8	5.1	420	砂岩	嘉陽層	Ｂ－Ⅲ
	6	敲石	9.1	7.2	3.6	430	〃	〃	Ａ－Ⅲ

第１表　石器出土一覧表　　単位（cm・g）

種類	石質	石材出土地	A												B						C								D						E		合計	
			I		II		III		IV		V		VI		I		II		III		I		II		III		IV		I		II		III		III			
			個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
石材	砂岩	嘉陽層	4	382	3	21	45	332	13	241	2	91	4	2,079			69	5,155	106	12,953	3	41	53	3,255	120	6,239			148	1,479	28	157	21	910	1	1,115	620	34,450
	細粒砂岩	〃					8	156									5	783	2	68					8	544	1	9	7	48	1	1					32	1,609
	粗粒砂岩	〃	2	95			11	62	1	15	2	67	1	6			20	985	15	853	1	3	15	578	18	484			28	282	6	42	4	44	2	20	126	3,536
	粘板岩	〃	2	210			11	386	6	9			1	180			5	255	8	931	1	1	5	75	17	372			26	178	2	9					84	2,606
	千板岩	名護層	2	9			10	28			1	8	1	2			2	130	7	124			5	79	7	111			3	31	2	4					40	526
	結晶片岩	〃					3	14									15	274	13	222			4	127	24	459			29	114			1	2			89	1,212
	石灰質砂岩	島尻層	1	56			1	17									5	670	8	4,225			2	135	4	1,053			2	141			1	36			24	6,333
	チャート	今帰仁層及び伊江島伊平屋，伊是名															1	10											1	15							2	25
自然礫	砂質泥岩	島尻層					3	19	1	10							3	281	8	465			2	128	8	408			27	191							53	1,507
	石灰質泥サンゴ塊	石灰岩					16	97	41	75							2	33	9	312			2	34	16	21			59	606					2	55	147	1,233
	方解石	石灰岩(?)					3	5																													3	5
	ニービ	島尻層																											5	132	5	82	1	25			28	112
	円礫						3	22	14	44	1	9													6	11			4	26							11	239
	合計		11	752	3	21	114	1,138	76	394	6	175	7	2,267			127	8,576	176	20,153	5	45	88	4,411	228	9,702	1	9	339	3,243	45	300	28	1,017	5	1,190	1,259	53,393
石器片	砂岩	嘉陽層			1	11	2	130									1	201			1	51	1	25	10	1,255			19	718	1	5	2	615			38	2,911
	細粒砂岩	〃					4	1,130																	1	60			1	3							6	1,193
	粗粒砂岩	〃			1	65	1	78																													3	166
	粘板岩	〃																											1	5							1	5
	合計				2	76	7	1,338									1	201			1	51	1	25	11	1,315			21	726	1	5	2	615			48	4,275

注　1. 表面採集で１５コ（２５４g）出土した石質は，砂岩，結晶片岩，砂質泥岩である。
第１試掘穴で石器片（粗粒砂岩）が１個出土した。

単位（個）：(g)

第２表　石材・自然礫・石器片出土状況

2　土　　器

本遺跡で検出された土器は第３・４表のとおりである。これらの土器を口縁部，文様，焼成等によって，Ⅰ群土器（沖縄の前期土器），Ⅱ群土器（奄美系土器），Ⅲ群土器（沖縄の後期土器）に大別した。さらにⅠ群，Ⅱ群土器については，土器型式によって何類かに分類した。復元作業によって復元できたのは６個で，図上復元したのが１個，口縁部のみの図上復元が１６個である。あとはすべて文様，口縁，焼成，混和材などによる型式分類である。

Ⅰ群土器から順を追って記述するが，伊波式土器，荻堂式土器，カヤウチバンタ式土器については出土量も多いので土器づくりの順序から，①素地と混和材，②成形，③器形とサイズ，④調整，⑤文様，⑥焼成に分けて述べたい。

A　Ⅰ群土器（沖縄の前期土器）

沖縄の前期土器は，縄文後期に比定される時期である。本遺跡出土の土器を型式によって，伊波式土器，荻堂式土器，大山式土器，地荒原Ａ式土器，カヤウチバンタ式土器などに分類した。そのほかに型式がまだ設定されてない土器を型式不明とした。伊波式土器，荻堂式土器は室川貝塚出土の土器による伊波式土器，荻堂式土器の型式設定[(1)]を主に取り入れて分類した。

第一類土器　　伊波式土器

(1)　素地と混和材

土器をつくるにはまず素地づくりからはじまる。土器を強化するために粘土に石英，長石，石灰岩細片などを混和材として混ぜている。県立博物館の大城逸朗氏の肉眼観察によると「石灰岩細片と長石が多く石英は少ない」ということであった。また胎土に混和している白色細片に塩酸をかけてみると発泡したので，白色細片は石灰岩細片（又は貝の細片）だと考えられる。これらの混和材は津堅島でとれるかということだが，「琉球石灰岩地帯のマージには石英，長石などが少し混入している」と大城氏はいう。この話によると琉球石灰岩からできている津堅島にも石英，長石はあると考えられる。しかし土器には多量に混和しているので，やはり混和材として意識的に使ったものと考えられる。

(2)　成　　形

成形にはロクロや回転台は使用されていない。粘土紐を積み上げていく輪積みの手法をとっている。粘土紐の接合部には指圧痕や接合目を消すための擦痕などが見られる。

成形の順序としては，底部からつくって，胴部，口縁部へと積み上げていく手法だと考えられる。

型式名 ＼ 地区・層序				A							B			
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	小計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計
前期土器	伊波式					15	3	17	3	38			1	1
	荻堂式	二叉	鋸歯		2	31	5	3	5	46		1	12	13
			綾杉			14		2	2	18		1	1	2
			鋸歯・綾杉なし		1	72	8	16	1	98		8	11	19
		単ベラ	鋸歯		1	18	4	1		24				
			綾杉			3	2	1		6				
			鋸歯・綾杉なし		6	47	11	18	6	88		5	18	23
	大山式				2	10				12	1	1	14	16
	カヤウチバンタ式			1	13	23				37	1	39	48	88
	型式不明		①			2				2				
			②			1				1		1	1	2
			③			1				1				
			④				2			2		1		1
			⑤									1	4	5
	小計			1	25	237	35	58	17	373	2	58	110	170
奄美系土器	面縄東洞式				1	1				2		1		1
	喜念Ⅰ式					1		1		2			1	1
	宇宿上層式 *a*												1	1
	型式不明		①			5	2	1		8		1		1
			②			2				2		4	1	5
			③										4	4
			④			6				6		1		1
			⑤				1			1			1	1
			⑥		1	3		2		6		1		1
			⑦											
			⑧		1	1				2				
			⑨						1	1				
	小計				3	19	3	4	1	30		8	8	16
後期土器	直口			3	1					4				
	外反													
	浅鉢				2					2				
	胴部	有孔		2						2				
		有文												
底部	平底	平底		1	2	13	5	9	1	31		3	3	6
		直底				7	5	3		15		3	2	5
		中期的底			4	9			1	14		2	14	16
		奄美的底				1	1			2		3		3
	乳房状尖底													
	小計			6	9	30	11	12	2	70		11	19	30
合計				7	37	286	49	74	20	473	2	77	137	216

第3表　有文土器・口縁部・底部の層序別出土一覧表

C					D				E				2			4	5	不	合
Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	小計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅲ	Ⅱ	明	計
		8	2	10															49
	3	9	1	13		2		2					1		1			1	76
1		5		6			1	1					1	1	2				29
	2	24	2	2		3	2	5										1	151
	1	10	1	12		1		1											37
		3	2	5			1	1					1		1			1	14
	7	24		31	1	6	3	10					2	1	3			5	160
	4	16		20		2	6	8											56
	4	5		9	3	20	4	27										3	164
																			2
																			3
																			1
																			3
							2	2								1			8
1	21	104	8	134	4	34	19	57					5	2	7	1		11	753
																1			4
																			3
																			1
																			9
		1		1															8
		1		1															5
		1		1															8
																			2
		4	2	6															13
		1		1															1
	3	4	1	8															10
																			1
	3	12	3	18												1			65
3	2			5					1	21	15	37							46
										1	1	2							2
																			2
										2	1	3							5
										1	1	2							2
		6		6			3	3											46
	3	2	1	6		1		1											27
	3	3		6	1	2		3											39
	1	1		2		3		3											10
											3	3							3
3	9	12	1	25	1	6	3	10	1	25	21	47				2			182
4	33	128	12	177	5	40	22	67	1	25	21	47	5	2	7	2		11	1,000

地区	A	B	C	D	E	試掘穴				不明	計
						2	3	4	5		
表採										2	2
Ⅰ	33		71	275							379
Ⅱ	290	663	187	463	146	20		7	45		1,821
Ⅲ	1,452	1,083	704	203	256	23	22				3,743
Ⅳ	352		62								414
Ⅴ	290										290
Ⅵ	78										78
計	2,495	1,746	1,024	941	402	43	22	7	45	2	6,727

第４表　　土器無文胴部層序別出土状況

(3)　器形とサイズ

復元できるのは１個もないので，器形とサイズについては不明であるが，室川貝塚出土の器形について，「一般に深鉢形で，口縁部は外反し，頸部でしまり，胴部がわずかに脹る平底器形の土器である。口縁部が開くために，器の最大径は一般に口縁にある。口縁部には普通４個の山形突起が付けられる……。荻堂式にみられるような意識的に山形頂部を瘤状に肥厚させる例は見受けられなかった」と報告している[(2)]。本遺跡出土の破片でも室川の報告に該当すると考えられる。荻堂式に見られる瘤状に肥厚させる山形突起はない。また，底部はすべて平底である。

サイズについても不明であるが，室川貝塚出土の復元土器で見ると口径１５～２０㎝，高さ約１０～２０㎝であり，本遺跡出土の土器もほぼそれくらいだろうと思われる。

(4)　調　　整

土器の型ができると，型を整える作業がある。調整の手法として篦削りや篦磨き，刷毛目などは１個も見られない。擦痕が器面にあるのはいくらか見られるが，内面にはほとんど見られない。脆弱な土器のため，内面が崩れているのが多く，そのとき消えたのもあると思う。しかし器面は滑らかに調整されて面の保存は良いが，そこにも少ない。室川貝塚では７５％の土器に擦痕が見られたというが[(3)]，本遺跡の土器は室川貝塚出土土器に比して少ないようである。

(5)　文　　様

文様はすべて二叉工具による施文である。施文範囲は口唇部，口縁部，頸部，肩部までで胴部から底部にはない。文様構成は山形突起の下に縦位の文様を配し，縦位と縦位の文様を結ぶ形で

横位の文様を配するパターンである。

文様を施文していく順序としては，縦位の文様を主に山形突起の下に施文し，つぎに横位の文様を施文する。横位の文様は口縁部から頸部，肩部へと上から下への順序で施文されている。それは文様の切り合い関係で確認できる。

文様には点と線があるが，その組み合せによって，つぎのように細分した。

① 点のみの文様構成

ここでいう点とは烈点で，点と点が切れている。二叉工具で点を施文し，工具を器面から離してからつぎの点を施する方法である。

第14図1・2・7・10，第15図2・5・6，第23図4に示した土器で，縦位＋横位の烈点である。縦位は山形突起の下にあり，つぎの縦位の文様とを結ぶ形で横位の烈点が口縁と頸部（又は肩部）にある，そして上の横位烈点と下の横位烈点の間は空間になっている。この空間は点のみの文様構成にある特徴で，これは，伊波貝塚[5]，荻堂貝塚[6]，室川貝塚[7]などでも例外はあるが，ほとんどこの構成である。文様の数は縦位が3本の二叉平行烈点文で，横位は上・下とも2本の二叉平行烈点文の組み合せが最も多い。点の刻文が深くて力強い施文がなされているのが特徴の一つでもある。

第14図1・2・10，第23図4は縦位，横位の文様が残っており，いずれも小さな山形突起が付いていて，全体を推定することができるが，それ以外のものは小破片で文様のほんの一部が残っているだけである。

施文の順序を考えるとき，第6図1，第23図4で縦位の文様を横位の文様が切っているので，縦位が先に施文されたことがわかる。

② 点＋線の文様構成

第14図8，第15図4・7，第23図1・2に示す5個である。第14図8は縦位の組み合せであるが，縦位が二叉の短線で，横位が4つに分れている。一番上が二叉の短線，その下に綾杉状の長・短線，つぎに3本の烈点文，一番下に鋸歯文が施文されている。器形から見ると荻堂かとも考えられるが，烈点の施文方法が①に同じである。なお，縦位の文様を上の横位文が切っており，横位烈点を下の鋸歯文が切っている。したがって施文の順序がわかる。

第15図4は2本の横位の列点文の下に鋸歯文を配する文様で，鋸歯の下にも烈点文があると考えられるが欠損している。これも荻堂式土器にもある文様構成であるが，烈点文の施文方法が力強く①と同じなのでここに入れた。擦痕が器面に若干見られる。同じようなのが室川貝塚の報告にある[4]。

第23図1は二叉烈点文の下に綾杉状の二叉平行線がある。その下にまた二叉烈点があると思われるが欠損している。第23図2は2本の二叉烈点の下に短線による鋸歯状文のあるものである。

③ 線のみの文様構成

第14図3～6，第20図1，第23図3の6個である。1本か2本の横位の二叉平行沈線を上・下に配し，その間を綾杉状の二叉平行沈線文で埋める文様構成である。

第14図3と第23図3は口唇に山形突起があり，その下に縦位の二叉平行沈線文が3本か4本見られる。これと前記の横位の文様構成を組み合せたのが線のみの文様構成の代表的パターンかと思われる。

第14図3は縦位の文様の上に山形突起が2つ並んでおり，口唇部全体にはこの小山形突起を対にする山形突起が4対あるものと考えられる。「く」字形の外反が顕著な土器で，伊波式土器の器形がよくわかる土器である。

(6) 焼　成

全体的に焼きが弱く脆弱な土器である。手で触れるたびに混和材が脱落するほど保存は悪い。接合しても長持ちしない。土器を焼くには露天焼きで，700～800度と言われているが，それ程温度は上ってないように感じられる。

(7) 用　途

これら深鉢形土器の用途は何であったかという問題があるが，煮炊き用が主ではないかと考えられる。本遺跡出土の土器ではっきり証明はできないが，一般的な深鉢形土器の用途からしてそう考えたい。土器に煤が付着しているのが数個見られた。

第二類土器　荻堂式土器

(1) 素地と混和材

伊波式土器と同じで，素地や混和材で見るかぎり，この二つは区別できない。

(2) 成　形

深鉢形は伊波式土器と同じように底部から粘土紐を積み上げていく輪積みの方法だと考えられるが，壺形土器についても同様な手法なのか不明である。

(3) 器形とサイズ

器形は深鉢形と壺形に別けられる。

深鉢形は復元したのが3個，図上復元したのが1個，口縁部から肩部までの図上復元が3個あり，ある程度器形が摑める。一つには，口唇に4個の山形突起をもち，外反が伊波式土器ほど大きくなく，口径と胴径がほぼ同じか，幾分口径が長いかの深鉢形土器で，底部は平底である。山形突起は伊波式土器より大きく，瘤状のものが多い（第12図1・3・4）。二つには，山形突起がない平口の土器で，口縁部がほとんど外反せず，胴部から口縁へ僅かに狭くなる平底の土器

である（第13図2）。

第12図4は口径約10cm，高さ約17cmの深鉢形土器である。山形突起を4個もつものとして図上復元しているが，計算して見ると4個ではかなり無理をする。実際に4個で復元作業をしたが形がまとまらなくてやめた。3個で計算するとちょうど良い。ただこれまでにこの種土器で3個の山形突起の報告例がないので，一応4個にして図化している。

第12図1は口径約10cm，高さ約17cmの深鉢形土器で，第12図4とほぼ同じサイズである。山形突起は4個である。

第12図3は口径約15cm，高さ約21cmの深鉢形土器で，前記2個よりは大きい。山形突起は4個で，突起の両側に各々一つづつの段がある。

第12図2は口縁部は欠損しているが頸部まであるので，口径約12cm，高さ約19cmぐらいの深鉢形土器である。

口縁部から肩部にかけて図上復元した第13図2は口径が約17cmであるが高さについては不明である。

無文壺形土器については，報告例は少ないが，嘉手納貝塚[8]，浜崎貝塚[9]などで検出されており，荻堂式土器と共伴する土器である。本遺跡においてもA地区第V・VI層と深い層からの出土である。第19図17・18に示す土器で，口唇部に山形突起がある。山形突起は一応2個として復元図を書いたが，嘉手貝塚出土のは2個，浜崎貝塚出土のは4個の報告がある。

(4) 調　整

伊波式土器とほぼ同じ調整のようであるが擦痕が伊波式土器に比して多い。器面には多く内面には少ない。それは内面の保存が悪く消えてしまったのがかなりあると思われる。

(5) 文　様

伊波式土器のように二叉工具による施文と，幅の広い単篦（約2mm～5mm）による施文がある。荻堂式土器の文様の特徴は，一つには，二叉平行鋸歯文か単篦による鋸歯文が1本～3本はいる文様構成が主である。二つには，刻文が深く力強さを感じさせる伊波式土器に比べ，刻文が浅く柔かい文様である。三つには，伊波式土器の烈点に対して連点であり，点と点は結ばれている。施文具を器面から離さないで力の強弱で点をつくる方法であり，それは単篦にも共通している。

文様を施文具のちがいによってつぎのように分類してみた。

① 二叉工具による施文

伊波式土器に見られる二叉工具の使い方によって，つぎのように細分した。ここでは伊波式土器にあった烈点のみの文様構成はない。

ⓐ 点のみの文様構成

伊波式土器に見られる烈点ではなく連点である。点と点がつながっているもので，施文時に

器面から施文具を離すことなく，力の強弱によって点が構成される手法である。

第14図12，第15図6・7，第23図5に示したものである。第14図12は上・下の横位のの二叉連点文の間を二叉の鋸歯状連点で埋める文様構成である。第15図6と第10図5は口縁部から頸部にかけて，横位の二叉連点が4本あり，その下に続くかどうかは不明である。第15図7は拓影で見ると線に見えるが，実物は二叉連点である。

ⓑ　点と線の文様構成

第15図9・11・12・13・15，第23図6に示した土器で，第15図9・11・12・13はいずれも肩部に2本の二叉連点があり，肩部より下に二叉の鋸歯文がある。頸部から口縁にかけても文様があると考えられるが欠損している。肩部より下まで文様を配するのは荻堂式土器に見られるものであり，荻堂貝塚[10]，嘉手納貝塚[11]，壺川貝塚[12]，熱田原貝塚[13]などの報告にもある。また，この二叉連点と鋸歯文の組み合せが荻堂式土器で多く見られる文様構成である。鋸歯の施文方法は，鋸歯一つを一回で施文する方法（第15図12）と2回で施文する方法（第15図9・11）とがある。

第15図15は二叉連点の下に羽目状の文様を配するが，小破片のため文様全体はつかめない。第23図6は口唇に二叉烈点があり，口縁部と肩部に二叉連点（短線）があり，その間を鋸歯文で埋める文様構成である。鋸歯文が上の連点を切っているので，上から下への施文順序がつかめる。

ⓒ　線のみの文様構成

第15図10，第23図7・8・11の4個である。第15図10，第23図7・11は肩部より下まで施文されており，鋸歯文が一番下の文様である。肩部から口縁部にかけても文様があったと考えられるが欠損している。7・11は縦位の文様があり，山形突起の下であろう。

第23図8は口径約10㎝の深鉢形土器で，二叉の長沈線文が2本と鋸歯文がある。

ⓓ　半裁竹管状の工具による弱い二叉の文様構成

この文様は半裁竹管状の工具による文様だと考えられるが，線（又は点）の部分が弱く，全体的には単篦の感じさえする。この施文具は二叉工具と単篦の中間的なものかと考えられる。このような工具は仲泊遺跡でも報告されている[14]。施文方法は，器面に施工具をあて，ほぼ垂直に押して横へ引っぱり，器面から離すことなく，力の強弱で深浅の変化をつける方法で，この方法を押引文と呼ぶ。

第14図11，第16図2・6・10・15・17，第17図12，第20図7，第24図2・7・8・9・10・11に示した土器である。

第14図11，第16図2・7，第24図2は山形突起のある口縁で，山形の下に縦位の文様がなく，口縁部に2～4本の横位の半裁竹管状の押引文を施文し，その下に鋸歯文を配する文様構成で，第16図15も同じタイプの破片だと思う。第14図11は同じ文様構成を二度繰りかえ

している。

第17図12は特殊な土器である。施文具が同じなので，ここで取扱ったが，文様構成が特殊である。山形突起の下に３本の縦位の文様があり，その文様を背にした「く」の字状の文様が左右に１本ずつある。さらに口縁部に横位の文様が２本走り，肩部にも何本かの横位の文様が走っている。「く」の字の文様がなければ，すぐ荻堂式だと言えるが，「く」の字の文様がどうも引っかかるし，さらに厚さが約９㎜と厚く，荒い擦痕が多いのも気になる。

② 二叉工具＋単篦の施文

第15図14に示した１個でだけなので偶然かと思われるが，これまでの文様はすべて一本の施文具を使っているのに，ここでは明らかに２本の施文具を使っている。このような例がもっと増加するのであれば，二叉と単篦をつなぐ文様になる可能性もある。

③ 単篦のみによる施文

ここで単篦というのは幅約３㎜～６㎜の篦のことで，前述の半裁竹管状の工具とほぼ同じ幅をしている。本遺跡で検出された荻堂式土器で，この単篦のみの文様が非常に多く，本遺跡の大きな特徴の一つである。後述の大山式土器も単篦による施文土器であるが，荻堂式の単篦文様は，押引文が主体で，文様構成に鋸歯文がはいる点で一応区別しておく。文様構成は横位の押引文と鋸歯文を組み合せたのが圧倒的に多い。

第12図4は図上復元した土器である。山形突起の下に３本の縦位の押引文があり，口唇部に２本，口縁部に１本，肩部に２本の横位の押引文がある。頸部は綾杉状の押引文を配している。山形突起の直下の肩部の左右に，長さ約２㎝，幅約１㎝の小さな突起（外耳）があり，口唇の山形突起が４個であれば８個，３個であれば６個付くことになる。この山形突起の頂上にも横位の押引文があり，下にも三角状に押引文を配する複雑な文様構成である。

第12図1は口縁部から肩部にかけて横位のみの文様で，口縁部に２本の押引文，頸部に１本の鋸歯文，肩部に２本の押引文，さらにその下に１本の鋸歯文という文様構成になっている。このような文様構成は荻堂貝塚[15]，壺川貝塚[16]の報告にも見られる。

第12図3は口縁部に３本の押引文，頸部は空間で，肩部にまた３本の押引文，その下に沈線による鋸歯文を配する文様構成で縦位の文様はない。

第12図2は縦位の押引文が４カ所あり，口唇には４つの山形突起があったのではないかと考えられる。縦位の押引文は４本で，肩部には横位の押引文が４本施文されている。頸部には鋸歯状の押引文を配するやや複雑な文様構成である。

第13図2は口縁部に２本の押引文があり，その下に２本の鋸歯文，さらにその下に１本の押引文，最下に１本の鋸歯文という文様構成で縦位の文様はない。この土器は器形も大山式土器に近い器形で，押引文も前述土器と違って，押引間の間隔が広くなっており，大山式土器への移行期の土器かと思われる。

その他，第16図1・3・4・5・8・9・11～14・16，第17図1・2，第20図5・11，第24図4・5，第25図1など破片があるが，文様構成としては上記復元土器と大きな変化はないと思われる。

第三類土器　大山式土器

大山式土器はすべて小破片で，第一類土器や第二類土器のような観察が困難なので，主に文様と器形について述べたい。大山式土器は，大山貝塚の発掘調査報告書[17]にみられるように，平口縁の胴部から口縁へとほとんど変化のない深鉢形土器で，文様は口縁部から頸部にかけて何本かの横撚刻文をめぐらす土器である。底部はすべて平底と考えられる。素地，混和材，成形など荻堂式土器とあまり変化はない。

文様は横撚刻文が主体で，鋸歯文や押引文はこの型式の土器には含めなかった。第17図3・5・6・10・13・14，第20図4・6・9・10・12・14，第24図13～17，第26図2～5・8などの小破片である。いずれも肥厚口縁ではなく，口縁部から頸部にかけて横位の横撚刻文のある土器である。

第四類土器　地荒原A式土器

地荒原A式土器はカヤウチバンタ式土器の歯ブラシ状肥厚口縁に文様を有するものに当てた型式名[18]である。本遺跡では検出量も少なく，すべて小破片のため文様を中心に述べる。

第17図8・9，第20図15～20，第26図7で，カヤウチバンタ式土器の肥厚口縁に横撚刻文か刺突文を施文する土器で，器形はほとんど深鉢形のようである。第20図18は地荒原B式のようであるが，これ一個なのでここに入れておく。

第五類土器　カヤウチバンタ式土器

口縁部が歯ブラシ状に肥厚する無文土器である。第Ⅱ層と第Ⅲ層0～15からほとんど検出された。特にB地区に多かった。

(1)　素地と混和材

伊波・荻堂式土器とは異なり，長石，石英は非常に少なく，石灰岩細片が圧倒的に多い。器面は石灰岩細片が脱落して多孔状を呈するのも見られる。石灰岩細片を混和材として使用するのは，前述の地荒原A式，カヤウチバンタ式，宇佐浜式土器に多く見られる。

(2)　成　形

器形全体の成形手法はこれまでの土器と大きな変化はないと思われるが，大きく変化するのは口縁部を肥厚させることである。大山式土器のあとに出現する地荒原A・B式，カヤウチバンタ

式，宇佐浜式などが肥厚口縁となる。カヤウチバンタ式土器の肥厚口縁は，粘土紐を直口口縁に貼付してつくる手法である。口縁部を強化することが主目的かと考えられる。

(3) 器形とサイズ

検出された土器で見るかぎり，すべて平底の深形土器と考えられる。第13図3は復元した土器である。口径約１９㎝，高さ約２２㎝で，大きさの大小はあるが，カヤウチバンタ式土器の器形はこの形が主流であると考えられる。

第19図８・１１・１２・１５・１６，第22図１～１０・１２・１３・１５，第２５図６・１７，第２６図９・１０・１５・１８あどがカヤウバンタ式土器の口縁破片と考えられる。肥厚部の長さも長短があり，形にもいくらかの違いがあって細分することもできるが，ここでは一括して報告する。

口縁部が図上復元できるもので，第19図１５・１６，第22図１３，第２５図１７などはカヤウチバンタ式土器の一般的器形であるが，第22図１２は口縁が朝顔状に開き特殊な形をしている。

(4) 調　整

この土器は口縁部から頸部にかけて指撫でによる調整が施され，滑らかである。この調整手法は伊波・荻堂には見られなかった。

(5) 焼　成

伊波・荻堂式土器よりは焼成がよく，丈夫な土器である。

第六類土器　型式不明土器

沖縄の前期土器か中期土器と考えられるが，まだ型式分類がなされてなく，型式名をはめることができない土器をここにまとめた。

① 二条平行烈点文＋沈線

第18図1に示す土器で，口径約１４㎝の深鉢形土器である。幅約１㎝，長さ約６㎝の外耳状の突起が１個残っており，土器の周囲に４個ぐらい付くと考えられる。口縁は山型突起があるかは不明だが，図では平口縁で示した。

口縁に２本の二条平行烈点文があり，外耳状突起の上及びその延長上にも二条平行烈点文がある。上・下の烈点文の間を斜沈線が施文されている。黒褐色の脆弱な土器である。二叉平行烈点文と斜沈線の文様構成は伊波式土器[19]にも見られるが，器形や外耳状突起などこれまでに報告例がないように思われる。外耳状突起は第12図４の土器にも見られるが，同系統なのか不明である。

② 刺突文＋押引文

第17図11に示す１個である。横位の３本の刺突文の間に単篦による押引文を配する文様構成である。施文具は幅約５㎜，厚さ約１㎜の篦で，篦先を深く（約２㎜）刺突して刺突文を施文し，

篦を軽く横へ押引きして押引文を施文している。押引きは力の強弱をつけてないので一様に浅い凹になっている。大山貝塚出土土器に似た文様構成が見られる[20]。しかし，刺突のシャープさは奄美の嘉徳Ⅰ式[21]に見られるのと似ている。

③　有文壺形土器

第17図6に示した土器で，口径約3㎝の壺で，口唇に1本の沈線があり，頸部に2本の押引文が見られる。押引きは力の強弱の加わらない一様な凹状文を呈する。

④　口唇のみに刺突

第17図16・17に示した2個で，地荒原A・B式土器と共伴する土器である。このような土器は隅原遺跡F地点から検出されている[22]。

⑤　無文口縁土器

直口の無文口縁も肥厚する無文口縁もまとめて無文口縁土器としておく，いずれもカヤウチバンタ式や宇佐浜式土器など，前期末から中期にかけて多く見られる土器である。

第22図2・4・14・16・17，第25図13～16，第26図11・12などの無文口縁土器である。第22図4は山形突起のある無文口縁で荻堂式土器でふれた無文壺形土器の類かと思う。第25図13，第26図11の2は無文の山形突起で，カヤウチバンタ式土器や宇佐浜式土器と共伴する土器である。

B　Ⅱ群土器（奄美系土器）

文様構成と混和材から見て奄美的であるのをここにまとめた。文様，器形から見た奄美土器の型式分類は河口貞徳氏の分類に従った[23]。しかし奄美の土器はほとんど実見してないので河口氏の型式分類にはいるのを型式不明としてあるのもあるかと思う。

混和材として雲母を多量に使用している土器が奄美的文様の土器に集中している。従来の沖縄の前期土器には見られない現像である。したがって，雲母の混和しているのはすべて奄美系土器に含めた。土器に雲母を混和することについて佐原真氏は「……ボンゴ族の場合は粘土に多量にふくんでいる雲母を，とりのぞくことはできないという，消極的な理由からである。しかし，他の種族の場合，雲母いりの粘土をもとめ，好んでもちいる。仕上った土器が美しく輝き，値うちがでるからである。たとえば，オウォ族の場合は，とくに雲母を好み，時には，混和材として雲母をわざわざ加えることもある」と述べている[24]。本遺跡出土の土器も混和材として使用したのではないかと思う。津堅島で雲母がとれるかについて大城逸朗氏は「島尻層には雲母が含まれているので津堅でもとれるのではないか」と教えてくれた。

第一類土器　　面縄東洞式土器

第18図2・3，第21図15，第26図13に示す4個である。先の尖った篦を押引きする施文方

法で，面縄東洞式土器に多く見られる文様構式である。室川貝塚[25]，仲泊遺跡[26]，ウタハ貝塚[27]などからの出土報告がある。第18図2，第21図5は肥厚口縁土器で肥厚部に施文されている。

第二類土器　　喜念Ⅰ式土器

第18図5，第21図9に示す小破片で，細隆帯文に二本の細い刺突文が施文されている。第21図9は細隆帯文の上に斜沈線が見られる。なお，細隆帯文が貼付部分からとれている。

第三類土器　　宇宿上層式a土器

第22図11に示す1個である。沖縄でいう宇佐浜式土器の範囲かと思われるが，雲母が多量に混和しているということでここに分類した。口径約10cmの土器である。

第四類土器　　型式不明土器

文様構成や施文方法など奄美的と考えられるが，現在発表されている奄美の土器型式のどれにあてはめるにも無理をすると考えられる土器を型式不明としてまとめた。

① 刺突文＋鋸歯状沈線文土器

第13図1，第18図14～19に示した土器である。雲母を多量に混和しているのが多い。第13図1は口唇と口縁・頸部に横擦刻文が施文され，口縁部と頸部の刻文の間に4本の沈線による鋸歯状文を配する文様構成である。口径約15cmの深鉢形土器と考えられる。多量の雲母が混和されており，石英，長石なども見られる。器面は凹凸が多く調整は雑である。

第18図13・16は同じような文様構成と考えらえる。13は山形突起のある土器で，口唇に横捺刻文があり，口縁から頸部にかけて6本の沈線による鋸歯状文を施文している。鋸歯状文の下は欠損しているが，16からおして，下にも横捺文があると考えられる。いずれも雲母を多量に混和されている。調整が雑な点は第13図1と同じである。これらに類似の土器仲泊遺跡[28]から検出されている。

第18図14・17・18・19も横捺刻文の間に数本の鋸歯状沈線を配する文様構成と考えられる。石灰岩細片は多く見られるが雲母の混和は見られない。

② 肥厚口縁＋沈線＋横捺刻文土器

第13図5，第18図11，第20図13，第21図7・10に示す土器である。

第13図5は復元した土器で，口径約19cm，高さ約26cmの深鉢形土器で，肥厚口縁直下に1本と凸帯部に3本の幅約2.5mmの細い篦による横捺刻文を施文し，その間に斜沈線を交互に施文した土器である。石灰岩細片が多量に混和する土器で，器面は調整がよく滑らかである。胎土から見ると沖縄的であるが，斜沈線が奄美的である。

第20図13，第21図7は雲母が多量に混和している土器で，斜沈線は奄美的である。13は頸

部に綾杉状の沈線を施文し，その下に小さな凸帯文があり，凸帯上に２本の刺突文を配する。７は肥厚が特に顕著な壺形土器である。肥厚口縁直下に幅約1.5㎜の横撚刻文があり，その下に不規則な綾杉状沈線を配している。内面と口唇は指撫でによる調整がなされ滑らかである。

第21図８は壺形に近い深鉢形土器で，肥厚口縁と頸部に幅約２㎜の横撚刻文を施し，その間に２本の沈線を配する文様構成で，斜沈線でない点は前記の土器群とちがう。肥厚部分は粘土を貼付してつくったもので，貼付部分が一部とれている。石灰岩細片を混和し指撫調整で器面は滑らかである。

③　二段肥厚の有文土器

第21図６・１２，第２５図３に示す３個である。口縁部がカヤウチバンタ式土器のような肥厚口縁で，肩部付近でさらに段をなす土器である。上部有段と下段有段に刺突文を施文し，その間に不規則な刺突文を配する。いずれも深鉢形と考えられる。

第21図６は先端幅約７㎜の箆を約４５°傾斜した状態で刺突しながら右へ進む施文方法である。石灰岩細片や微細鉱物が混和し，調整がよく滑らかである。

第21図12は上部有段と下段有段に薄い箆で刺突した文様が逆方向に施文されている土器で，雲母を多量に混和している。

第２５図３は口縁は欠損しているが棒状の工具を刺突して横と縦に施文している。下部有段は残っている。

④　縦沈線＋刺突文＋肥厚口縁斜沈線文土器

第18図４・６・９・１０，第21図２・３，第25図５・７に示す土器である。肥厚口縁に斜沈線を施文し，頸部に数本縦沈線，その下に刺突文を配する文様構成である。

第18図６・９・１０で全体の文様構成がわかる。雲母を多量に混和し，石英，長石などもわずかに見られる。

⑤　縦単箆文土器

第17図15，第21図１に示す土器である。第17図15は単箆を縦にして引っかいたような施文方法で，文様の下には引っかいたとき，かき出された粘土が盛り上っている。調整が雑である。第21図１も縦に引っかく文様がある土器で，横もある。雲母が多量に混和し，指撫調整で滑らかである。

⑥　貝殻文土器

第２５図４に示す１個である。肥厚口縁部に貝殻文を施し，頸部以下に斜沈線を施文している。このような土器は仲泊遺跡[29]，浦添貝塚[30]からも検出されている。

⑦　半裁竹管状工具による刺突文土器

第２５図２に示す土器で胴部破片である。半裁竹管状の工具を刺突して施文している。荒い擦痕が内外面に残っている。このような土器は具志川島遺跡群から表面採集されている[31]。

⑧ 無文壺形土器

第13図 4 に示す壺形土器で，雲母を多量に混和する。口縁部はないが肩部まではよく残っている。器面には指の圧痕が多く凹凸を呈している。また，左右対照にならない不安定な土器である。

⑨ そ の 他

沈線文のある小破片で全体の文様構成が不明なものをここにまとめた。第25図8・9・10・11・12などである。

C 第Ⅲ群土器（沖縄の後期土器）

後期土器が検出されたのはA地区のⅠ・Ⅱ層とE地区のみである。A地区では前期土器なども混入して明確な後期遺跡の層としては不十分であるが，C地区は第Ⅱ・Ⅲ層とも後期遺跡の層である。後期土器は第19図1～7，第27図1～14・16～19，第28図17・18に示した。

(1) 素地と混和材

前期土器と大きく変って，粒子のこまかい素地で，混和材は使用していない。

(2) 成 形

粘土紐による輪積みであるが，口縁部からつくっていくのか，底部からつくっていくのかについては不明である。しかし，第28図18で見られるように，乳房状尖底の乳房部分が丸底に貼付されている。おそらく丸底が先で，あとで乳房部分を貼付したと考えられる。

(3) 器形とサイズ

復元できる破片もなく，ここの資料だけで器形を知ることはできないが，他の遺跡からの出土例などで，乳房状の甕形土器が多いと考えられる。口縁部はやや外反し，胴部で少し脹ると思われる。

甕形土器としては第19図3・4，第27図10・11・18・19などで，第19図4，第27図19は有孔土器である。具志原貝塚で有孔土器が多く検出されている[32]。この甕形土器の底部は乳房状尖底で，このような器形を川田原式土器とも言われている[33]。

皿か浅鉢と考えられるのが第19図6，第27図1・2に示したものである。深さがいくらか底部がどうなるかについては不明である。

サイズはこの期の土器は大小いろいろなサイズがあるが，乳房状尖底の甕形土器についてみれば前期土器よりはかなり大型化する。

(4) 文 様

文様はわずかに第27図12・14に示した2個である。曲線文のある土器で，後期でも古

い時期に見られる。

(5) 調　整

口縁部のみは指撫でによる調整がされて滑らかであるのが見られるが，全体的に凹凸が多く，調整は雑である。擦痕もあまり見られない。

(6) 焼　成

焼成は前期土器とは比較にならないくらい良い。薄手の土器で，よく焼きしめられて丈夫である。

収　束

以上，本遺跡出土の土器について述べてきたが，これらの土器の特徴等を最後にまとめて結びとしたい。

本遺跡出土の伊波式土器は二叉平行烈点文を主文様とするもので，文様構成は，縦位と横位の文様帯が組み合わされ，縦位は山形突起の下にあり，横位は縦位を結ぶ文様を成している。横位は口縁部と頸部または肩部にあり，その間は文様で埋めずに空間になっている。この文様構成は伊波式土器の特徴である。伊波貝塚や室川貝塚では空間を鋸歯文で埋めるのが見られるが，本遺跡出土の土器には見られなかった。

荻堂式土器は荻堂貝塚をはじめ他の類例遺跡では，二叉工具による文様が圧倒的に多く，文様の主体を成しているが，本遺跡では二叉工具による文様と単篦工具による文様がほぼ同じぐらい検出されており，半裁竹管状の文様を単篦に入れると単篦工具による文様が多くなる。単篦工具による押引文が目立つのが本遺跡の荻堂式土器の特徴である。

伊波・荻堂式土器は，本遺跡では最も古い型式の土器で，層序においては，共伴遺物として検出され，前後関係はつかめなかった。ただ，伊波式土器は第Ⅲ層と第Ⅲ層以下（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ）とはほぼ同じぐらい検出されているが，荻堂式土器は第Ⅲ層に圧倒的に多いことは時間差を示しているのだろうか。

大山式土器の検出量は少ない。第Ⅰ層１個，第Ⅱ層９個，第Ⅲ層４６個と第Ⅲ層に集中しており，伊波・荻堂式と共伴して出土している。しかし，Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層からは検出されていない。このことは，伊波・荻堂式土器が先で，途中で大山式土器が登場すると考えられる。

カヤウチバンタ式土器は，第Ⅰ層５個，第Ⅱ層７６個，第Ⅲ層８０個で，第Ⅱ層，第Ⅲ層ともほぼ同じぐらい出土している。大山式土器が，第Ⅲ層中心であったのに対して，カヤウチバンタ式土器は第Ⅱ層と第Ⅲ層０～１５㎝で集中しており，この二種類の土器の時間差を見ることができる。

後期土器は，くびれ平底はなく，乳房状尖底のみで，後期の中でも初頭の遺跡と考えられる。

本遺跡では奄美系土器がかなり検出されているのも特徴の一つである。小破片のため，型式不明が圧倒的に多いが，面縄東洞式などは小破片でも確認できた。これらの奄美系土器の型式と製作場所の問題は今後の研究課題である。

(注) (1) 高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子「室川貝塚第１～３次発掘調査概報」 沖国大考古（第２号）沖縄国際大学部考古学研究室 １９７８

(2)～(4) 注１に同じ

(5) 大山柏「琉球伊波貝塚発掘報告」 １９２１

(6) 松村瞭「琉球荻堂貝塚」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告 第三編 １９１９

(7) 注 (1) に同じ

(8) 新田重清・嵩元政秀「嘉手納貝塚発掘報告書」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 １９６０

(9) 名嘉真武夫・安里嗣淳・当真嗣一「浜崎貝塚」伊江村教育委員会 １９７６

(10) 注 (6) に同じ

(11) 注 (8) に同じ

(12) 注 (1) に同じ

(13) 高宮廣衛「熱田原貝塚の土器」沖縄国際大学文学部紀要 社会編 1巻1号 沖縄国際大学 １９７３

(14) 金武正紀「仲泊遺跡第二貝塚Ｃ地点」 仲泊遺跡 沖縄県恩納村教育委員会 １９７３

(15) 注 (6) に同じ

(16) 注 (1) に同じ

(17) 賀川光夫・多和田真淳「沖縄宜野湾村大山貝塚調査概要」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 １９５９

(18) 高宮廣衛「いわゆるカヤウチバンタ式および宇佐浜式土器について」文学部紀要社会学科篇 ２巻１号 沖縄国際大学 １９７４

(19) 注 (5) に同じ

(20) 注 (17) に同じ

(21) 河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」 鹿児島考古 ９号 鹿児島県考古学会 １９７４

(22) 山田正・吉本直子「具志川市隅原遺跡Ｆ地点」 沖国大考古（創刊号）沖縄国際大学文学部考古学研究室 １９７６

(23) 注 (21) に同じ

(24) 佐原真「土器の話」 考古学研究第１６巻４号 １９７０

(25) 注 (1) に同じ

(26) 当真嗣一「仲泊遺跡第四貝塚」 仲泊遺跡 沖縄県恩納村教育委員会 １９７７

(27) 城間勇雄・宮里愿・太田守雄「阿嘉島の先史文化」 豊高郷土史第２号 豊見城高等学校生徒会郷土研究クラブ １９６９

(28) １９７７年度の仲泊遺跡第四貝塚発掘で検出

(29) 注 (28) に同じ

(30) 新田重清「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」 古代文化 財団法人古代学協会 １９７１

(31) 中村愿「表面採集によって得られた資料」 具志川島遺跡群 沖縄県伊是名村教育委員会 １９７７

(32) 友寄英一郎・高宮廣衛「伊江島具志原貝塚発掘調査概報」 文学部紀要社会篇１２号 琉球大学法文学部 １９６８

(33) 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 １９５６

3　骨　製　品

キガ浜貝塚出土の骨製品は２１個でそれらは，実用品として使用したもの，着装品として使用したもの，その他（用途不明）に分類できる。地区別の出土状況は，Ａ地区５個，Ｂ地区３個，Ｃ地区１２個，Ｄ地区１個でＥ地区では出土しなかった。種類別，層序別の出土の状況は第５表に示した。

(1)　実用品として考えられるもの

骨針　第31図3は魚骨を利用したもので先端のみを切削し，研磨したもので他に加工痕は認められない。残存部は長さ4.5㎝，頭部の幅０９㎝，厚さ0.4㎝で横断面は偏平である。４９－０第Ⅲ層の出土である。本品の報告例についてみると，嘉手納貝塚(1)に骨針の出土はあるが，獣類の蹠掌骨(?)を使用している。

骨錐　イノシシの尺骨を利用したもの２例，海獣骨を利用したもの１例の合計３例得られた。第31図4は残存部の長さ5.9㎝，頭部の幅2.0㎝で先端のみを切削し，研磨したものである。５７－Ｅ８第Ⅲ層０㎝～１５㎝の出土である。第31図5は残存部の長さ6.2㎝，頭部の幅1.7㎝で尺骨を縦に切断し，その先端部分を加工したのみで前者と同様，他に加工痕は認められない。尖端部分はわずかに欠損している。３８－０第Ⅲ層１５㎝～３０㎝の出土である。類例品は伊波貝塚(2)，荻堂貝塚(3)，嘉手納貝塚(1)，城嶽貝塚(4)，崎樋川Ａ貝塚(5)で出土し，前期土器と共伴する。第31図2は，海獣の肋骨を利用したもので残存部の長さ7.4㎝，最大幅2.5㎝，厚さ1.4㎝で横断面は楕円をなす。尖端部分は両側から粗雑に切削したのみで，尖端部に前述のイノシシの尺骨のような研磨痕はない。故に製作途中のものとも考えられる。４９－０第Ⅱ層０㎝～１０㎝の出土である。本品についての報告例はなく，用途不明であるが，その形状から利器として使用したものではなかろうか。

(2)　着装品として考えられるもの

着装品と考えられるものは，彫刻骨器９個，有孔製品１個，サメ製品２個，牙製品１個である。着装品として分類したものの中には，厳密には断定しかねるのも含んでいるが，今までの報告，あるいはその形状等を参考に一応，着装品として分類した。

彫刻骨器　本品は，崎樋川貝塚(5)で「蝶形骨器」，八重島貝塚(6)で「骨製垂飾」，兼城貝塚(6)で「獣形骨製品」（フライド・ドラゴン）と報告されているものと類似のものであるが，これらはすべて器形を異にする。本貝塚出土の骨製品はそれら複数の器形を含んでいるため，総称して「彫刻骨器」と仮称し，器形をａタイプ（蝶形骨器），ｂタイプ（竜形骨器）に分類した。（第30図１～５，１０）

ａタイプ（第30図５）は，崎樋川貝塚(5)，嘉手納貝塚(1)と同一の器形で中央部の小突起を中心に左右対象に突起を蝶形に展開したものである。文様は中央部の小突起の部分に「ハ」字状に幅0.1㎝の沈線を施し，さらに左右に鋭い利器で幅0.4㎝の凹文を縦位及び横位に施す。文様の構成は器形と

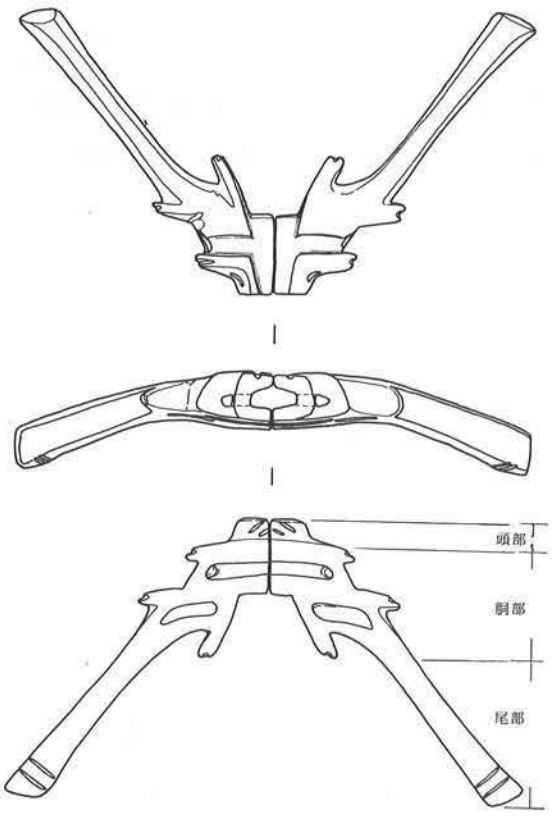
製品 ＼ 地区・層序				A						B			C				D		E			合計
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
貝製品	二枚貝	貝刃					2						2	4								8
		有孔	a			1								2								3
			b										1									1
	夜光貝	貝斧																		1		1
		靴ベラ状												1								1
		匙状				1					2			1							1	5
	スイジガイ					1	1						1	1								4
	ホラガイ													1								1
	巻貝製匙状					1																1
	貝輪	二枚貝				5	2	1			1											9
		巻貝												1								1
	イモガイ		a											1								1
			b									3		1			1		2			7
	巻貝		a											2								2
			b											1								1
	その他					1						1		2								4
	小計					10	5	1			3	4		4	18		1		2		1	1	50
骨製品	彫刻骨器													9								9
	有孔製品													1								1
	サメの歯					1																1
	イノシシの牙									1												1
	海獣骨					3																3
	骨針											1										1
	骨錐					1					1			1								3
	脊椎骨													1			1					2
	小計					5				1	1	1		12			1					21
石製品														1								1
土製品						1						1										2
合計						15	6	1		1	4	6		4	31		2		2		1	1	74

第 5 表　貝・骨・石・土製品出土状況

同様，左右対象に展開すると考えられるが，破損品であるため推論の域をでない。器面の調整は顕著である。裏面の中心部に孔を有するが，破損が著しく，大きさは不明である。横断面はやや方形を呈し，中は空洞である。３７－０第Ⅲ層０㎝～１５㎝の出土である。*b*タイプ（竜形骨製品）は，説明の都合上，第８図のように頭部，胴部，尾部と仮称する。第30図１は頭部が欠損し，胴部はイ，ロの突起はゆるやかでロの裏面側の突起は表面より短い。文様は表面のみに施され，尾部の先端に幅0.5㎜の沈線を２条，胴部に幅0.4㎝の凹文を２条平行に施すが，頭部に近い文様はＬ字状を呈する。尾部に近い凹文は先端に押し引く。器面の調整痕は顕著である。0.2～0.3㎝の小孔を頭部に近い文様のＬ字のコーナーの部分に孔を有し，これらは，紐を絖らすためのものと考える。側面は内湾し，獣類の肋骨を使用したと考えられる。尾部の断面やや三角形を呈する。３８－Ｅ１第Ⅲ層の出土である。第30図２，４は，対をなすものと考えられ，前者と同様の器形を呈するが，４の胴部についてみると，イ，ロの突起の中央部に巾0.１５㎝の溝を有する。紐を固定するためのものであろうか。ハの表面の突起は欠損する。裏面の突起にわずかに溝の跡が確認できる。頭部は0.3㎝程，突起する。文様は前述の１とは逆の構成で，下位の文様は凹文に押し引きが残る。上位の文様の凹文の端から斜めに0.2㎝の小孔をあけ，さらにそれの延長として裏面に0.3㎝の溝を有する。頭部にも小孔を有する。２は４の尾部にあたる部分と考えられる。両者とも器面調整は顕著で光沢がある。２は３７－０第Ⅲ層，37－０第Ⅲ層の出土である。第30図３は，２と４と同一の器形であるが頭部の表面に幅0.1㎝の沈線文を二条施し，胴部の文様が前述の２個に比べて丸味をおびて浅い。また，ハの突起の部分が連続している点が異なる。胴部のイ，ロ，ハ，の突起部に溝を有し，器面調整は顕著で光沢がある。38－Ｅ１第Ⅲ層の出土である。第30図10は文様が浅く施され，イ，ロ，ハもわずかに突起をとどめるのみで，中央部に溝は認められない。器面の調整は前述の３個に比べて，やや粗雑である。37－０第Ⅲ層である。これらのタイプは文様及び器形の状況から，第30図１・２，４→同図３→同図１０に文様が簡略化する。*b*タイプの類例は，兼城貝塚の「竜形骨製品」，嘉手納貝塚[1]の「獣骨の顎骨部分を利用した装飾品」があるが，兼城貝塚の「竜形骨製品」は翼状の尾部を有することから，*b*タイプの器形の祖型ではなかろうかと考えられる。

*b*タイプは，第30図２と４のように左右対象の器形が出土し，また，文様の構成や小孔及び溝の状況を考慮すると，２あるいは４個を組み合わせて，紐などで縛って複数で用いたと考えられる。第８図に２個を組み合せた復元図を示した。

彫刻骨器の用途については*a*タイプ（蝶形骨器）について，島田貞彦[5]氏は腰飾の一種と考えておられる。また，国分直一氏は熱田原貝塚出土の獣形の貝製品は，*b*タイプ（竜形骨器）の抽象化したものと考えて居られる。金関丈夫[7]氏は広田の饕餮文類似紋貝札と似たものとして崎樋川貝塚の蝶形骨器，中国風の竜形の変化と思われるものとして兼城貝塚の骨器をあげておられる。出土例が少なく，土俗例も未調査の段階であるため，断定はできないが呪術的な要素をもつ装飾品でなかろうか。



第８図　竜形骨器復元図

有孔製品　PL・28－11は，イノシシか犬等の関節骨に径0.2㎝の小孔を有するもので他に加工痕は認められない。長さ1.9㎝，最大幅1.6㎝，厚さ0.4㎝の台形状を呈する。本品の報告例はないが，孔の状況から垂飾品と考えられる。３７－０第Ⅲ層０㎝～１５㎝の出土である。

サメ製品　歯と脊椎骨を利用したものそれぞれ１個出土した。第30図7は長径1.7㎝×短径1.6㎝のやや楕円の脊椎骨に径0.8㎝の孔を中央に有するものである。孔の周縁は部分的に摩耗する。３８－Ｅ１第Ⅲ層の出土である。類例品は嘉手納貝塚[1]，具志原貝塚[8]に１例みられる。第30図6は，サメの歯の基部及び歯のエナメル質の部分がわずかに残存するのみである。両側縁の基部とエナメル資の境には0.2㎝の段差をつけ，基部の中央部に径0.5㎝の工具で両面から斜位に摩滅して，やや中央部に径0.2㎝の小孔をあける。孔の片面には紐ずれ痕が認められる。第30図9のような器形と考えられる。紐ずれ痕があることから垂飾品と考えられる。５７－Ｅ８第Ⅲ層０㎝～１５㎝の出土である。

牙製品　第30図8はイノシシの牙を使用したもので，残存部の長さ6.0㎝，幅0.8㎝～1.2㎝，厚さ0.3㎝である。裏面は製品にやや直交して擦り痕が認められ，先端には径0.3㎝の突孔がある。４９－Ｗ８第Ⅱ層の出土である。類例品は嘉手納貝塚[1]に３例みられる。

(3)　そ　の　他

これまでに報告例がなく，用途不明であるため，その他として記述した。

海獣骨製品　第23図1は，海獣類の肋骨を使用したもので残存部の長さ8.6㎝，最大幅2.7㎝で0.1㎝の溝を横位に四条，めぐらす。また，両面に縦位に摩耗するが上方に除々に浅くなる。５７－Ｅ８第Ⅲ層０㎝～１５㎝である。他に大きさは異なるが，２例（PL.29－1A,1B）５９－Ｅ７第Ⅲ層１５㎝～３０㎝，５８－Ｅ８第Ⅲ層0.㎝～１５㎝で出土した。

収　　束

以上，骨製品について記述した。出土した骨針，骨錐及び彫刻骨器，サメ歯製品等は，伊波貝塚，荻堂貝塚，嘉手納貝塚，兼城貝塚，崎樋川貝塚等の遺跡で出土し，本貝塚でもＡ・Ｂ・Ｃ地区で前

期土器と共伴する。これらの骨製品については，年代については前述のように前期にほぼ一定して出土するが，用途についてはまだ，解明されていない。しかし，サメ歯製品については貝製の模造品の出土によって，用途について，なんだかの手がかりがあると思われる。また，サメ歯製品については，篠遠喜彦氏[9]によってポリネシアの土俗例が報告され，これまで垂飾品として定説化しつつあったのに対して新しい問題提起をするものである。また，第２８図に図示した彫刻骨器ｂタイプの復元図も資料を積極的に解釈する点で大胆ではあるが国立奈良文化財研究所の松沢亜生氏の御助力で図化できた。記して謝意を表する。

参 考 文 献

注1. 新田重清・嵩元政秀「嘉手納貝塚発掘報告書」　琉球政府文化財保護委員会『文化財要覧』１９６０

2. 大山柏「琉球伊波貝塚発掘報告」１９２２

3. 松村瞭「琉球荻堂貝塚」『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第三篇』東京帝国大学１９２０

4. 小牧実繁「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」　人類学雑誌第４２巻８号　１９２７

5. 島田貞彦「琉球崎樋川貝塚」　歴史と地理第３０巻５号　１９３２

6. 国分直一『南島先史時代の研究』　慶友社　１９７２

7. 金関丈夫「種子島広田遺跡の文化」　福岡ユネスコ協会会報第５号抜刷　１９６６

8. 友寄英一郎・嵩元政秀「具志原貝塚発掘調査概報」『琉球法文学部紀要社学篇』第１２号１９６８

9. 篠遠喜彦「ポリネシア遺物控 ④」　えとのす第10号　１９７８

4　貝　製　品

キガ浜貝塚出土の貝製品は５０個で，実用品，着装品に分類できる。地区別の出土状況はＡ地区１６個，Ｂ地区７個，Ｄ地区３個，Ｅ地区２個の合計５０個，得られた。種類別，層序別には第５表に示した。

(1)　実用品と考えられるもの

貝刃　二枚貝の腹縁に押圧剥離を加えて鋸歯状にした製品で貝種は，シレナシジミ，リュウキュウマスオ，サメザラの３種を用いている。殻長，殻高は下表に示した。（第６表）

No.	貝　種	殻長	殻高	部位	刃先	出土地	備考
1	リュウキュマスオ	6.5	4.3	左	荒		PL・29−11
2	サメザラ	5.4	5.1	左	細	５７−Ｅ７第Ⅲ層	PL・29−6
3	シレナシジミ	不明	不明	不明	細		第２図６
4	〃	不明	5.2	右		38−E1第Ⅱ層	
5	〃	5.4	4.5	左	荒	57−E8第Ⅲ層	第２図８
6	〃	5.8	5.0	右	細	38−O第Ⅱ層	
7	〃	5.4	4.4	右		37−O第Ⅲ層	
8	〃	6.1	5.2	左	荒	〃	

第６表　貝刃出土一覧表　　単位（cm）

類例品は，西表島の仲間第二貝塚[1]，波照間の下田原貝塚[2]，沖縄本島ではヤブチ洞穴遺跡[3]，渡嘉仁浜原貝塚（第Ⅳ層）[4]で報告されている。本貝塚においてはＡ，Ｃ地区において前期土器と共伴する。用途については国分氏[5]が粟の穂づみ用と考えて居られる。詳細については今後の資料（粟の炭化物等）の追加を待つことにする。

二枚貝製有孔製品 *a*（貝錘）リュウキュウサルボウの殻頂近くに1.5㎝～2.0㎝前後の粗孔を有するもので他に加工痕は認められない。本品の用途について，従来，網の錘とされているが本貝塚及び熱田原貝塚[6]，嘉手納貝塚[7]のように前期土器と共伴する場合，出土数も１０個以下と少なく，貝種もリュウキュウサルボウと限定される。突孔も具志原貝塚や熱田貝塚と異なり整形化すること，及び魚骨の種類及び出土量を考慮すると，網の錘と断定しかねるため，河口氏[8]の突孔貝の分類のように複数の用途を検討する必要があると考える。殻長，殻高及び重量については第７表１～３に示した。

No.	貝　　種	殻長	殻高	重　量	孔　径	備　　考
1	リュウキュウサルボウ	5.3	3.5	13.8	1.2×0.8	第32図9　PL・30−9
2	〃	7.1	4.7	26.2	2.5×2.1	第32図11　PL・30−11
3	〃	5.5	4.2	19.2	1.6×1.3	PL・30−12
4	〃	5.0	3.9	15.4	0.4×0.3	第32図7　PL・30−7

第 7 表　二枚貝有孔製品　　単位（cm, g）

二枚貝有孔製品 b リュウキュウサルボウの殻頂を外面より研磨して小孔をあけたものである。また，腹縁の後端から後背縁にかけて打撃を加えてあるが，形を整えるためか，あるいは，刃部として利用したものかは不明である。故に本品は，垂飾品か貝刃か断定しかねる。類例品の報告はない。第32図7で殻長，殻高については第7表に示した。３８－Ｅ１第Ⅱ層の出土である。

夜光貝製品　夜光貝を利用した製品は7個出土した。それらを器種別に分類すると，貝斧，クツベラ状製品，匙状製品である。地区別の出土状況をみるとＡ地区１個，Ｂ地区２個，Ｃ地区２個，Ｅ地区２個で詳細については第５表に示した。

貝斧　第34図3は夜光貝の蓋を使用したもので大きさは長径7.4 cm，短径6.8 cmで周縁の薄い部分に内側から幅3.8 cmの打撃を加え，刃部を形成する。２４－０第Ⅱ層の出土である。本品の出土例は，一般に，奄美大島のヤーヤ洞穴遺跡[9]，読谷村浜屋原貝塚[10]，今帰仁村渡喜仁浜原貝塚[4]（第Ⅱ層）等の後期の遺跡から出土するが，伊是名村具志川島遺跡群・東地区[11]（第Ⅵ層）のようなやや古い遺跡からも出土する。本貝塚では後期土器を主体とするＥ地区で出土した。

靴ベラ状製品　第33図3は夜光貝の殻口近くの体層部を利用したものである。大きさは最大長8.3 cm，最大幅4.2 cmのやや長方形を呈し，器面は外殻及び突起の部分は研磨が著しく，真珠層が全面に表われる。本品は後述の匙状製品とは器形及び加工の状況が異なるため，別に記述した。用途は不明である。４９－０第Ⅱ層の出土である。

匙状製品　柄の部分１例，未完成品２例，その破片と考えられるものが２例の合計５個出土した。第33図1は，夜光貝の殻口を利用したもので柄の部分である。頭部の中央は「U」字状にえぐられ，それを中心に左右対象に扇状に広がる。周縁は顕著に研磨される。２４－Ｅ１第Ⅲ層で出土した。第33図2は長さ11.4 cm，幅8.6 cm のやや方形を呈し，周縁を打痕が十数回，認められる。３７－０第Ⅲ層１５cm～３０cmの出土である。PL・31−5も同様，未完成品である。５７－Ｅ８第Ⅲ層15 cm～３０cmの出土である。PL・31−6・7は切断片で，製品とは考えがたい。４９－０第Ⅳ層の出土である。夜光貝製品は，嘉手納貝塚[7]，伊波貝塚[12]，荻堂貝塚[13]，渡喜仁浜原貝塚[4]（第Ⅱ，Ⅲ層）シマーシヤーマ貝塚[14]，アカジャンガー貝塚[15]等の前期～後期までみられる。装飾的なものか実用的なものかについては不明である。

巻貝製匙状製品　第32図５は，ゴボウラ(?)の体層を利用したもので，側縁に研磨及び切削痕が認

められるが完成品とは考えがたい。残存部は長さ7.2㎝，幅4.1㎝（柄の幅0.7㎝）である。５９－Ｅ７第Ⅲ層の出土である。類例品は嘉手納貝塚[7]で１例みられる。

スイジガイ製品　スイジガイの管状棘を利用し，刃状に加工したもので，第３１図７は残存部が8.8㎝，最大幅2.2㎝，５８－Ｅ８第Ⅲ層の出土である。第３１図９，PL・29－9A，Bのそれぞれ５７－Ｅ７第Ⅲ層，３７－Ｅ１第Ⅲ層の出土である。刃部は両側から加工し，両刃である。本品の用途はついては不明であるが，その形状から利器と考えられる。また，地荒原貝塚[16]に２例，「貝小刀」と報告されている。また読谷村木綿原貝塚[19]でも同様のスイジガイ製品が出土したが体層部を有する点で異なる。

ホラガイ製品　第34図6は，ホラガイの体層に径2.5㎝×2.0㎝，内唇部に2.7㎝×2.3㎝の打製の楕円状の孔を有し，殻底部は火を受けたためか，他の部分より風化が大きい。殻高２7.5㎝，殻径１2.5㎝，重量５０５ｇで容量630㎖である。用途は，宮古島や伊平屋島の民具のブラヤクン，ブラヤクワンに酷似していること及び火を受けた痕跡があることから煮沸器と考えられる。本品の出土は，渡喜仁浜原貝塚[4]で２例みられる。

(2)　着装品と考えられるもの

貝輪　第32図3は，オオベッコウカサガイの殻頂を中心に除去し，幅0.5㎝の外縁のみを残こしてものである。内縁に部分的に打製痕が認められる。大きさは長径5.5㎝，短径4.4㎝で，５７－Ｅ７第Ⅳ層下部の出土である。同図４も同種の貝を使用したものであるが，破損しているため大きさは不明である。５７－Ｅ７第Ⅳ層下部の出土である。これらの貝製品は他にＡ地区第Ⅲ層で４個出土した。これらの報告例は那覇市の波之上洞埋葬遺跡[17]に出土している。PL・30－4Aは，うみぎく科(?)の貝殻の外縁部を利用したものである。前者と異なり，外縁，内縁とも研磨が顕著であるため，貝殻の表層はわずかに残存する程度である。残存部の長さは4.1㎝，幅0.6㎝である。５７－Ｅ６第Ⅴ層の出土である。類例品は伊波貝塚[12]，崎樋川貝塚[18]で出土している。第34図5は，コボウラ(?)の体層部を縦に切削し，外縁はていねいに調整されているが，内縁は外面を研磨し，縁は打製の調整をまだ残存する。大きさは，長さ8.0㎝，幅4.0㎝で５０－Ｗ１第Ⅲ層の出土である。巻貝製の貝輪の出土例は，今帰仁村渡喜仁浜原貝塚[4]，読谷村木綿原貝塚[19]で出土例がある。

貝札　第３図８は，残存部長さ3.7㎝，幅0.7㎝，厚さ0.4㎝の長方形に加工したもので，研磨が著しく，貝種は不明である。５７－Ｅ８第Ⅲ層の出土である。類例は，浦添市浦添貝塚[20]で出土している。用途については，浦添貝塚では，種子島の広田遺跡[21]の彫画貝製品と類似することを指摘している。

イモガイ製装飾品　第32図10は，イモガイの螺塔部及び外唇，殻軸部分を研磨したもので殻頂に径0.4㎝の小孔を有する。大きさは，殻高2.2㎝，殻径1.5㎝で，３７－０第Ⅲ層で出土した。体層を除去しないのでaタイプと分類した。類例は，読谷村浜屋原貝塚[10]で出土する。bタイプは，いもがい科の体層部分も螺塔部を横位に切断し，円盤状に加工したもので，本貝塚では４例出土した。大きさ，出土地区については第８表に示した。

図版番号	外径	孔径	厚さ	特　　徴	出 土 地 点
3－2	1.0	0.45	0.15	内，外面とも研磨が著しい。	37－E1第Ⅲ層
C－2A	0.9	0.2	0.25	火を受ける。乳～茶褐色を呈する。	51－W8第Ⅰ層
C－2B	1.8	0.7	0.2	孔に加工痕は認められない。研磨痕有り。	50－W8第Ⅲ層
な　し	0.9	0.2	0.3	未完成，3カ所に剥離痕がある。	50－W8第Ⅲ層

第 8 表　　イモガイ製装飾品（bタイプ）　　単 位（cm）

これらbタイプの出土例は，貝塚時代前期～グシク時代に長期にみられる。本品の用途について，広田遺跡[21]の出土状況から珠類して用いられたと推定される。

巻貝製装飾品　リスガイ，ノシガイ製の2種出土した。第32図6は，リスガイのへそ孔近くの体層に径0.5㎝×0.7㎝の楕円状の孔，及び外唇から0.7㎝内側に0.8㎝×0.3㎝の長袖の楕円の孔を有する。殻高5.4㎝，殻径3.6㎝の大きさで，37－0第Ⅲ層の出土である。本品の出土は，那覇市波之上洞埋葬遺跡[17]に出土例があるが，外唇近くに孔を有さない点で異なる。第32図1及びPL・30－1Aは，ノシガイの中心を縦に切断し，研磨したもので特に殻頂及び殻軸部は顕著である。前者は高さ1.8㎝，幅1.2㎝，厚さ0.4㎝，後者は高さ1.3㎝，幅1.4㎝，厚さ0.25㎝でいずれも，C地区第Ⅲ層の出土である。本品は種子島広田遺跡[21]に出土例があり，垂飾品と報告されている。

サメ歯模造貝製品　第30図9はサメの歯の鰊製品を模造したもので，本品は，歯に相当する部分は大きく反り，基部に相当する部分との間に段を有する。基部は弧状を呈し，その中央部分には径0.2㎝の孔を，両面から0.5㎝の工具で摩滅して突孔する。また，基部の両側にはえぐり痕がある。歯の部分はゆるやかに二等辺三角形をえがき，基部近くで外反する。両側に0.1㎝～0.2㎝間隔で浅いきざみが確認される。裏面の周縁は0.2㎝～0.4㎝切削され刃部を鋭利にする。また，基部は自然面を残し，歯の部を研磨が著しく，貝殻の成長線の層が十数枚確認される。37－0第Ⅲ層の出土である。用途については，前述のサメの歯製品と同様紐ずれの痕があり，垂飾品と推定しておく。サメの歯の模造品は器形は異なるが伊波貝塚[12]で報告されている。

未完成品　第34図4は大型のイモガイの螺塔部を研磨し，さらに体層部に切断のために磨滅した跡がある。径5.6㎝，厚さ1.5㎝で50－W1第Ⅲ層の出土である。おそらく円盤状に加工するものであろう。

収　　束

以上，貝製品について記述した。これらの出土状況を地区別に比べると前期前半～中葉にほぼ位置づけられる，A，C地区Ⅲ層に最も多く出土し，前期後半（カヤウチバンタ式土器）のB，D地区Ⅲ層に減少し，後期初頭に位置づけられるE地区においても少ない。

前期前半のA，C地区では，貝刃，二枚貝有孔製品a，b，スイジガイ製品，ホラガイ製品，巻貝，二枚貝製貝輪等の実用的，着装的様相のものが同時に出土し，また前期後半（カヤウチバンタ式）のB，D地区では，イモガイ製品が目立ち，後期初頭のE地区では夜光貝製品（貝斧，匙状製品）の実用的様相のものが出土する点は編年的にほぼ一致すると思われる。また，本貝塚で注目すべき点としては，①ゴホウラの貝輪が前期土器と共伴して出土した。②サメの歯模造品が出土したことである。

参考文献

注1. 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学」『沖縄八重山』滝口宏編　校倉書房　1960
2. 金関丈夫・国分直一　「琉球波照間下田原貝塚発掘報告」　東京人類学会・日本民族学協会聯合大会紀事第9号　1955
3. 国分直一・三島格「ヤブチ式土器」　水産大学校研究報告　人文科学篇第10号　別刷　1965
4. 渡喜仁浜原貝塚調査団　「渡喜仁浜原貝塚調査報告書」　今帰仁村教育委員会　1977
5. 谷川健一編　起源論争－わが沖縄　第三巻　木耳社　1971
6. 高宮廣衛・C・W・ミーヤン　「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧』1958
7. 新田重清・嵩元政秀　「嘉手納貝塚発掘報告書」　琉球政府文化財保護委員会『文化財要覧』1960
8. 河口貞徳「サウチ遺跡」『鹿児島考古』第12号　鹿児島県考古学会　1978
9. 三島格・永井昌文　「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」　日本考古学協会第30回総会研究発表要旨　1964
10. 沖縄国際大学考古学研究会「浜屋原貝塚発掘調査報告」『島嶼の考古』　1977
11. 具志川島遺跡群　「伊是名村文化財調査報告書」　第1集　伊是名村教育委員会　1977
12. 大山柏「琉球伊波貝塚発掘報告」1922
13. 松村瞭　琉球荻堂貝塚『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』第三篇　東京帝国大学　1920
14. 国分直一・新垣孫一・川平朝申　「久高島シマシーヤーマ貝塚の調査概報」『文化財要覧』1957
15. 高宮廣衛　「具志川村アカヂャンガー遺跡調査概報」『文化財要覧』1960
16. 多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀　「地荒原貝塚発掘報告」『文化財要覧』1962
17. 高宮廣衛　「那覇市の考古資料」『那覇市史』資料篇　第1巻1号　1967
18. 島田貞彦　「琉球崎樋川貝塚」『歴史と地理』1932
19. 当間嗣一・上地正勝・上原静・比嘉賀盛　「沖縄県渡具知木綿原遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』　No.141　ニュー・サイエンス社　1977
20. 新田重清　「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号　1970
21. 国分直一・盛園尚孝　「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」　考古学雑誌第43巻3号　1958

5　石製品・土製品

石製品１例，土製品２例，計３例出土した。

第33図4は長さ3.5㎝，厚さ2.5㎝の丸隅方形柱状に摩耗した石製品で内部に孔の跡が確認できるが破損品であるため大きさは不明である。石質はサンゴ等の石灰岩と考えられる。用途については類例がなく，また，破損が大きく推測の域を越えないが，小片であること，やわらかい石質で孔を有することから装飾的様相をもつものと考える。３７－Ｅ１第Ⅲ層０～１５㎝の出土である。

第34図2は長さ3.5㎝，幅2.3㎝，厚さ0.7㎝のやや楕円を呈する土製品で断面はやや湾曲する。楕円の長軸の両端をわずかに打ち欠き，他の外縁を著しく摩耗する。外面は赤褐色，内面は黒褐色を呈し，焼成は良い。本品は器厚及び断面の湾曲から土器の胴部の部分を二次加工して使用したものである。用途は不明である。５８－Ｅ７第Ⅳ層（上部遺構）の出土である。第34図1はほぼ円柱状の器形に上部，両側にややななめに幅0.2㎝の長さ0.5㎝の沈線（溝）をそれぞれに二条，施される。その間隔は0.4㎝である。本品の残存部の大きさは長さ3.2㎝，幅は上部1.3㎝，下部1.4㎝，模断面の厚さは径1.2㎝の円形である。本品の用途は類例品がないため推測の域を越えないが，両側の溝を使用した。垂飾品と考えられる。４９－０第Ⅲ層の出土である。

これらの土製品の出土例は形状は異なるが，伊江島具志原貝塚[(1)]にある。

参　考　文　献

注1. 友寄英一郎，高宮廣衛　「伊江島具志原貝塚調査概報」　『琉球大法文学部紀要社会篇』第１２号　１９６８年

6　食　料　残　滓

本貝塚の食料残滓と考えられるものは，獣骨（海獣骨を含む），魚骨，ウニの殻，棘，カニのハサミ貝殻などの動物遺存体で，これらは当時の食料及び生活環境を知るうえで重要である。もちろん，当時としても，木の実などの植物性[(1)]の食べ物を利用したであろうが，残念ながら本貝塚は検出できなかった。本貝塚の食料残滓の検出する際，Ａ地区，Ｃ地区の土を３㎜フルイに通し，さらに，Ｃ地区は１㎜フルイを用いて水洗い選別した。また，貝殻は全地区ともすべて採集した。

(1)　獣　　骨

イノシシの牙，下顎骨，尺骨のほか未同定の獣骨及び海獣骨は全体の骨の出土量の１３.４８％（重量では４６.４５％）出土した。これらの出土状況は第９表に示した。地区別には，Ａ地区４１.３０％，Ｃ地区３９.６７％，Ｂ地区１４.９５％，Ｄ地区3.５３％，Ｅ地区0.５４％で，Ａ・Ｃ地区多く，検出された。PL・33－1，6，14のイノシシの骨であるが他は未同定の獣骨である。前期土器を主体とＡ地区第Ⅲ層，Ｃ地区第Ⅲ層に最も多くみられ，この時期に獣骨を食料資源としていたと推

種類 ＼ 地区・層序			A						B			C				D			E			合計
			I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	I	II	III	IV	I	II	III	I	II	III	
魚骨	ふえふきだい科	個数												20								20
		重量												31								31
	べら科	個			2		3	4 1			1 1			25	7 1							45
		数			6						3			1	23							33
		重			6		30	6 3			2 31			6	5 2							72
		量			3									1	66							101
	ぶだい科	個			5 10		3 1	4 1						29	178		1	1				333
		数			11 5		1	1 2						95	99	2						217
		重			5 8		30 6	4 1						108	55		5	1				223
		量			18 22		1	15 1 8						69	66	3						203
	はりせんぼん科	個数			1		1					1		18		1					1	23
		重量			3		10					5		19		3					10	50
	脊椎骨	個数				2	3	7						391		10						413
		重量				2	25	4						81		13						125
	刺	個数			99		37							758		1						895
		重量			9		6							70		1						86
	その他	個数			129	14		68			16			1,273	2	9						1,511
		重量			57	20		21			14			336	3	4						455
カニのハサミ		個数									7			10								17
		重量									3			14								17
ウニ	棘	個数									10			10								20
		重量									7			2								9
	殻	個数									7			1								8
		重量									20			1								21
獣骨	イノシシ 牙	個数			1									3								4
		重量			4									8								12
	イノシシ 歯	個数												12								12
		重量												15								15
	その他	個数			122	9	13	8			5 50			5	118 22	9	3	1			1 1	367
		重量			276	43	43	17			20 256			21	239 98	34	4	5			3 1	1,060
合計		個数			388	91	61	107			5 96	1		5	3,137 27	30	9	3			1 2	3,963
		重量			414	65	102	54			20 334	5		21	1,236 101	60	4	5			3 11	2,435

第9表　獣・魚骨出土状況　　凡例　顎骨上 | 咽頭骨上 / 顎骨下 | 咽頭骨下

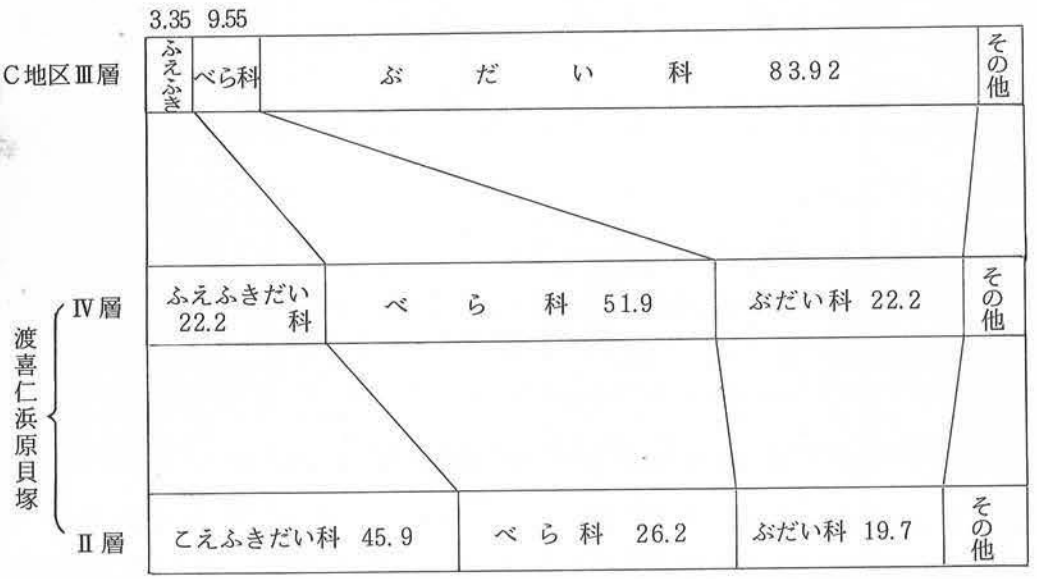
定される。

(2) 魚　　骨

魚骨は顎骨，咽頭骨，脊椎骨，刺類，その他に分類し，さらに，顎骨，咽頭骨は種の判別可能なものは，第9表に示した。種は，ふえふきだい科，べら科，ぶだい科，はりせんぼん科に分類した。魚骨は出土総数2,311個，1,157gで地区別に出土量を比較すると，C地区80.95%，A地区11.04%，B地区0.56%，D地区0.67%，E地区0.5%でC地区に多く検出されたのは，水洗い選別による成果であろうか。魚種別には，ふだい料81.9%，べら科11.6%，ふえふきだい科3.02%，はりせんぼん科3.47%で，ぶだい科が主体である。

これらの魚について沖縄県農林水産部水産課[1]の「郷土の水産資源」によれば，図版1～10のぶだい科は「歯があわさって口ばし状でべら科と同じく雄の老成魚は柔かいコブができる。現在でも沿岸漁業の重要な対象魚で刺網，追込網，一本釣により周年平均して漁護される。」PL・34－11～14，17のべら科は「サンゴ礁の魚で種類が多く，数cmより1m以上のものがある。」PL・34～18のふえふきだい科は「浴岸の岩礁に棲息し，追込網，刺網，一本釣，底延網で周年漁護される。」

魚類の種別について，水洗い選別を行なったC地区についてみると，ぶだい科が83.92%と最も多く，次にべら科9.55%，ふえふきだい科3.35%と続く。ふえふきだい科がC地区のみに検出されたのは，水洗い選別によるためで体長の小さい魚を捕護したためであろうか。C地区第Ⅲ層の魚類組成を渡嘉仁浜原貝塚[2]の第Ⅱ層，第Ⅳ層との比較を第10表に示した。



第10表　魚類組成（渡喜仁浜原貝塚・キガ浜貝塚 C地区）

魚類の出土状況について，渡喜仁浜原貝塚と比較した場合，本貝塚のC地区における主体は，ぶだい科８３.９２％であるが，ほぼ同期と考えられる渡喜仁浜原第Ⅳ層では，べら科が主体を示す。また，渡喜仁浜原貝塚第Ⅱ層（後期土器が主体）ではふえふきだい科が主体となる。このように，渡喜仁浜原貝塚においては第Ⅱ層と第Ⅳ層という時代的な差異で魚類の主体が変化する。本貝塚C地区（前期土器が主体）と渡喜仁浜原貝塚第Ⅳ層（前期～中期）では，主体がぶだい科とべら科という差があり，これは，海況の差異か（外洋性，内湾性）かと考えられるが，これらの魚類組成の差異については今後の資料の追加によって，より具体化されるであろう。

(3) 貝　殻

各地区各層ごとに分類し，巻貝は殻頂部のあるものと，個体の$\frac{3}{4}$以上あるものを１個体とし，二枚貝は左殻，右殻に分け，その多い方を個体数とした。チョウセンサザエは殻頂部と蓋に分けその多い方を個体数とした。

本貝塚出土の貝は陸産貝６種，淡水産貝１種，海産貝６７種と種の判別が困難な４科の計７４種４科の貝が出土した。その出土状況は第１１表に貝類組成については第12表に示した。

A　陸　産　貝（PL．３５－1～6）

イトマン（ケ）マイマイ，パンダナマイマイ，シュリマイマイ，オキナワヤマタカマイマイ，オキナワヤマタニシ，ツヤギセル等の６種検出された。この中で最も多く出土したのは，パンダマイマイ（ＰＬ　，２，表№２）である。各地区とも出土量（全体の３.１９％）は少ないが，Ａ地区２６％，Ｂ地区３.９３％，Ｃ地区７１.０７％で，Ｄ・Ｆ地区の出土は認められなかった。

B　淡水産の貝（RL．３５－7）

淡水産の貝はシレナシジミ一種しか検出されず，出土量もＡ地区Ⅲ層から１個だけ出土した。津堅島では淡水産を産出するところは認められない。故に貝刃の材料[(4)]として意識的に外部から持ち込まれたものと考えられる。

C　海　産　貝（PL．３５～３８）

海産貝は６７種４科検出されたが，これらをさらに棲息地別に分類した。

a　潮間帯＜砂地＞（PL．３５－8～１６）

イソハマグリ，リュウキュウマスオガイ等の９種で，１４５個（３.６５％）出土した。最も多く出土したのはイソハマグリである。地区別にはC地区のⅢ層に最も多い。

b　潮間帯＜岩礁及び珊瑚礁＞（PL．３５ ３６－１７～３８）

シラナミガイ，ツノレイシガイ，ヒメジャコ，マダライモガイ，コオニコブシガイ，イトマキボラ等の２２種検出された。出土量は１８２個（４.５８％）と前者よりやや多い。ヒレジャコは発掘中多量に出土したが，現場で保存しているため個数は明確でない。地区別にはC地区に多いとのことである。

	PL No.	和名 ＼ 地区・層序	A						B			C			D	E			不明	総計	棲息地	方言名
			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅳ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	小計				
陸産貝	1	イトマン(ケ)マソマイ	2	5	2		4	13				2		2						15		
	2	パンダナマイマイ		6	1	1	2	10				29	5	34						44	海岸部～山間部	チンナミ
	3	シュリマイマイ								1	1	2	4	6					3	10	石灰岩地の林内	
	4	オキナワヤマタカマイマイ										1	5	6						6		
	5	オキナワヤマタニシ		2	1			3				25	6							9	落葉下	
	6	ツヤギセル		1				1		4	4	10	2	12					1	18		
淡水産貝	7	シレナシジミ		1				1												1	河口の泥地	
海産貝	8	イソハマグリ	1	9	2	2		14		6	6	17	52	69	1					90	潮間帯の貝 砂地	パマクィンナ
	9	アラスジケマンガイ															1	1		1	〃 〃	アファクインナ
	10	ヒラマキイモガイ				2		2		1	1		2	2		1		1		6	〃 〃	
	11	リュウキュウシラトリガイ		2				2		2	2	1	4	5						9	〃 砂泥地	
	12	スダレハマグリ								1	1									1	〃 〃	
	13	ホソスジイナミガイ		5				5		1	1		3	3						9	〃 〃	
	14	ヘナタリ											2	2						2	〃 〃	
	15	リュウキュウマスオガイ		3			1	4		4	4	4	11	15	1				1	25	〃 〃	
	16	オハグロガイ											2	2						2	〃 〃	
	17	コンペイトウガイ											1	1						1	〃(高潮帯) 岩礁	
	18	ノシガイ											1	1						1	〃 岩礫地	
	19	ニシキアマオブネ																	1	1	〃 〃	
	20	アマオブネ			1	1		2		1	1	3	1	4						7	〃 〃	マルチャンナ
	21	ウラウズガイ								1	1	1	1	2						3	〃 〃	
	22	オオベッコウガサガイ		1				1		3	3		1	1						5	〃 岩礁	
	23	キバアマガイ				1		1					1	1						2	〃 〃	
	24	ヒバリガイ			3			3												3	〃 〃	
	25	サヤガタイモガイ		2				2				2		2	1					5	〃 〃	
	26	クロミナシガイ			1			1	1	1	2		4	4			1	1		8	〃 〃	
	27	ツノレイシガイ	1	2		1		4		1	1	14	2	16		1	1	2	1	24	〃 〃	
	28	コオニコブシガイ		2		2		4				4	2	6			7	7	1	18	〃 〃	チヌーンナ
	29	マダライモガイ		6	1		1	8				3	9	12			2	2		22	〃 〃	
	30	チトセボラ								1	1	1		1						2	〃 〃	
	31	コシダカギンタカハマ																	1	1	〃 〃	
	32	イトマキボラ		2	2		1	5		1	1	1	3	4		1	1	2		12	〃 珊瑚礁	ククルーンナ
	33	ハナマルユキガイ								3	3		3	3						6	〃 〃	
	34	ハナビラダカラガイ		1				1				1	3	4			1	1		6	〃 〃	
	35	ヤクジマタカラガイ				1		1		1	1		4	4						6	〃 〃	
	36	ヒメジャコ		4	3			7		1	1	1	5	6	1	3	2	5	2	22	〃 〃	ギブ
	37	シラナミガイ	1	2	1	1	1	6	2	2	4	5	7	12	1	1	3	4		27	〃 〃	アジケー
	38	ヒレジャコ																			〃 〃	〃
	39	タケノコガイ		1				1					1	1						2	潮間帯～潮間帯下 砂地	
	40	ウズラガイ								1	1									1	〃 細砂地	
	41	マスオガイ			1			1					1	1					1	3	〃 内湾の泥地	
	42	ニシキミナシガイ					1	1												1	〃 浅地	
	43	マガキガイ	18	188	14	13	7	240	67	289	356	518	1,035	1,553	16	71	501	572	28	2,765	〃 砂や小石の所	シジリンナ

第11表－1　貝殻出土状況

	PL No.	和名 ＼ 地区・層序	A						B			C			D	E			不明	総計	棲息地	方言名
			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅱ	Ⅲ	小計	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	小計				
海産貝	44	キクザルガイ		2				2												2	潮間帯～潮間帯下 岩や小石上付着	
	45	ウネレイシガイダマシ										4	1	5						5	〃 浅い岩礁	
	46	ヤコウガイ		1				1				1		1					1	3	〃 〃	ヤイゲー
	47	アコヤガイ								1	1		1	1			1	1	1	4	〃 岩場に付着	
	48	サラサバテイ		13	6	2	2	23	3	15	18	6	26	32		10	6	16	3	92	〃 珊瑚礁	タンポー
	49	オニコブシガイ				1		1	1	1	2	1	6	7						10	〃 リーフ近く	
	50	ソメワケグリガイ										1		1						1	潮間帯下 砂地	
	51	サメザラガイ			1			1		1	1	1	1	2						4	〃 〃	
	52	モチズキザラ		1	1			2	1	3	4	3	2	5					2	13	〃 〃	
	53	リュウキュウザルボウガイ		1	1	1	1	4		2	2	2	1	3		1	2	3		12	〃 〃	アファクインナ
	54	リュウキュウザルガイ										1		1						1	〃 〃	
	55	チョウセンハマグリ		1				1		3	3	3	8	11					3	18	〃 〃	
	56	タガヤサンミナシガイ								1	1									1	〃 〃	
	57	ミカドミナシガイ		3				3				1		1						4	〃 珊瑚礁の砂中	
	58	ヤキイモガイ											1	1						1	〃 砂地	
	59	ヒモカケセコバイ			1			1												1	〃 岩や小石の所	
	60	スイジガイ		2	4	1	1	8					1	1						9	〃 岩礫地	
	61	クモガイ	1	3	2			6	1	4	5	1	2	3			1	1	1	16	〃 岩礁	マヤーンナ
	62	ベニシリダカガイ	3	17	3	3	1	27		6	6	6	25	31	2				2	68	〃 〃	
	63	ニシキウズガイ		5	2			7		1	1	1	11	12			1	1		21	〃 〃	
	64	ムラサキウズガイ																	1	1	〃 〃	
	65	シオボラ	1					1												1	〃 〃	
	66	ホラガイ		3	1	1		5				1	3	4			1	1	1	11	〃 〃	ブラゲー
	67	ミツカドボラ				1		1												1	〃 〃	
	68	シロナルトボラ				1		1												1	〃 〃	
	69	ホシダカラガイ											2	2						2	〃 〃	モーモーンナ
	70	ヤナギシボリイモガイ								1	1	1		1						2	〃 〃	ブトゥー
	71	チョウセンサザエ	1	43	20	7	7	78	6	39	45	14	97	111	5	1	1	2	4	245	〃 〃	シンターンナ
	72	オニノツノガイ		3				3				2	1	3	1				1	8	〃 珊瑚礁	シンボーラー
	73	オキニシ		1				1				2		2						3	〃 〃	
種不明貝	74	いもがい科		5	3	7		15	1		1	6	4	10			3	3	1	30		
	75	たからがい科			2			2				1	1	2	1					5		
	76	うみぎく科		5				5		1	1	5	7	12					3	21		イシナブ
	77	えがい科		3	1	2	1	7		2	2	2	5	7					3	19		
	78	未同定種			3	2		5					2	2					2	9		
その他	79	オウムガイ											1	1						1	珊瑚礁の水深200m位の海底	
	80	チョウセンサザエの蓋	2	19	4			25	10	47	57	66	101	167	3	1	4	5	4	261		
	81	ヤコウガイの蓋										1	1	2		2	1	3		5		
	82	ひざらがい科			1			1														グジマ
	83	むかでがい科																	1			
	84	パイプウニの棘																	1	1		

第11表－2　貝殻出土状況

c　潮間帯～潮間帯下＜砂地＞（PL・36−39～44）

マガキガイの他に5種が検出された。出土量は2,772個（69.74%）で海産貝の中では最も多く，中でもマガキガイが2,765個と最も多い。地区別にはC地区で1,553個と最も多く出土している。

d　潮間帯～潮間帯下＜岩礁～珊瑚礁＞（PL・36−45～49）

サラサバティ，オニコブシガイ等の5種検出された。出土量は116個（2.92%）で少なく，その中では，サラサバティが92個と最も多い。地区別にはA・C地区に多い。

e　潮間帯下＜砂地＞（PL・37−50～60）

リュウキュウサルボウ，チョウセンハマグリ，モチヅキザラ等11種で，出土量は65個（1.64%）で少なく，前者の　個が多い方に属する。地区別にはC地区に多い。

f　潮間帯下＜岩礁～珊瑚礁＞（PL・37,38−61～73）

チョウセンサザエ，ベニシリダカガイ，ニシキウズ，クモガイ等の13種で477個（12%）で，潮間帯＜砂地＞に次いで出土量が多い。地区別にもA・C地区に多く，とくにⅢ層に集中する。チョウセンサザエは殻245個，蓋261個とほぼ同数出土しているが，これらは殻の殻口部分が大幅に割られていることから，あるいは〝むきみ〟[3]として利用されたとも考えられる。

g　そ　の　他（PL・38−74～83）

うみぎく科，えがい科，ひざらがい科，むかでがい科は，種の判別が不明あるいは困難であるため科で統一し，種の判別不明のいもがい科，たからがい科は科でまとめて記述した。「未同定種」は後日出てきた未同定の貝の中で，貝種が不明確なものである。

オウムガイは，フィリッピン近海の珊瑚礁の水深200mの海底に棲息するも，本貝塚ではC地区Ⅲ層に1例検出された。博物館の大城逸朗氏の御教示によれば「オウムガイのメスは産卵期になると貝殻から抜け出るため，そのような貝殻が黒潮にのって漂着したものではなかろうか。」とのことである。

ヤコウガイの蓋はC地区で2個，E地区で3個出土した。これらは食用として利用したものか貝製品の材料としたかは不明である。

以上のことより，各地区のⅢ層における貝類の組成を第12表に示した。

貝殻の分類に際して

1. 各貝種の棲息地については

① 波部忠重・小管貞男共著の標準原色図監全集3『貝』保育社

② 吉良哲明著の「原色日本貝類図鑑」　1964年　増補改訂版　保育社

③ 波部忠重著の「続原色日本貝類図鑑」　1962年　保育社

④ 白井祥平著の「原色沖縄海中動物生態図鑑」　1977年　新星図書

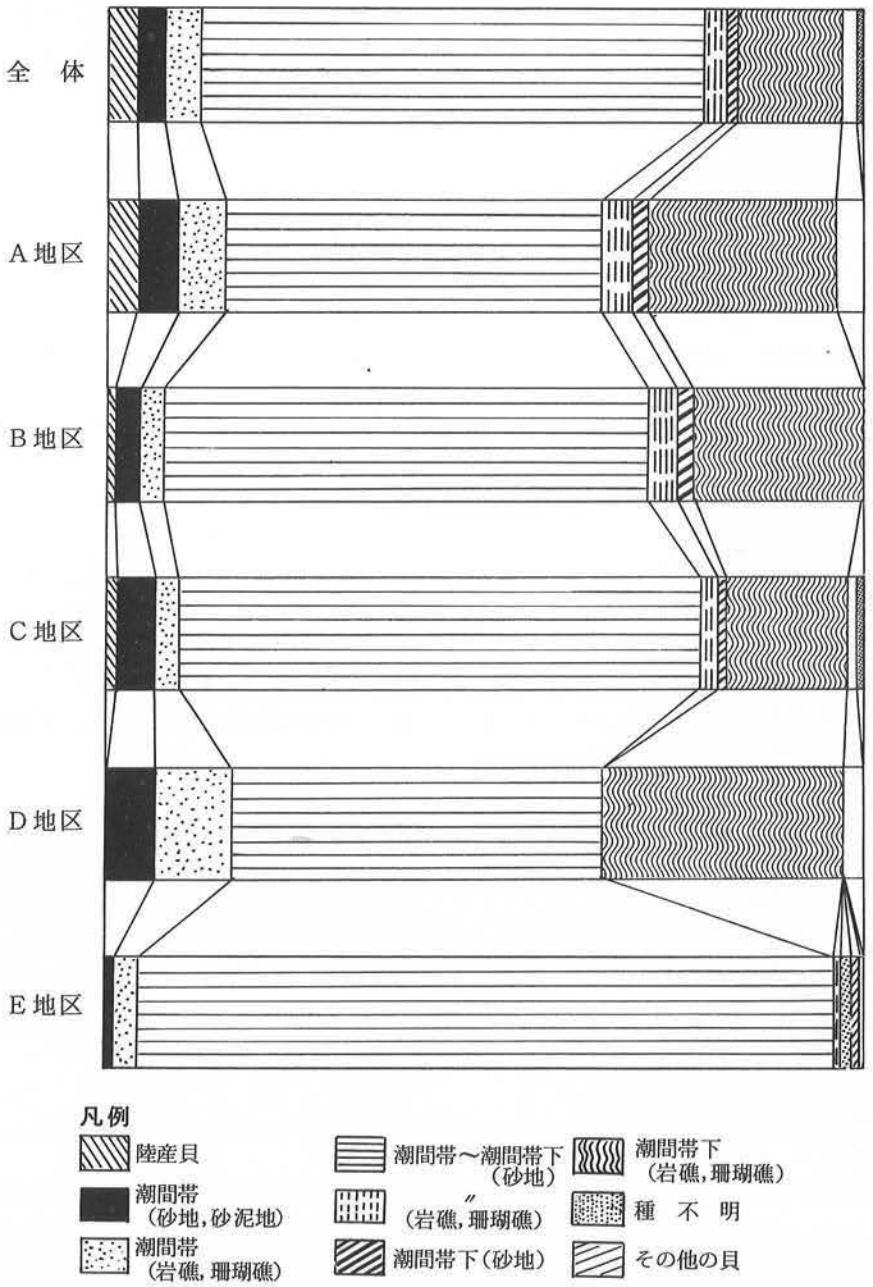
⑤ 沖縄生物教育研究会編著の「沖縄の生物」　1976年

を参考にし，上記①を主に採用した。

2. 重量については，水洗いした巻貝の中にかなり土が残っており，重量の正確さを欠くのであえて重量の欄を設けなかった。

3. 第１１表の整理番号とＰＬ番号は同じである。

4. 第１１表中の方言名は発掘調査期間中に金武の聞き取りによるものである。



第12表　キガ浜貝塚貝類組成図

収　　束

本貝塚における貝殻の主体は海産貝であるが，前期土器の共伴するＡ・Ｂ・Ｃ地区においては陸産貝も出土した。またカヤウチバンタ式土器が多く出土するＤ地区においては，貝の出土も僅少し種類も少ない。また主に遺構内で検出された。後期土器を主体とするＥ地区では出土量は少ないが，マガキガイが主体である。しかし本貝塚は地区別にわずかながら時代差があるが，マガキガイを主体とする点はどの地区でも同じであり，多量に入手しやすいためか，あるいは好んでとったものか，今後の貝殻の詳細の分析と資料の追加がまたれる。

参 考 文 献

注 1.　「郷土の水産資源」沖縄県農林水産部水産課　１９７７

2.　渡喜仁浜原貝塚調査団「渡喜仁浜原貝塚調査報告書」今帰仁村教育委員会　１９７７

3.　山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題」『九州考古学諸問題』福岡考古学研究会篇　１９７５

4.　貝製品の「貝刃」項参照

Ⅵ 総　　括

これまで発掘調査の成果を記述してきたが，最後に，今回の調査成果によって，キガ浜貝塚人の生活と文化をある程度復原してみたいと思う。

第１に，キガ浜貝塚はどのような場所に形成されているのだろうか。

本遺跡は，津堅島の東海岸砂丘上に形成され，魚貝類の豊富な海を持っている。出土する貝殻や魚骨の量がそれを示している。この生活条件のよい場所に，沖縄貝塚時代前期，中期，後期の遺跡が形成されており，長い期間古代人に利用されてきている。

第２に，この場所にいつ頃から人々が住みついたのだろうか。

Ａ地区第Ⅳ・第Ⅴ・第Ⅵ層から検出された木炭によって，^{14}Ｃ測定の結果，つぎのような年代が出ている。

第Ⅳ層	３１８０±９５ Ｙ・Ｂ・Ｐ	（３０９０±９０Ｙ・Ｂ・Ｐ）
第Ⅴ層	３２００±６５　〃	（３１１０±６５　〃　）
第Ⅵ層	３４２０±１００　〃	（３３２０±９５　〃　）

※ 年代測定は，^{14}Ｃの半減期５７３０年（カッコ内はＬｉｂｂｙの値５５６８年）にもとづいて計算され，西暦１９５０年よりさかのぼる年数（ｙｅａｒｓ Ｂ･Ｐ）として示されている。

（日本アイソトープ）

この年代は，類似遺跡の熱田原貝塚が３３７０±８０Ｙ・Ｂ・Ｐと出ており，ほぼ妥当な年代と考えられる。これらの測定結果の出ている層は，伊波・荻堂式土器を中心とする沖縄貝塚時代前期前半のものである。これに後続するものとして，Ｃ地区第Ⅱ層，Ｄ地区第Ⅲ層などの前期後半から中期初頭の遺跡があり，連続はしないが，Ｅ地区の後期前半の遺跡がある。このように連続しない部分もあるが，一応，今から約3,400年前から約1,800年前まで人々が住んでいたと考えられる。

第３に，これらの人々の住居はどのようなものであっただろうか。

Ａ地区第Ⅵ層というのは竪穴住居址である。約２８０㎝×２５０㎝のほぼ方形のプランで，地山を約３０㎝掘り込み，中央に炉跡のある住居址で，荻堂式土器を中心とする前期前半の時代である。この時代に，すでに竪穴住居址があったことが証明された。しかし，建物については，まったく不明である。

第４に，生活用具や装飾品などはどのようなものを使用していたのだろうか。

石器は石斧，敲石，凹石，石皿，磨石などが検出されているが，ほとんど破損品である。これらの石器の材料は，遠く国頭や慶良間などから取り入れており，石器の良材を求めて，広域な行動があったと考えられる。

土器は本遺跡で最も古いと考えられる伊波・荻堂式土器が多く，特に荻堂式土器が多い。これに後続する土器として，大山式土器，地荒原式土器，カヤウチバンタ式土器，川田原式土器などが検出された。器形は深鉢形や壺形で煮炊きや貯蔵用として使用されたと考えられる。これらの土器に共伴して，奄美系土器が検出されており，何らかの形で，奄美と関係があったと思われる。

貝製品や骨製品も多く検出されているが，それには生活用具として使用されたと考えられるものと，装飾品として使用されたと考えられるのもあるが，用途不明のが多い。これらの製品の中で，特に注目されるのは，サメ歯模造貝製品である。用途についての結論は出せないが，少なくとも，サメ歯が貴重であったことを示しているのではなかろうか。

第６に，どのようなものを食べて生活していたのだろうか。

Ｃ地区において，第３層の砂をすべて水洗いして，貝殻，獣魚骨，木の実などの食糧残滓の検出に努めたが，木の実は１個も検出できなかった。したがって，貝殻や獣骨，魚骨だけの資料である。海が近く，魚貝類が豊富であったことの現われかほとんど海の食料残滓で，陸産のものはイノシシとマイマイ類だけである。イノシシは現在津堅島には棲息していない。当時は津堅島にも棲息していたのだろうか，あるいは，沖縄本島から持ち込んだのだろうか。

貝殻は種類・量ともに豊富である。魚骨は珊瑚礁の魚がほとんどで，魚・貝ともリーフより外の深海のものは見られない。リーフまでが，彼等の生活域だったと考えられる。

第７に，集落の規模と構造はどうであっただろうか。

範囲確認調査で，面としての発掘はしてないので，どの程度の集落で，どのような集落形態をなしていたかなどは解明できなかった。今後，面としての集落の調査が特に望まれる。

以上７点ほど上げて，古代人の生活と文化を若干見てきたが，このような古代人の残した遺跡をわれわれはどのように保存し，活用して行くべきであろうか。

今回の範囲確認調査で，石器，土器，貝製品，骨製品，自然遺物など多くの資料が検出された。これらの資料は，津堅島で資料館等をつくって保存することが最も望ましいと考える。島の人々が，

先祖の残した文化遺産を活用し，また，島外の人々は，津堅島まで足を運んで，遺物は勿論，遺跡の立地環境まで理解していく必要があろう。幸いに，今回の範囲確認調査の結果，本遺跡については圃場整備からはずし，保存することで話がまとまった。これらの遺物を積極的に活用すると同時に，開発の危機に直面している多くの遺跡の保存をも積極的に進めていかなければならない。

図　　版

PL.1　キガ浜貝塚付近の空中写真（1 ： 3000）

PL. 2　　1 キガ浜　　2 発掘開始

PL. 3　1 B地点発掘　　2 土器検出

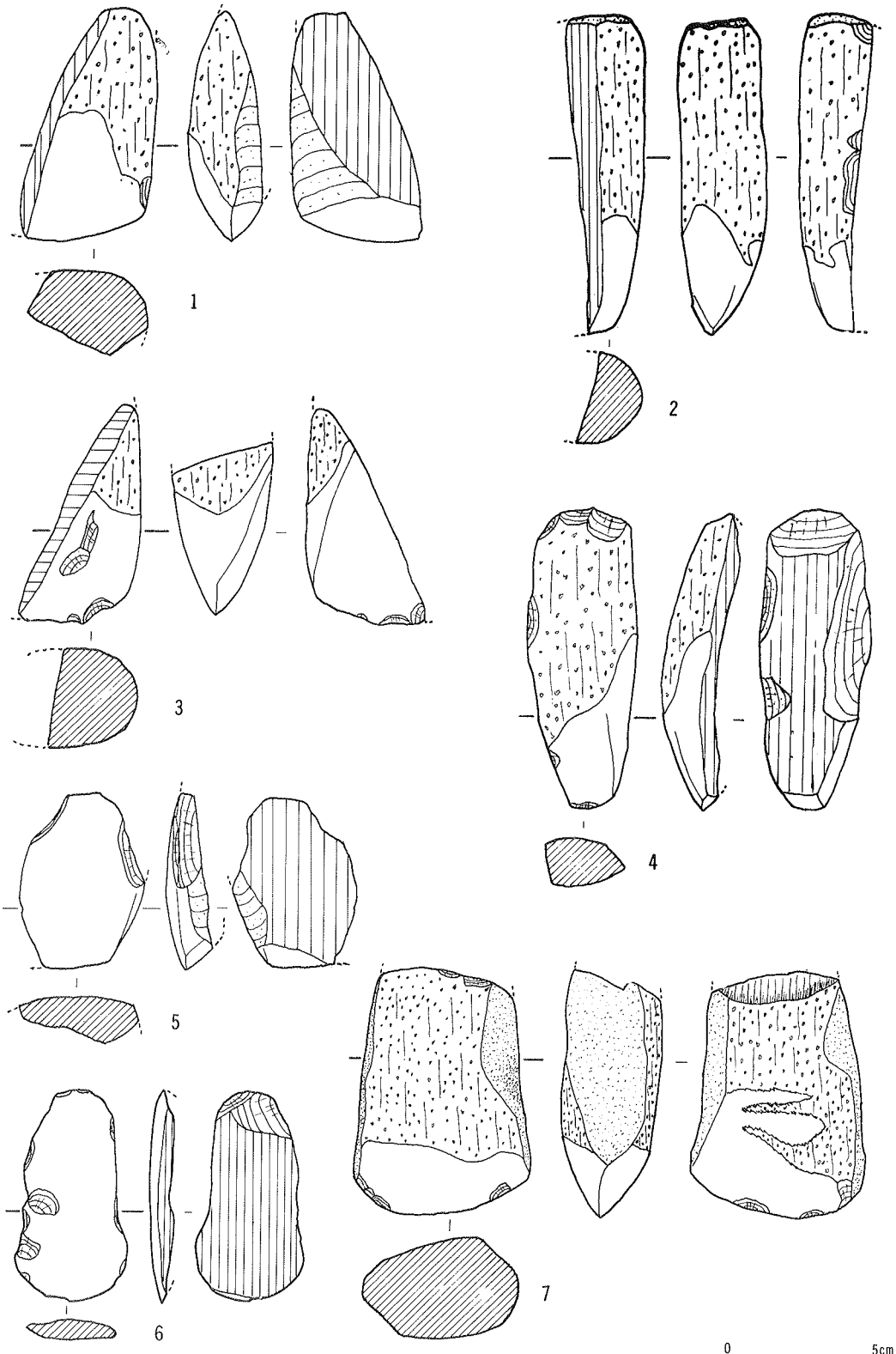
PL. 4　　1　C地区東壁層序　　2　断面実測

PL. 5　　1　D地区竪穴住居址と石組遺構
　　2　A地区Ⅳ層の荻堂式土器検出

PL. 6

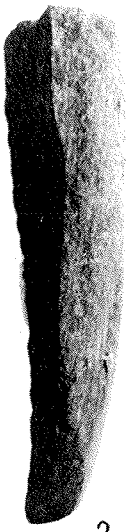
1　A地区Ⅳ層の竪穴住居址と層序（西から）

2　竪穴住居址（東から）



第9図　石　器

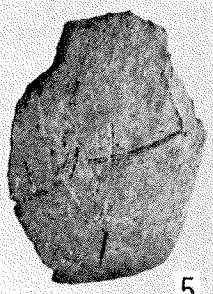
1



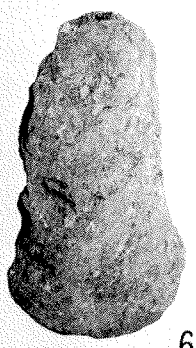
2

3

4



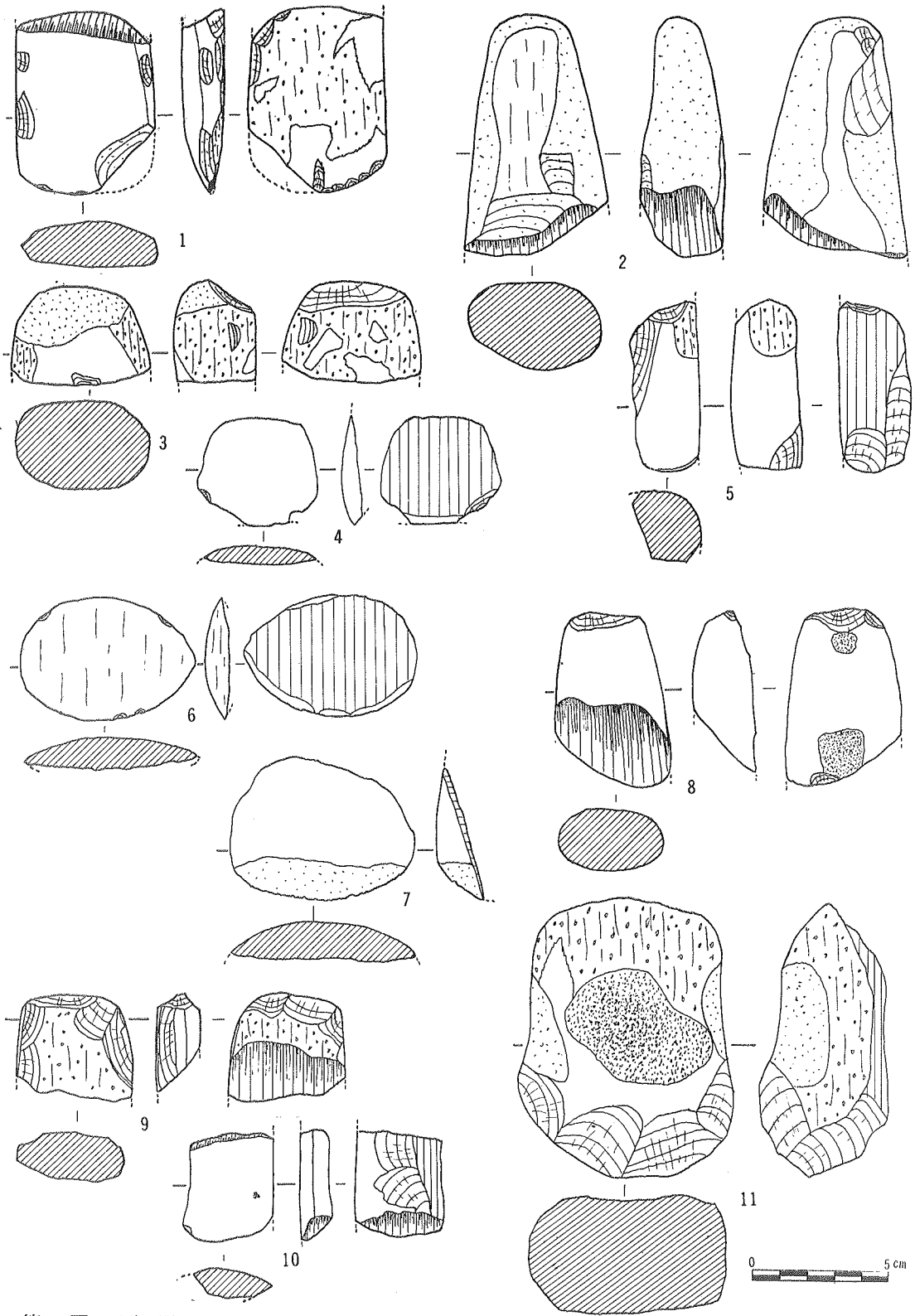
5



6

7

PL. 7



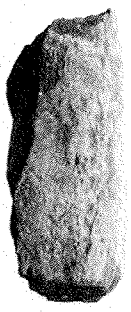
第10図　石　器

1

2

3

4

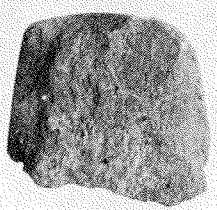


5

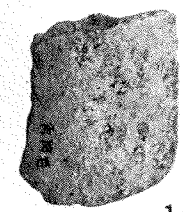
6

7

8



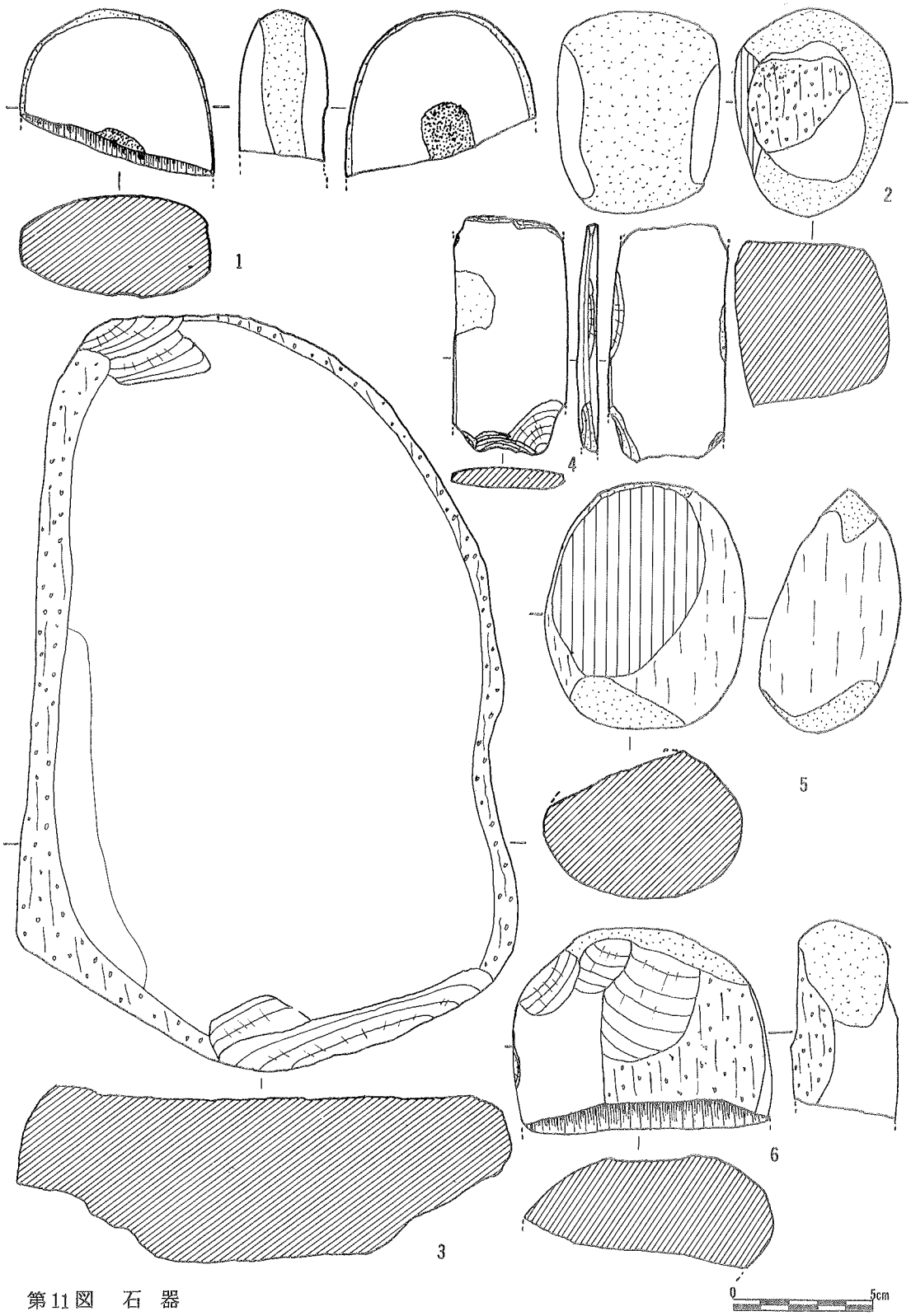
9



10

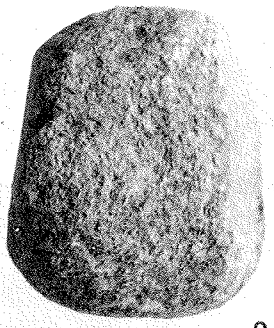
11

PL. 8



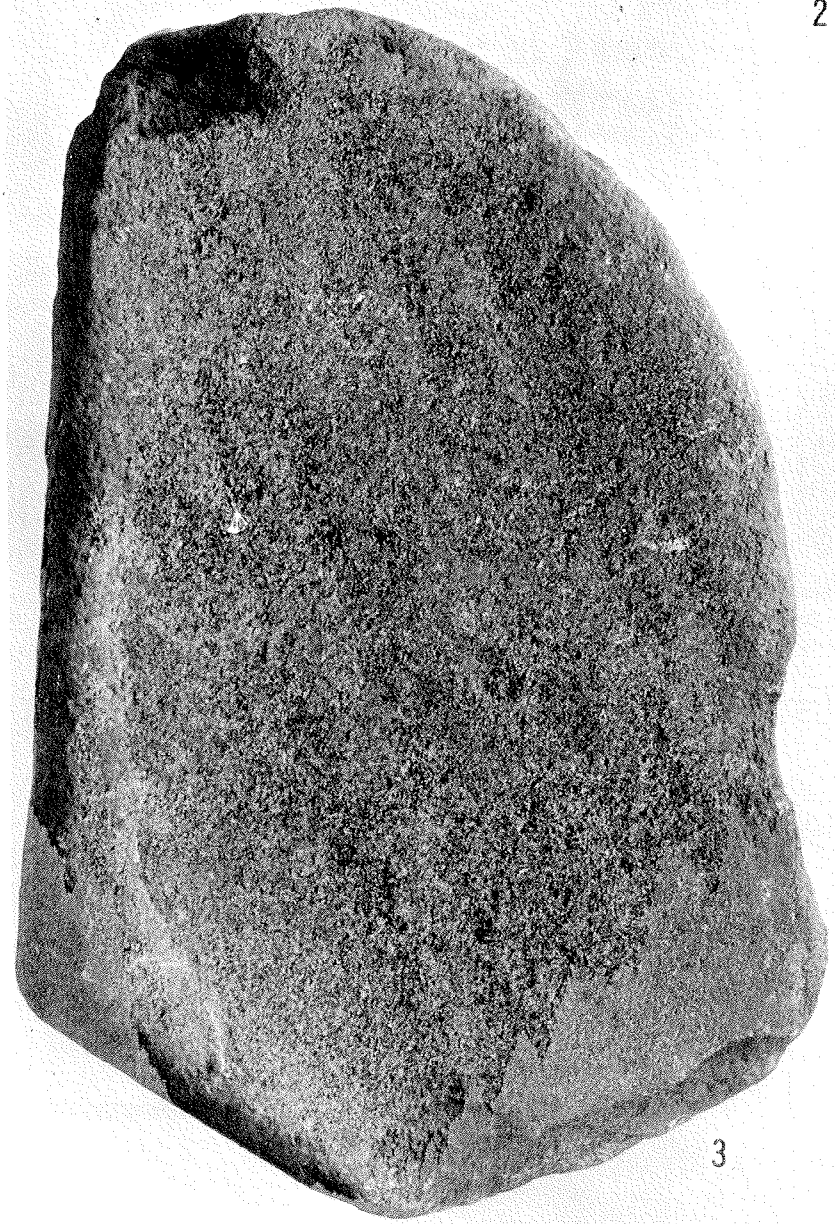
第11図　石　器

1



2

4

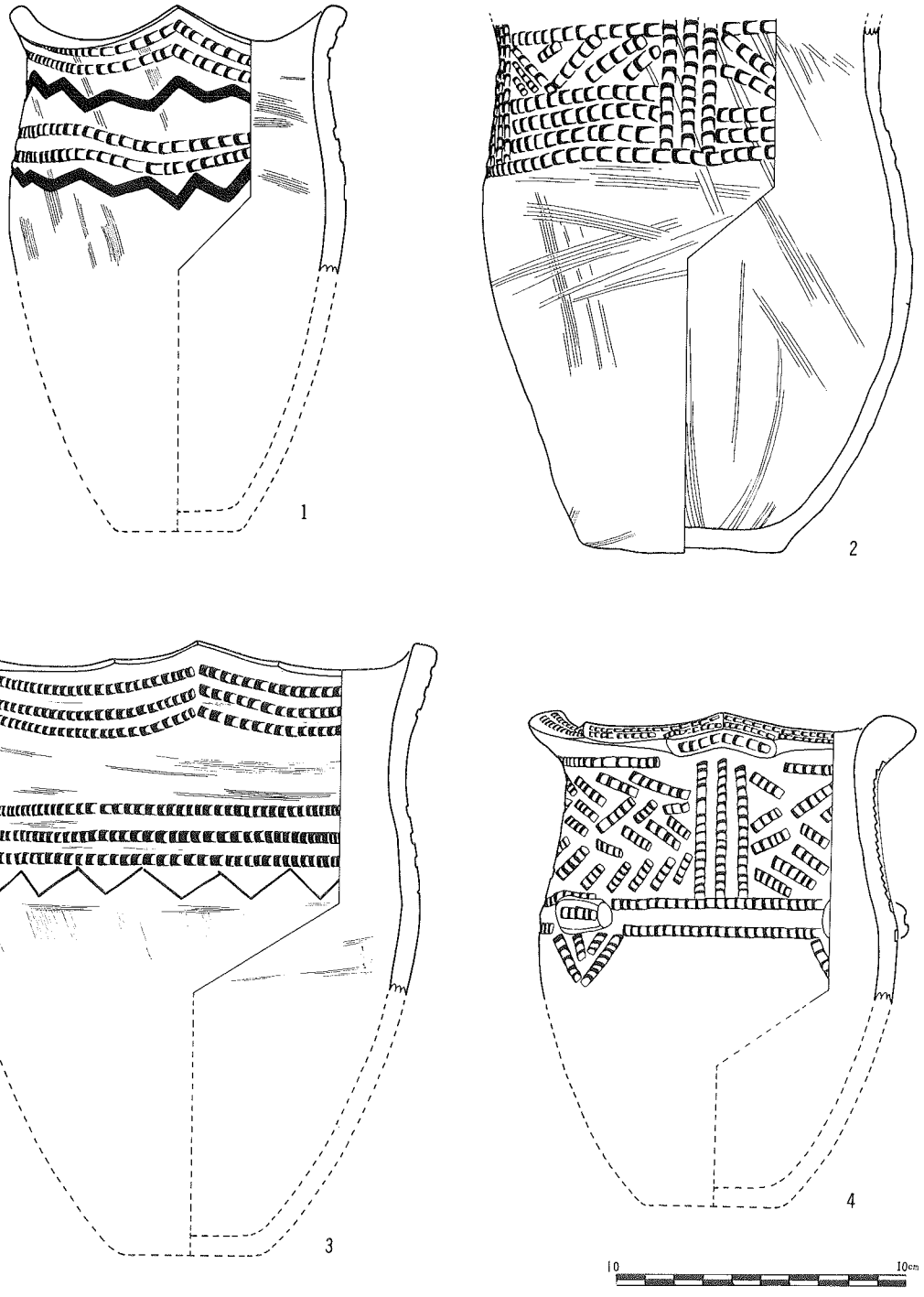


3

5

6

PL. 9



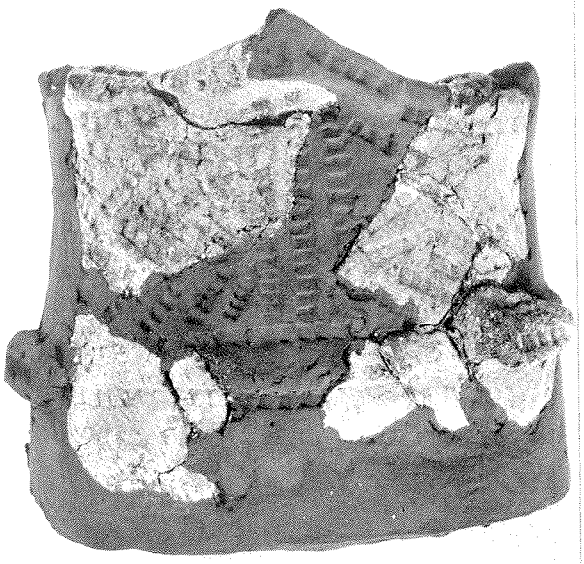
第12図　荻堂式土器

A地区　Ⅲ層（1）　Ⅳ層（2～4）

1

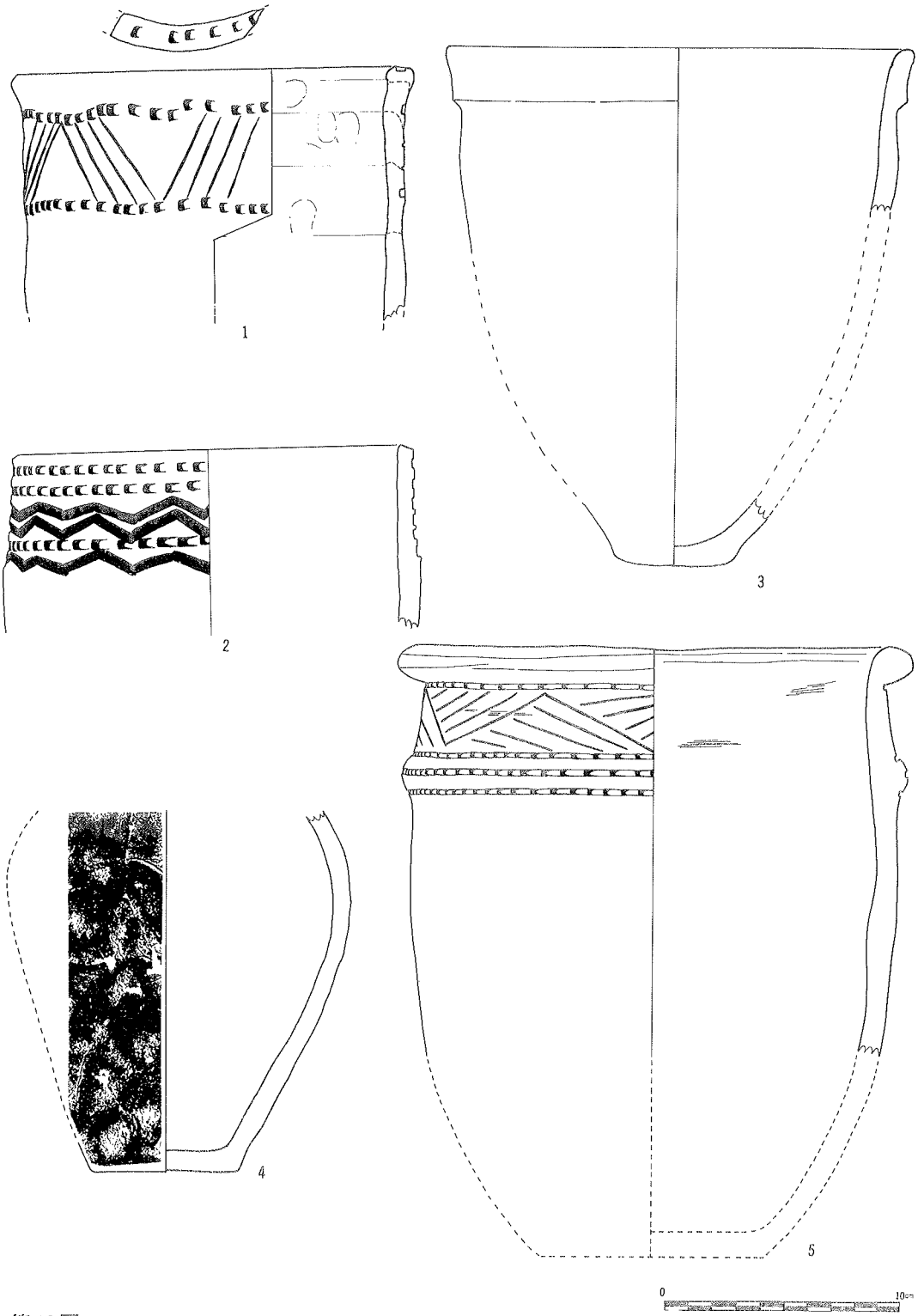
2

3



4

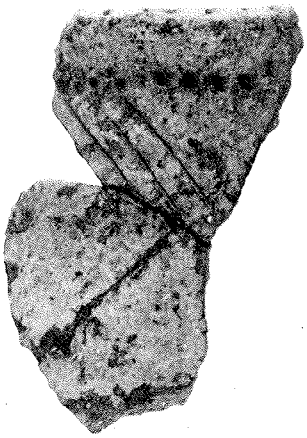
PL. 10



第13図

荻堂式(2)　カヤウチバンタ式(3)　奄美系土器型式不明①(1)　②(5)　⑧(4)

A地区　Ⅲ層(2)　Ⅳ層(1.4)　B地区　Ⅱ層(3)　Ⅲ層(5)



1

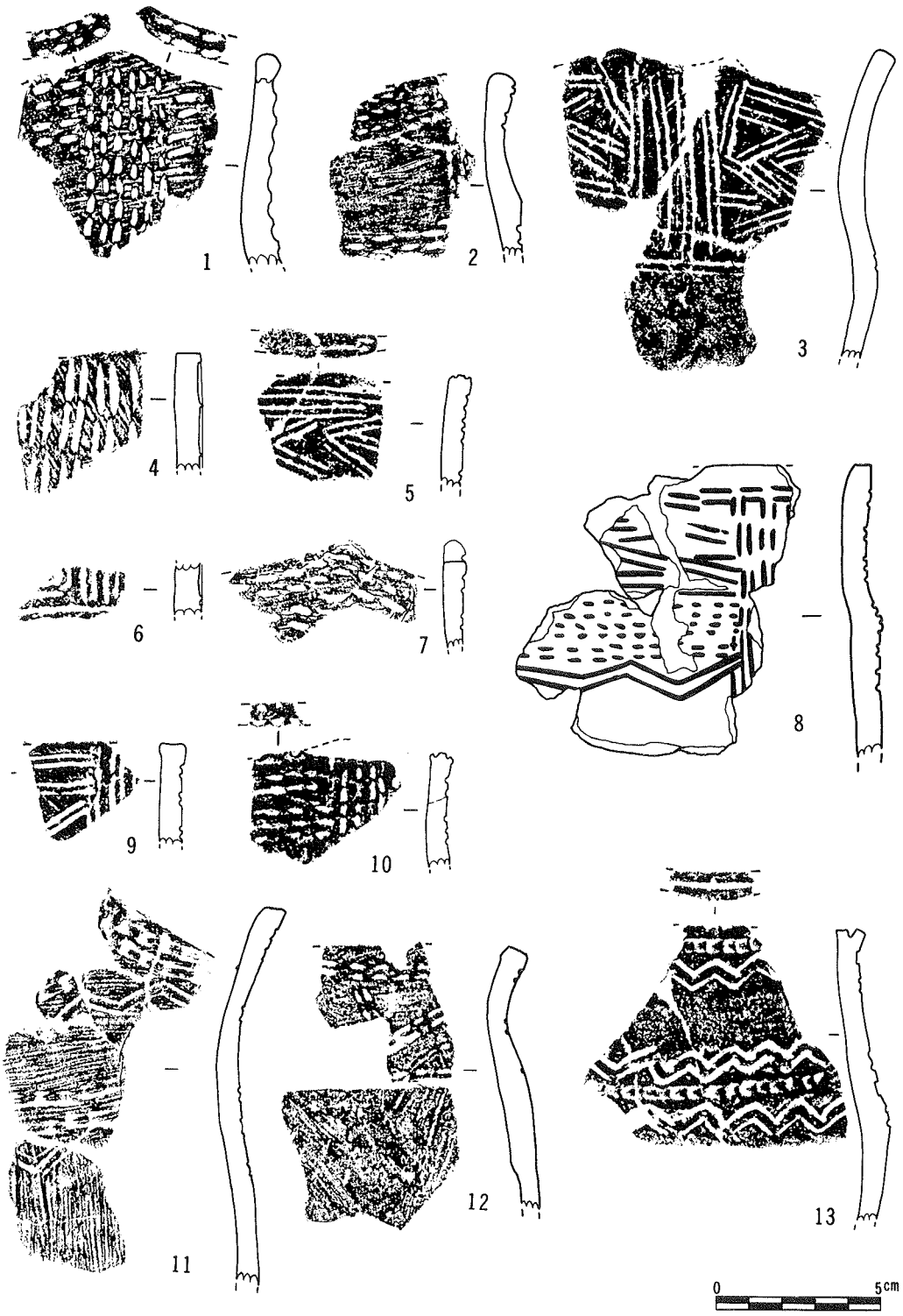
3

2

4

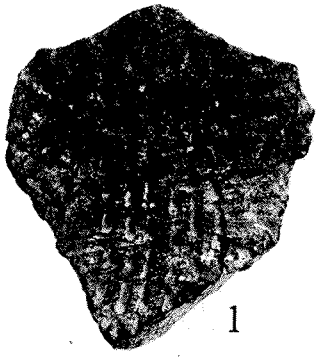
5

PL. 11

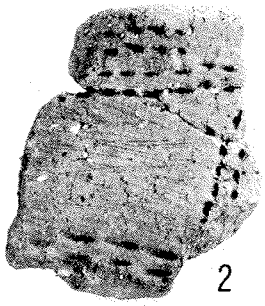


第14図　A地区出土の土器

伊波式（1～9）荻堂式（10～13）／Ⅲ層（1.4.6.9.11.12）Ⅳ層（8.13）Ⅴ層（2.3.5.7.10）



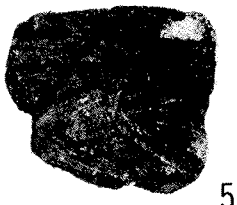
1



2

3

4

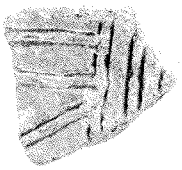


5

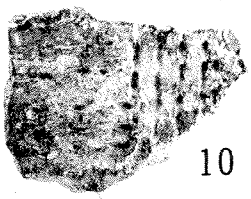
6

7

8



9



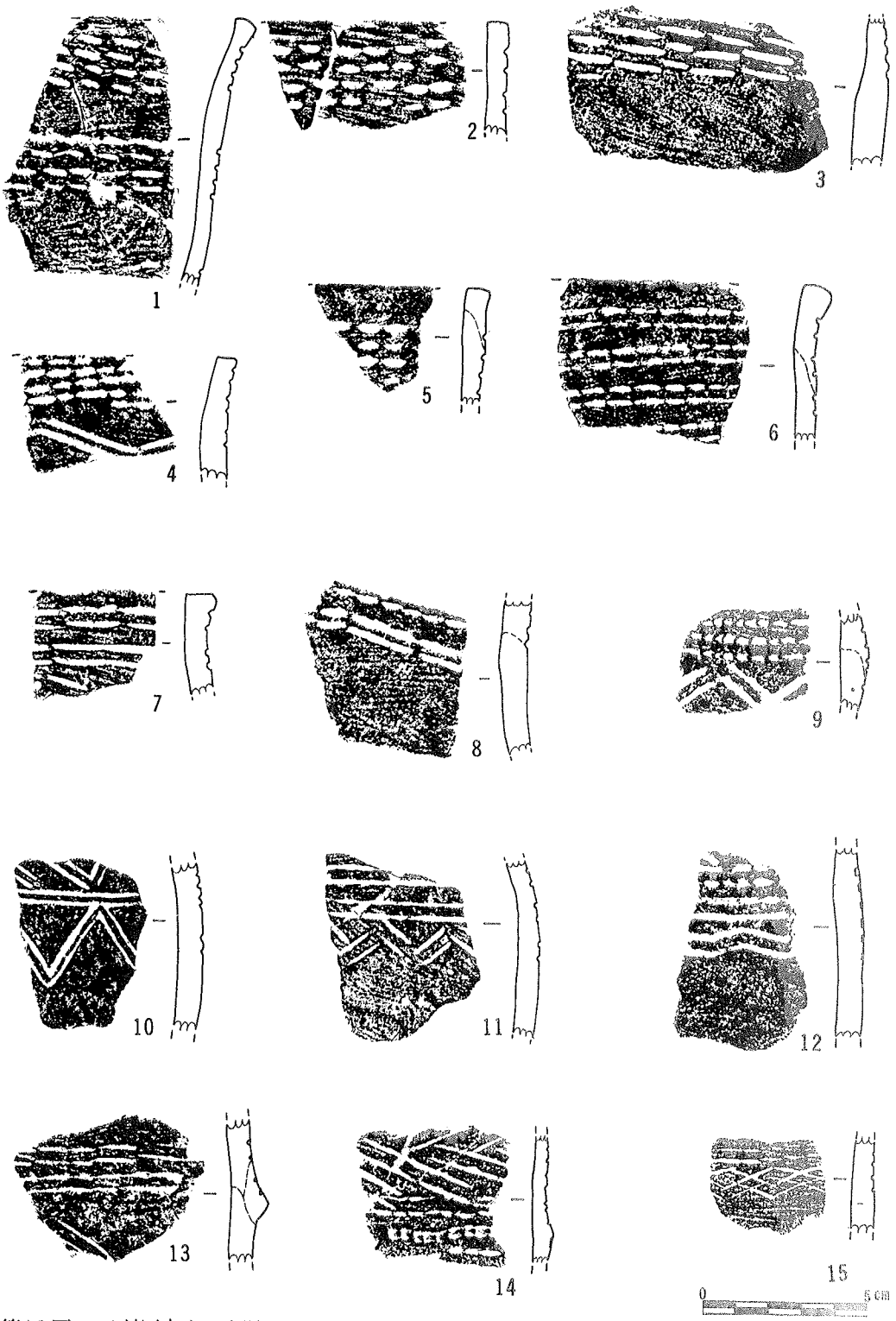
10

11

12

13

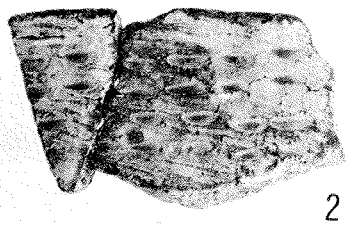
PL. 12



第15図　A地区出土の土器

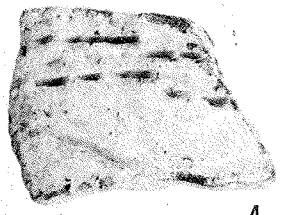
伊波式（1～5）　荻堂式（6～15）　Ⅲ層（2～4～7.9.11.12.14.15）　Ⅴ層（1.3.8.10）　Ⅵ層（13）

1

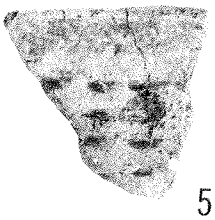


2

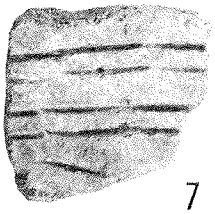
3



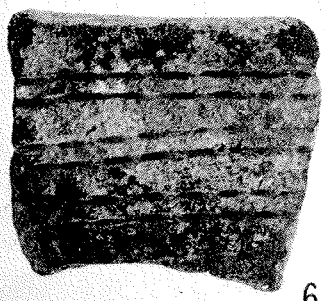
4



5

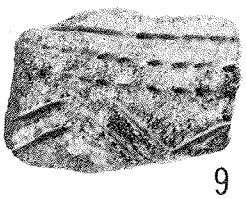


7



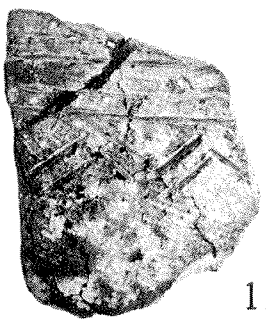
6

8



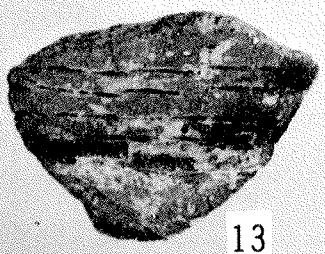
9

10



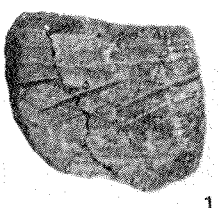
11

12



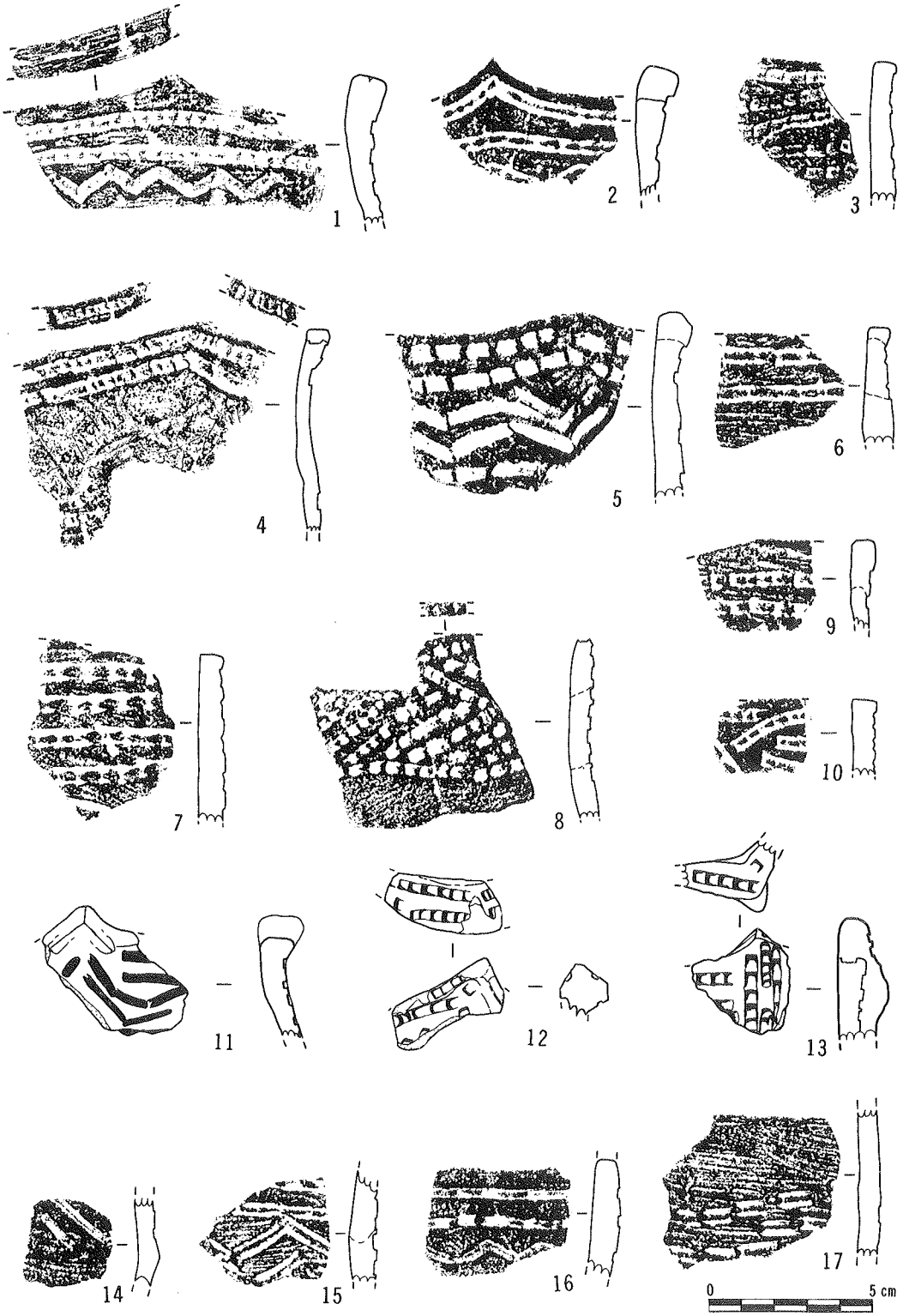
13

14



15

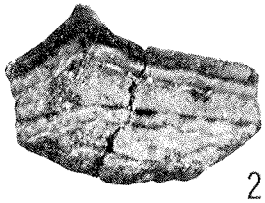
PL. 13



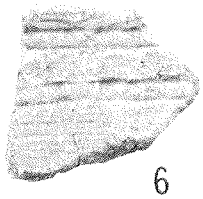
第16図　A地区出土の土器

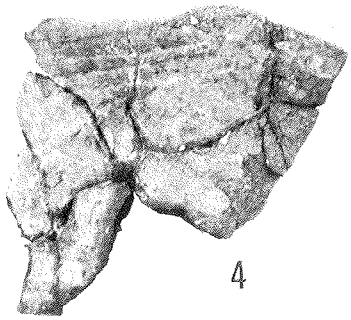
荻堂式（1～17）Ⅲ層（1.2.5.9.10.11.12.14～17）Ⅴ層（3．6．7．8．13．17）Ⅵ層（4）

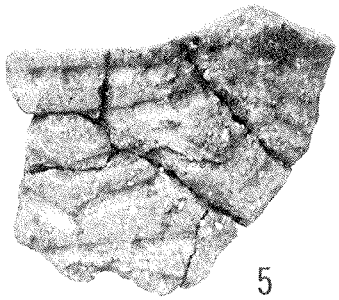
1


2

3

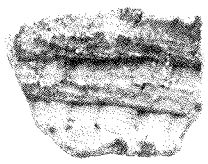

6


4

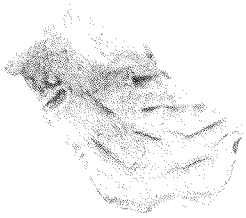

5

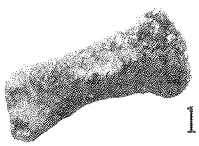
7

8


9

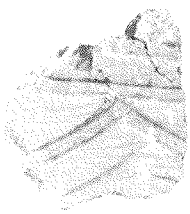
10

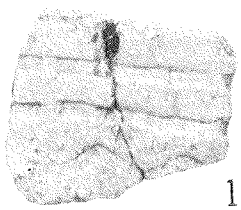

11

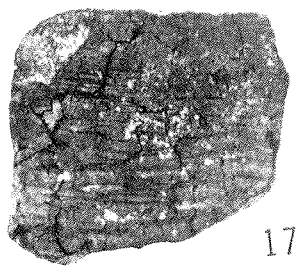

12

13

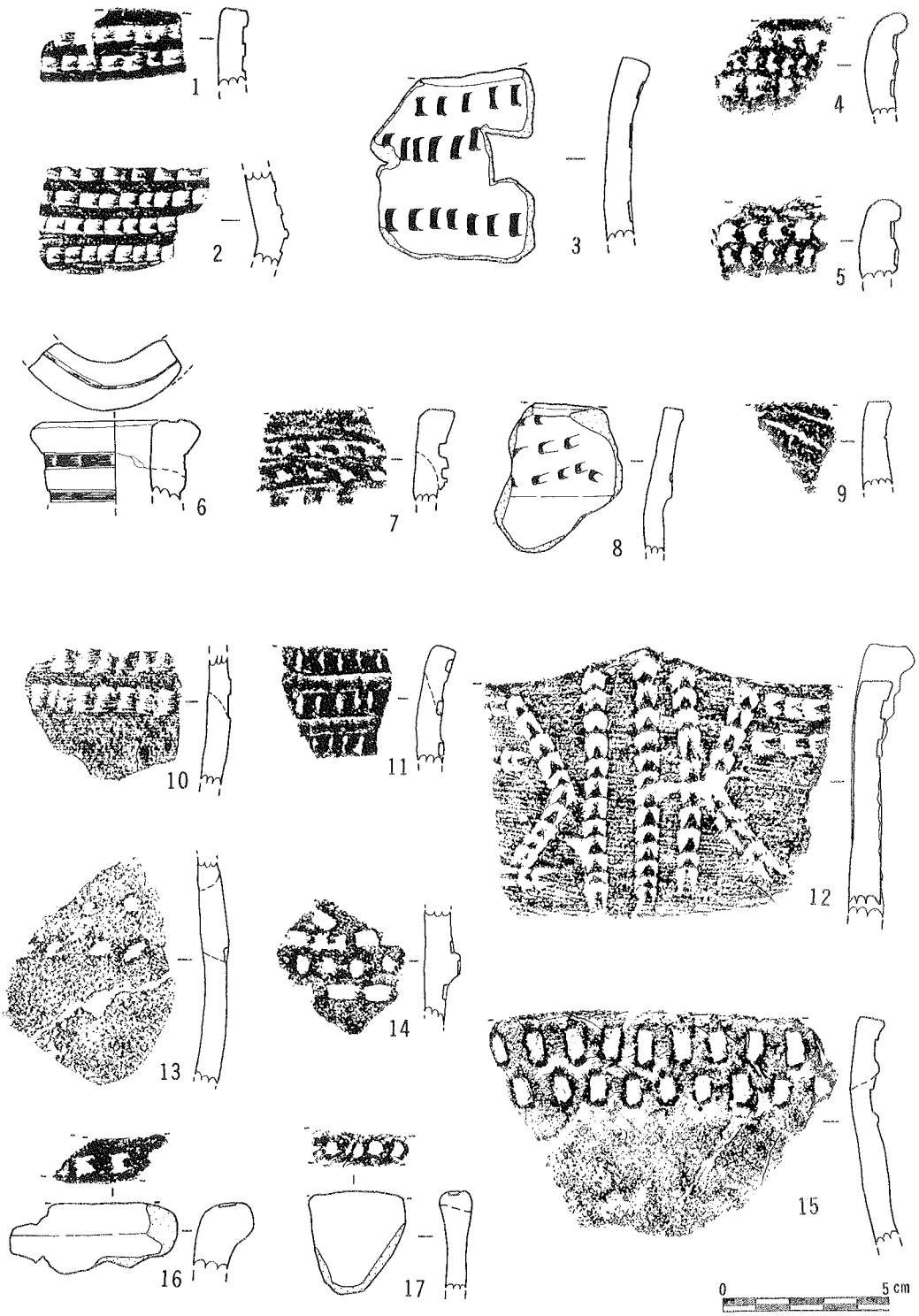
14


15


16


17

PL. 14



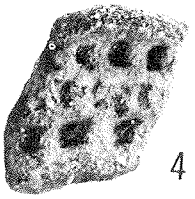
第17図　A地区出土の土器

荻堂式（1.2.12）大山式（3～5.6.10.13.14）地荒原A式（8.9）奄美系土器型式不明⑤（15）
沖縄的土器・型式不明③(6)　④（16.17）
Ⅱ層(9)　Ⅲ層（3～6.7.8.11.13～15）　Ⅳ層（1.2.12.14.16.17）　Ⅵ層（10）

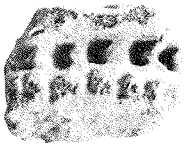
1

2

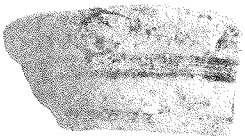
3



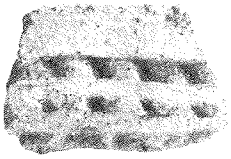
4



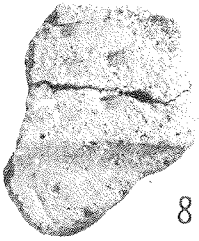
5



6

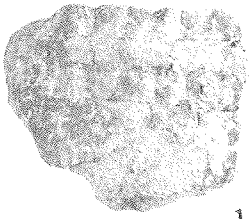


7

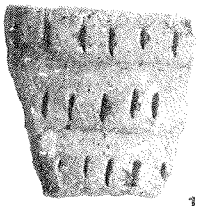


8

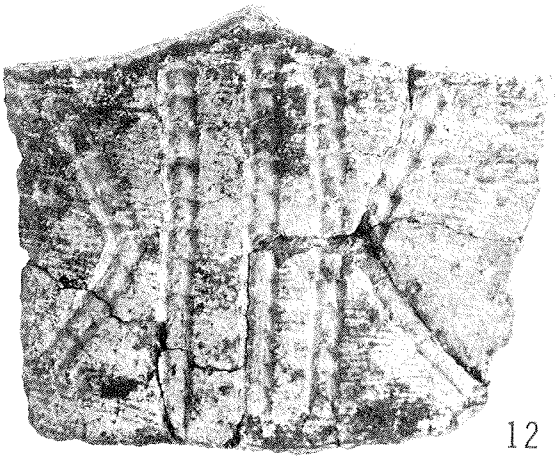
9



10

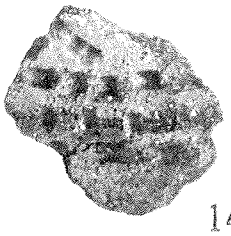


11

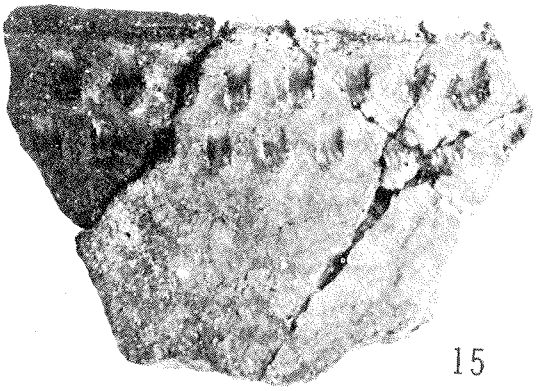


12

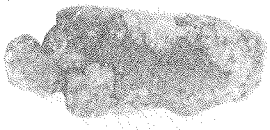
13



14



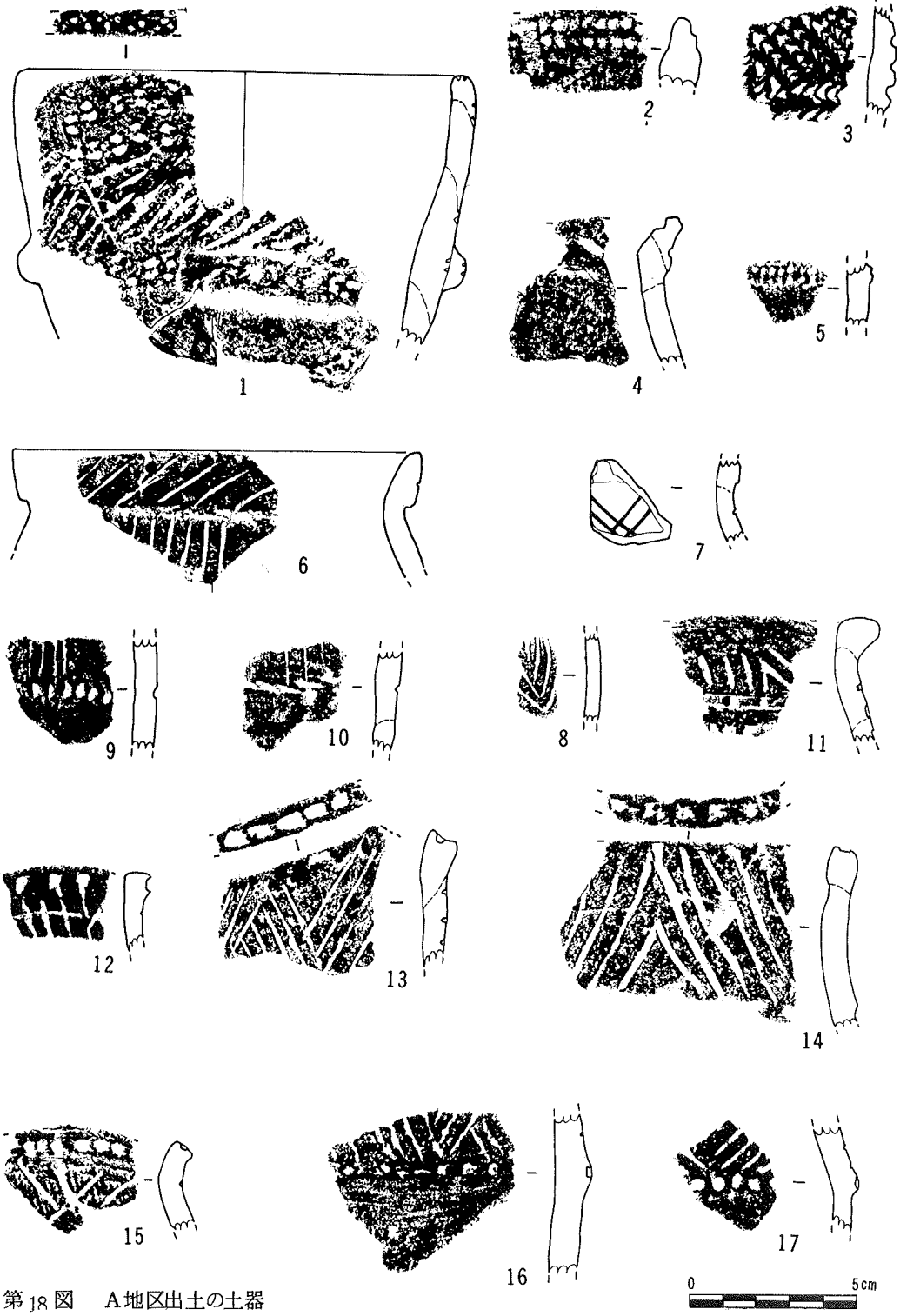
15



16

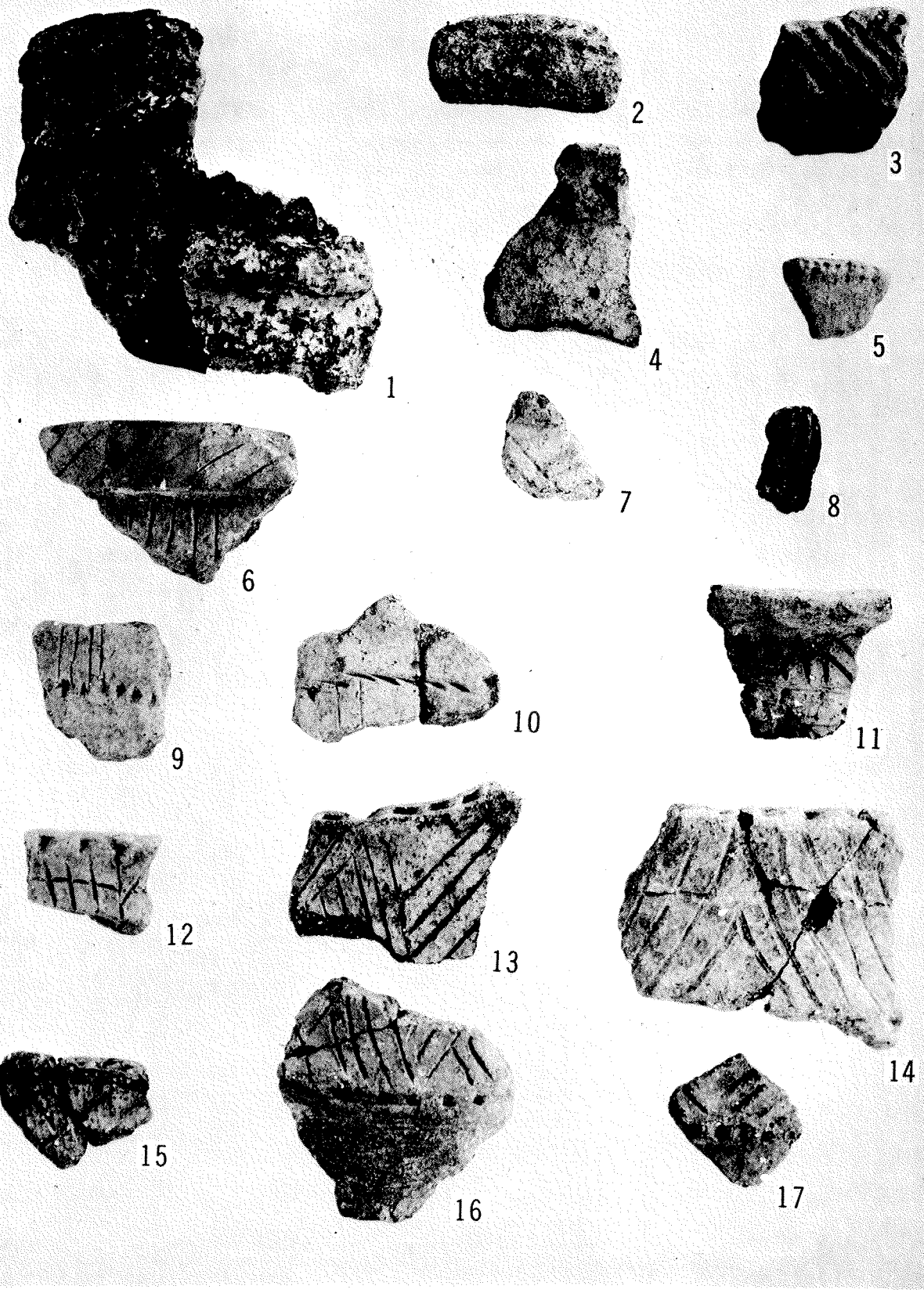
17

PL. 15

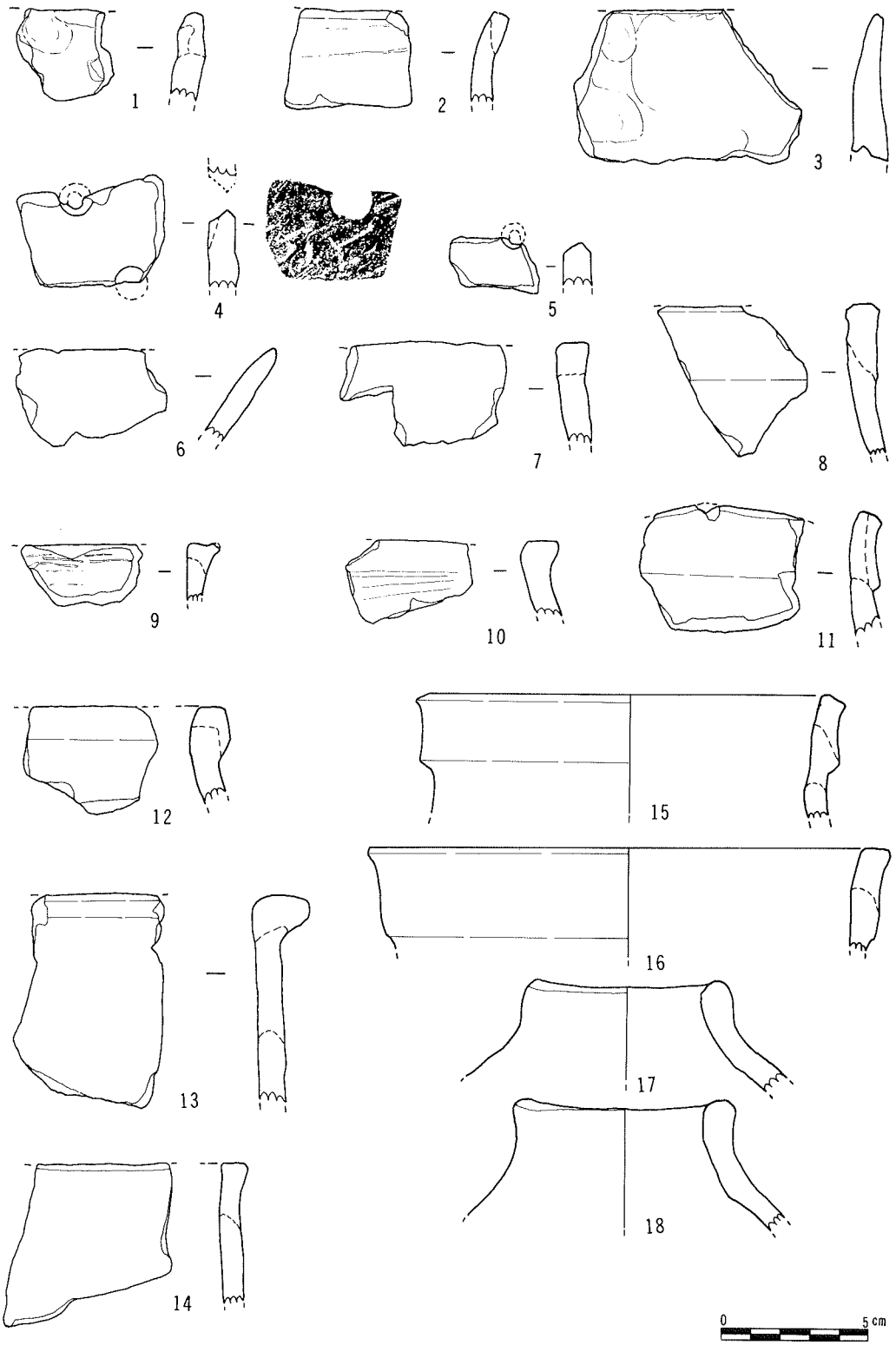


第18図　A地区出土の土器

沖縄的土器・型式不明①（1）　面縄東洞式（2）（3）　喜念Ⅰ式（5）　奄美系土器・型式不明①（12～17）②（11）④（4.6.9.10.）⑨（7.8）Ⅱ層（2）Ⅲ層（1.3～6.9～12.16.19）Ⅳ層（13）Ⅴ層（7.8）

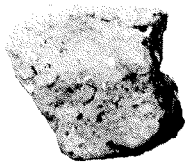


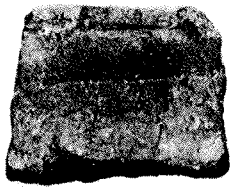
PL. 16

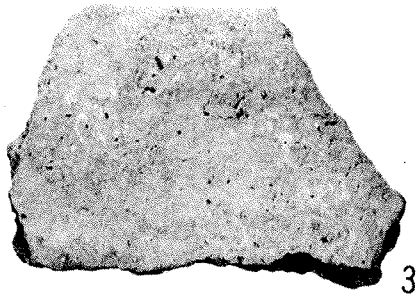


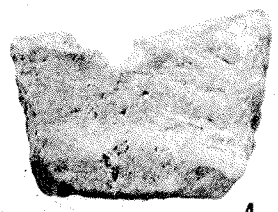
第19図　A地区出土の土器

荻堂式壺型（17.18）カヤウチバンタ式（8.10.11.12.15.16）沖縄的土器型式不明⑤（7.9.13.14）
後期土器（1～6）Ⅰ層（1～5）Ⅱ層（6～8）Ⅲ層（9～13.15.16）Ⅴ層（14.18）Ⅵ層（17）

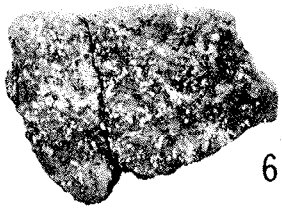

1


2

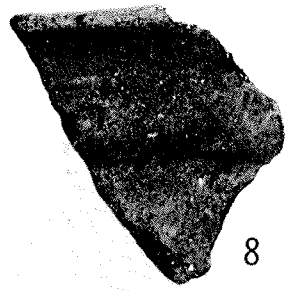

3


4

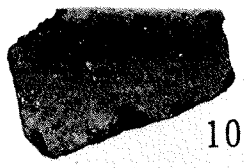
5


6

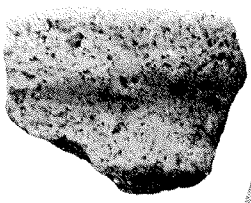
7


8

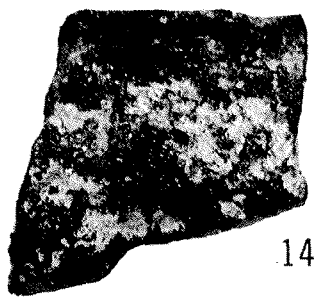
9


10

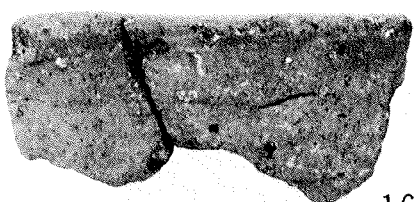
11

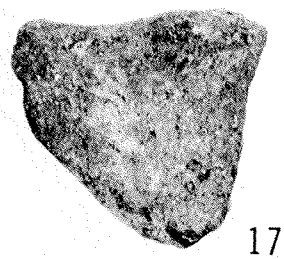

12

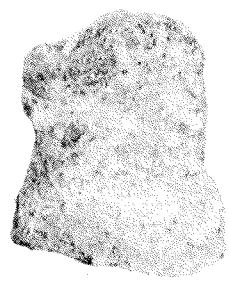
13


14

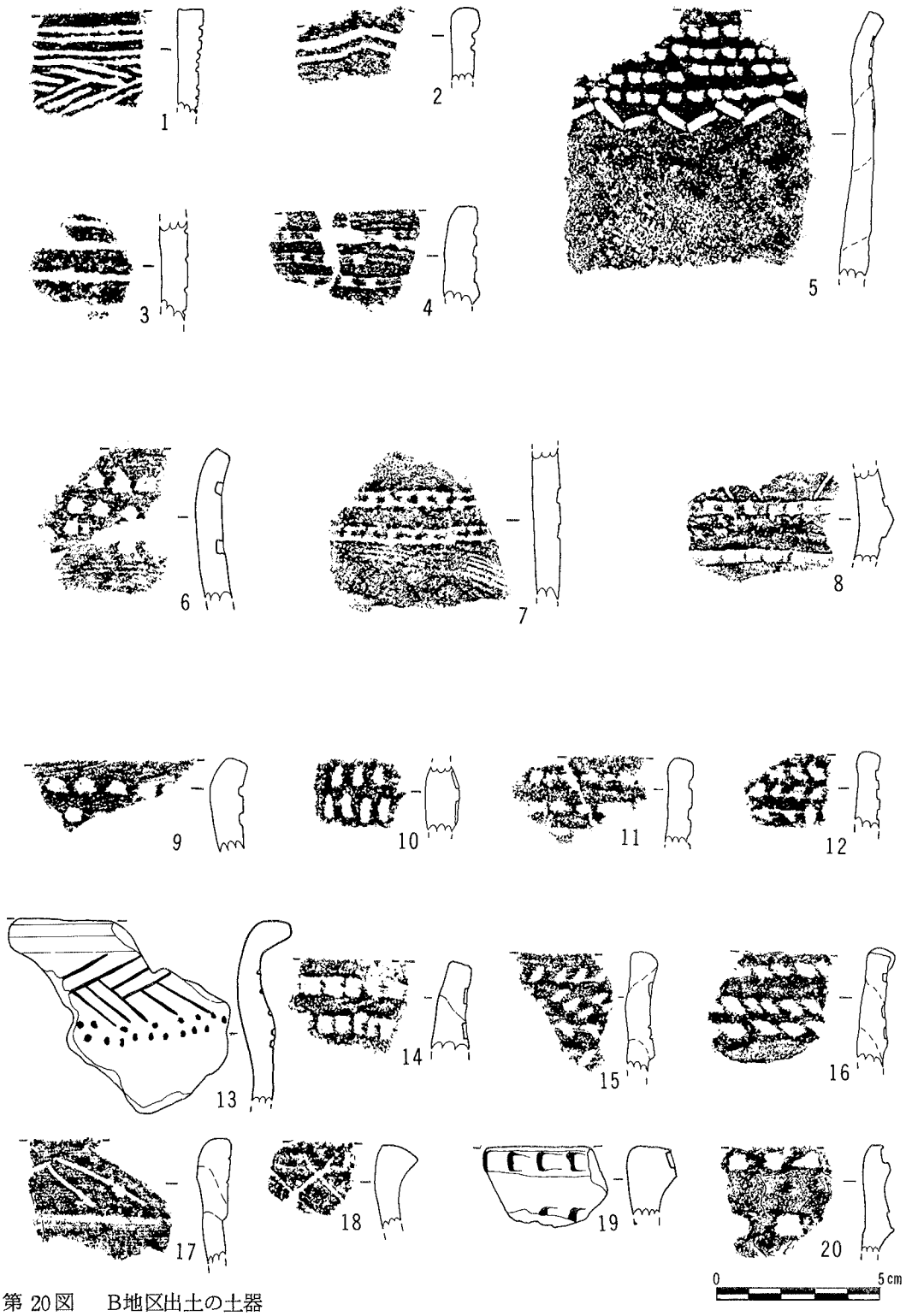
15


16


17


18

PL. 17

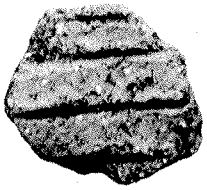


第 20図　B地区出土の土器

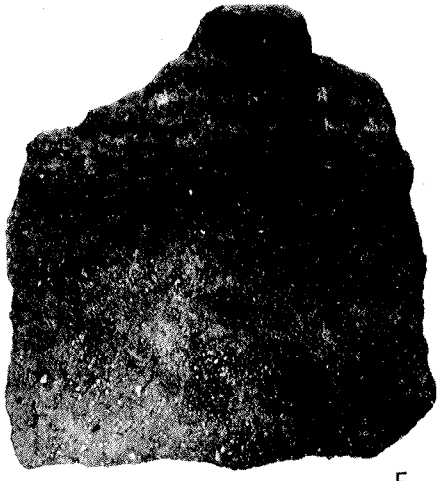
伊波式（1）荻堂式（2.5.7.11）大山式（4.6.9.10.12.14）地荒原A式（15.16.17.18.19.20）
奄美系土器.・型式不明②（8.13）Ⅱ層（7.10.13.17.19）Ⅲ層（1～6.8.9.11.12.14.～16.18.20）

1

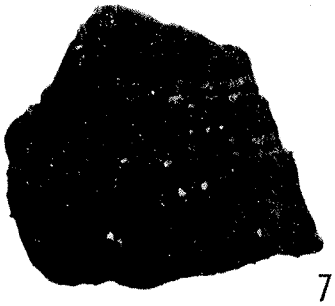
2

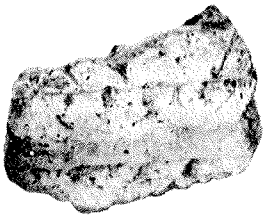

3

4

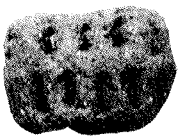

5

6


7


8

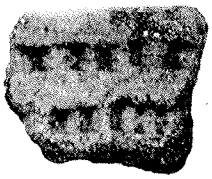
9


10

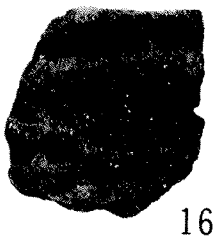
11

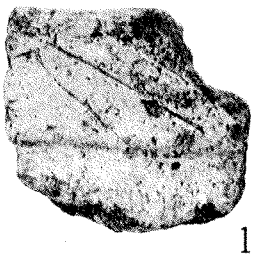
12

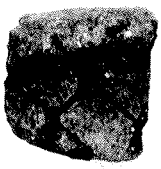
13


14

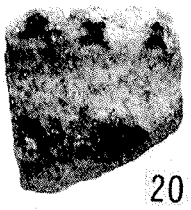
15


16

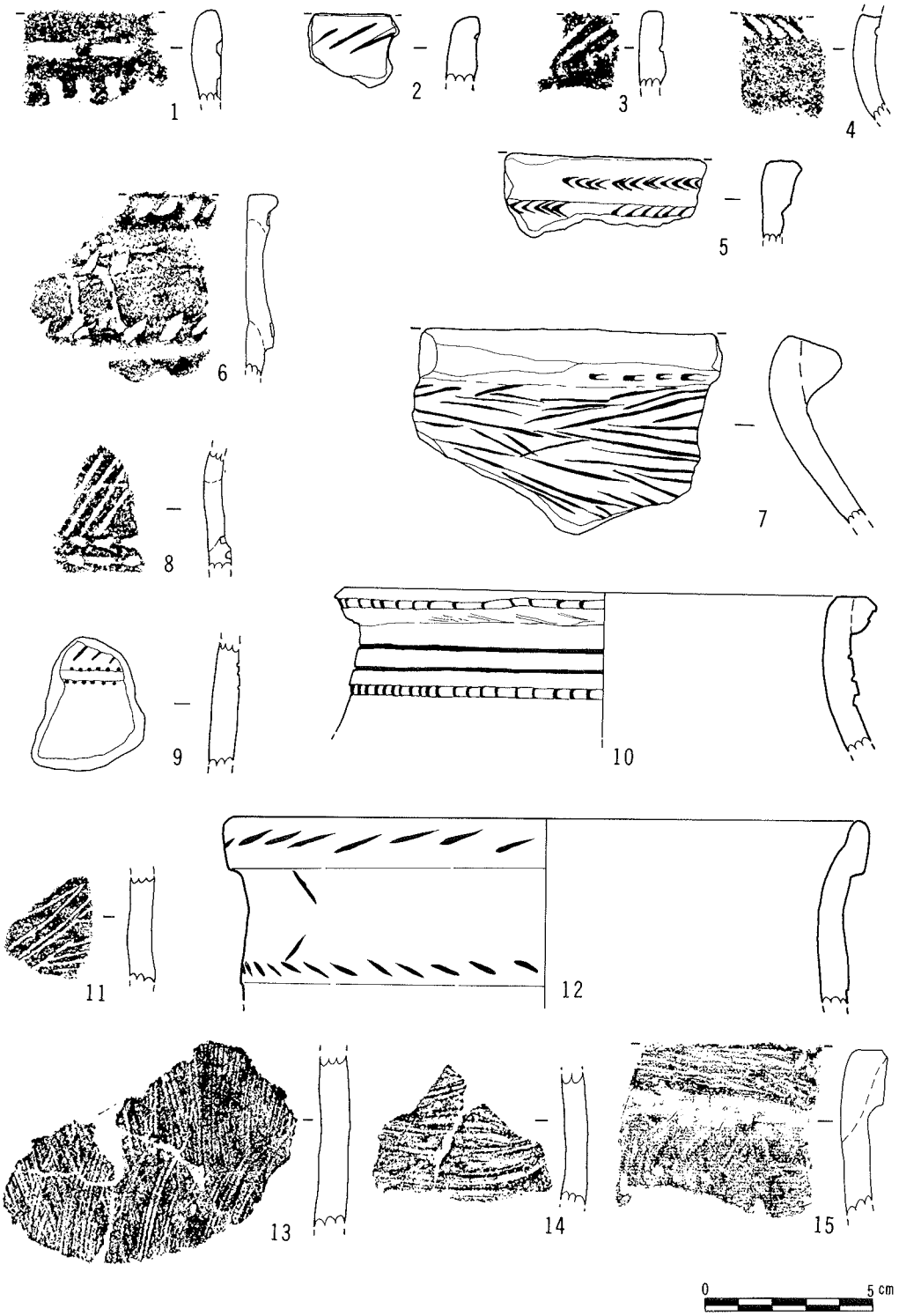

17


18

19


20

PL. 18



第21図　B地区出土の土器

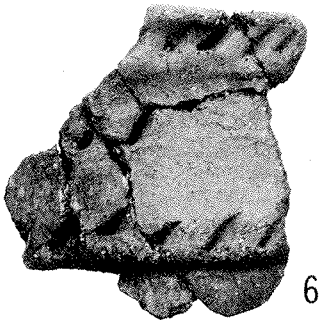
奄美系土器・型式不明⑤（8）②（7.10.11）③（6.12.2.3）④（4）Ⅱ層（4.5.7.8.11.15）
Ⅲ層（1～3.6.9.13.14）

1

2

3

4

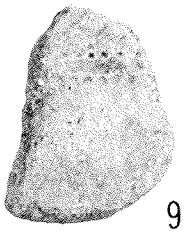


6

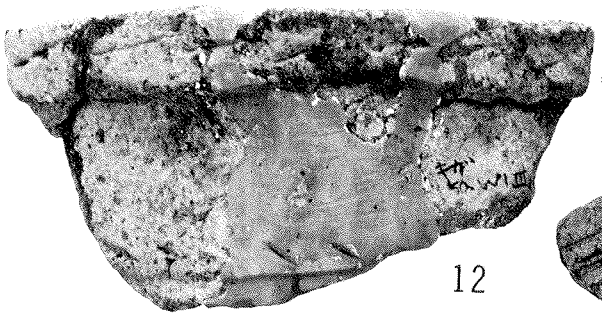
7

5

8

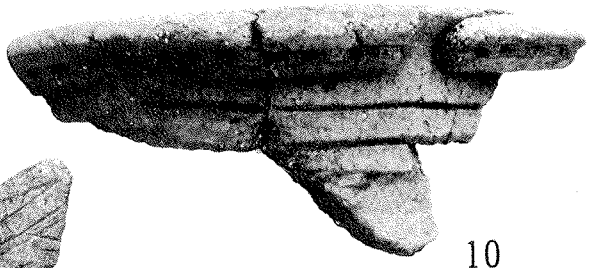


9

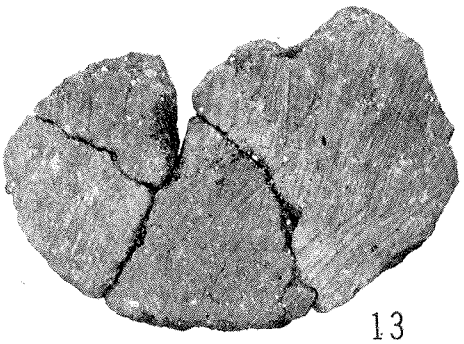


12

11

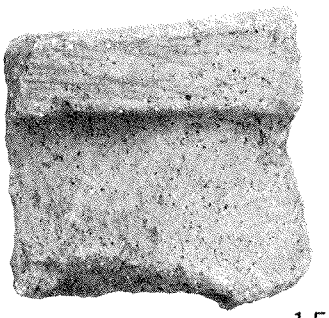


10

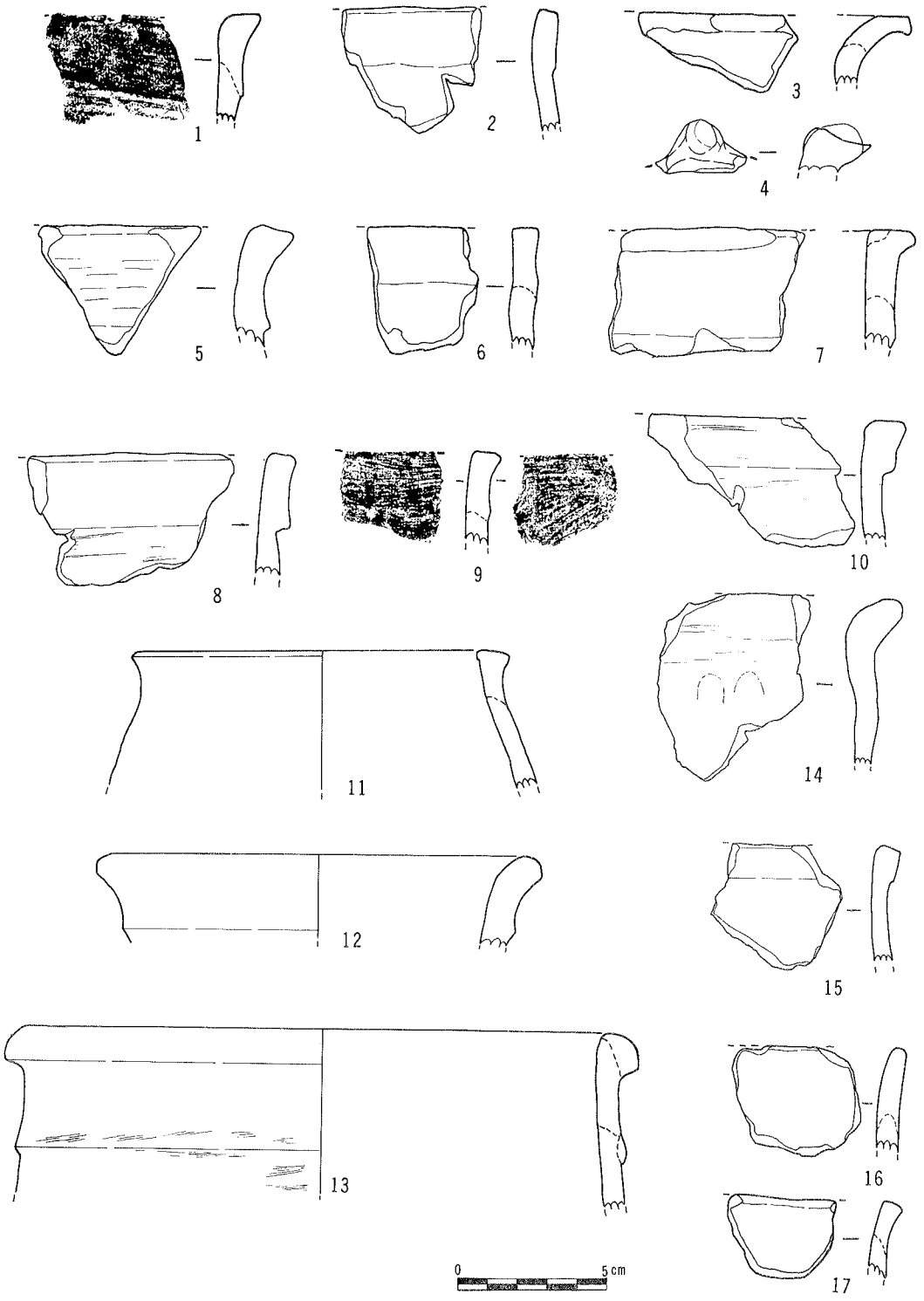


13

14

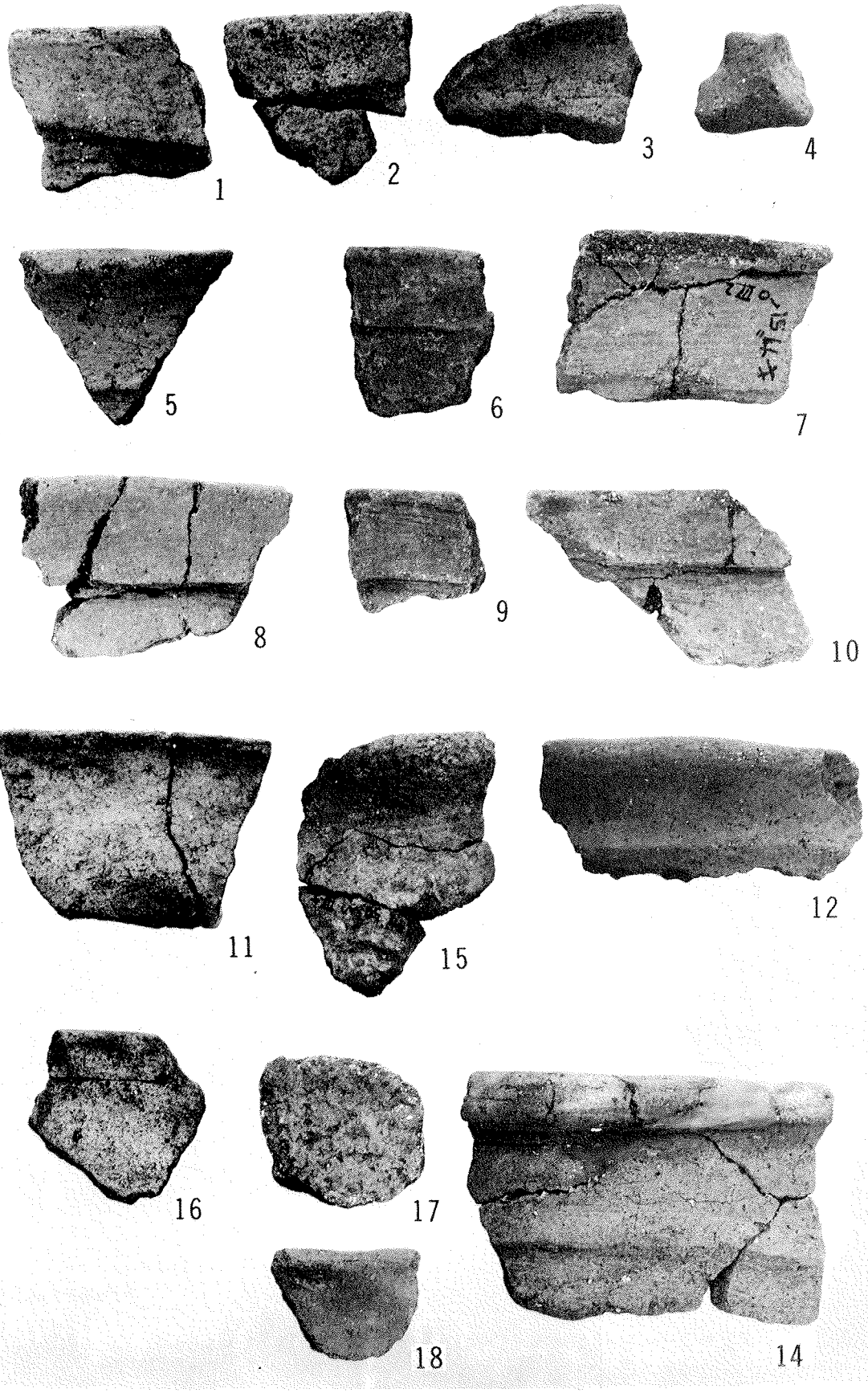


15



第22図　B地区無文土器

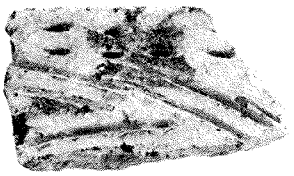
カヤウチバンタ式（1.2.5.～10.12.13.15）沖縄的土器型式不明⑤（3.4.14.16.17）宇宿上層式a（11）Ⅱ層（1～3.13.15）Ⅲ層（5～12.14.16.17）



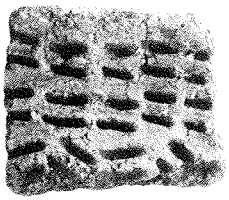
PL. 20

第23図　C地区出土の土器

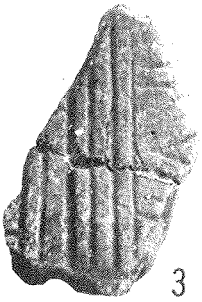
伊波式（1～4）　荻堂式（5～11）　Ⅱ層（5）Ⅲ層（1～3.6～8.11）Ⅳ層（4.9.10）



1

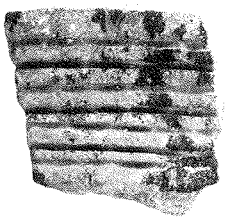


2

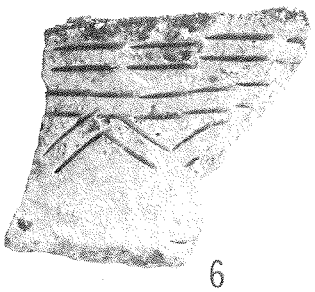


3

4



5

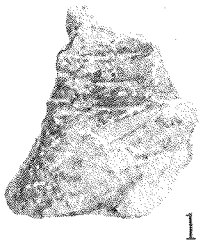


6

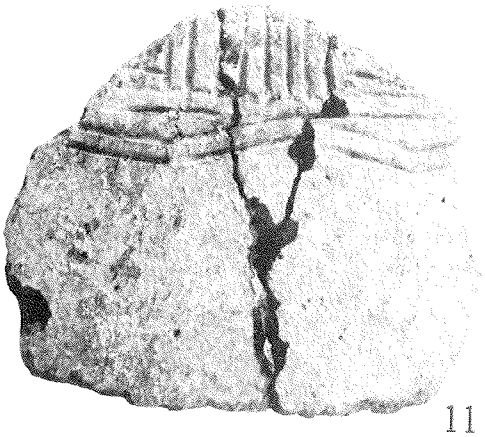
8

9

7

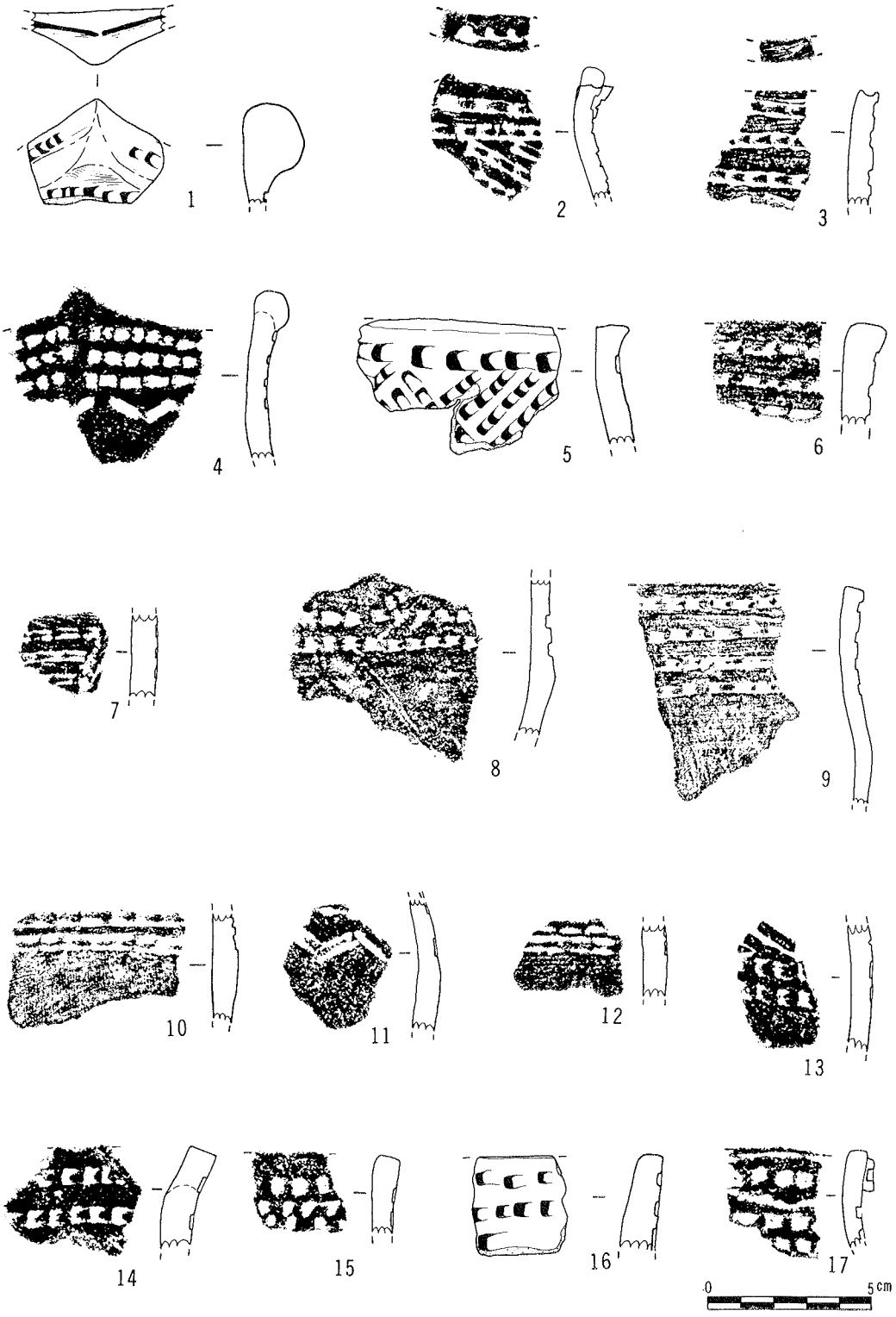


10



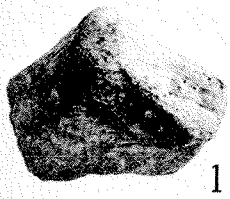
11

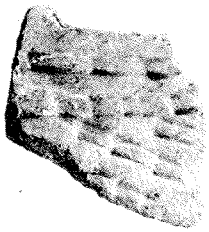
PL. 21



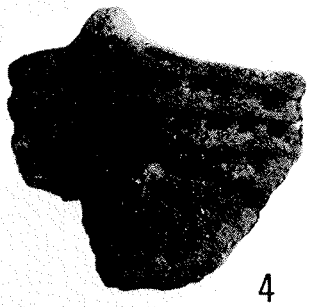
第24図　C地区出土の土器

荻堂式（1～12）　大山式（13～17）　Ⅱ層（9.11.15）　Ⅲ層（1.3.4～8.12～14.16.17）　Ⅳ層（2.10）


1


2

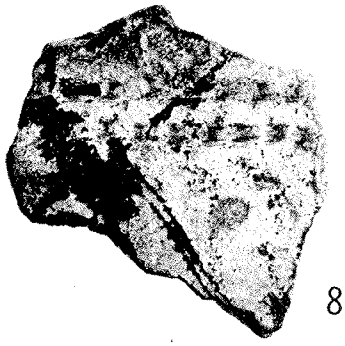
3

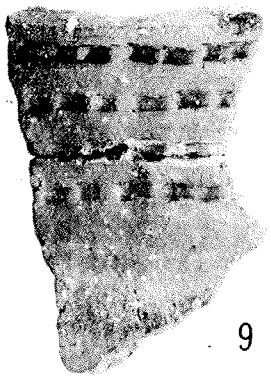

4

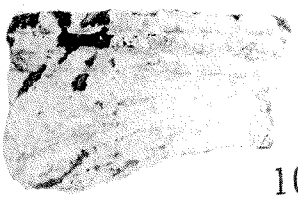
5

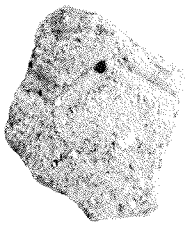
6

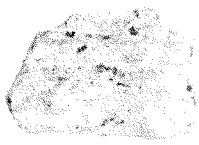
7

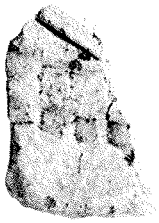

8

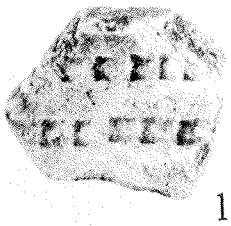

9


10

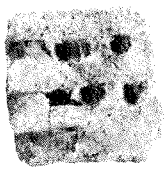

11


12

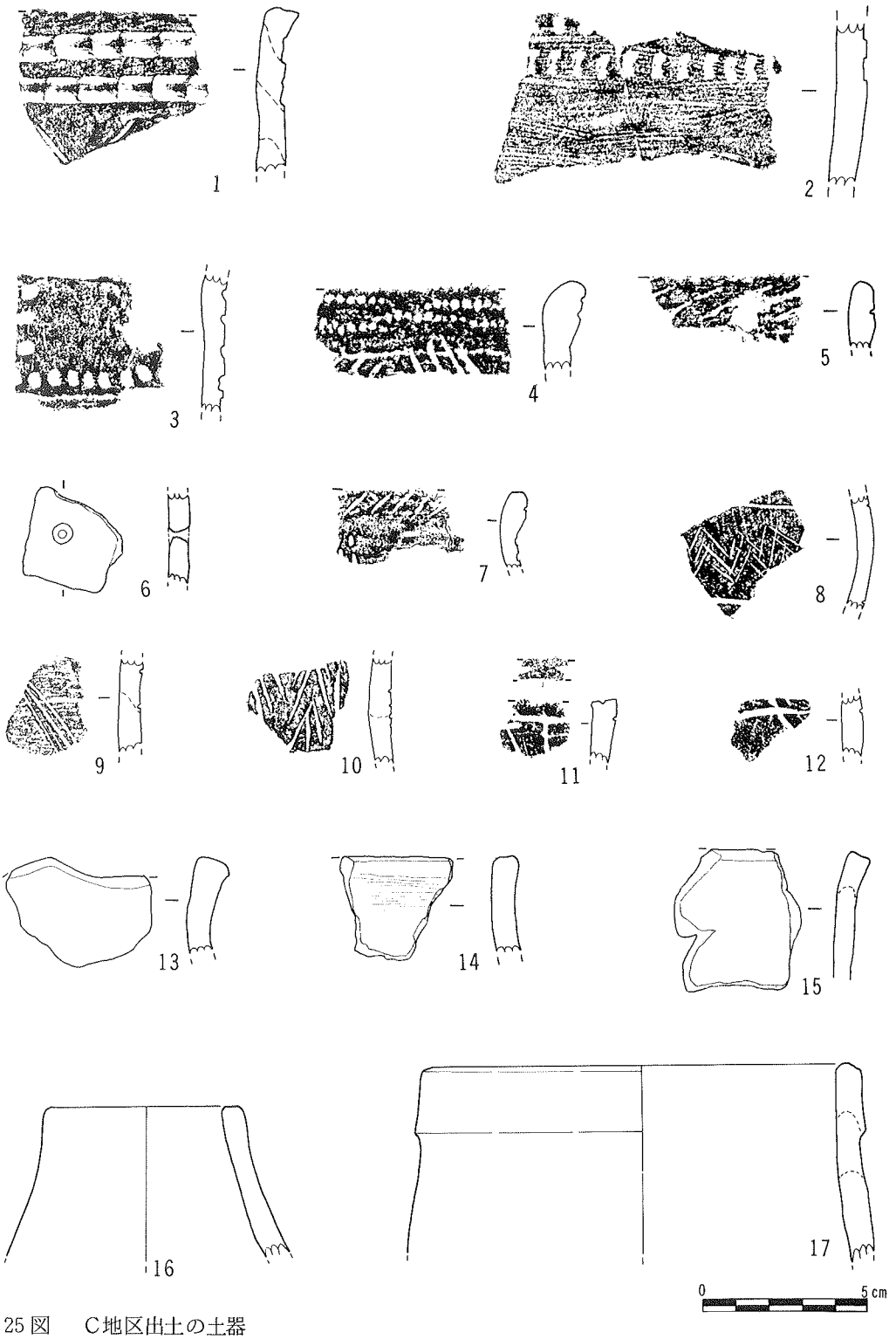

13


14

15

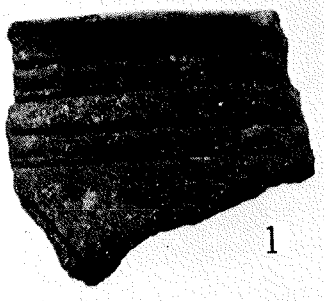

16

17

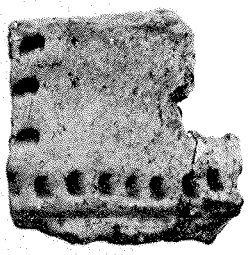


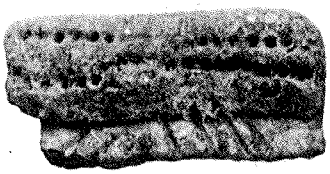
第25図　C地区出土の土器

荻堂式(1) 奄美系土器・型式不明③(3) ④(5.7) ⑥(4) ⑦(2) ⑨(8～12) Ⅱ層(7.11.12.17) Ⅲ層(1.2.3.5.8.9.13.15) Ⅳ層(4.6.10.16)

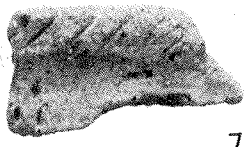

1

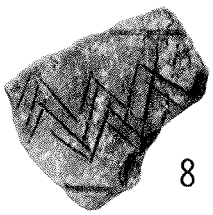
2

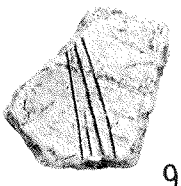

3

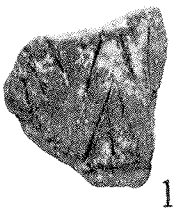

4

5


7


8


9

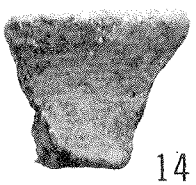

10

11

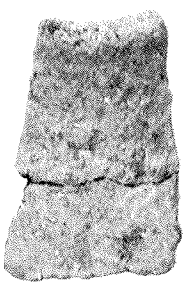
12

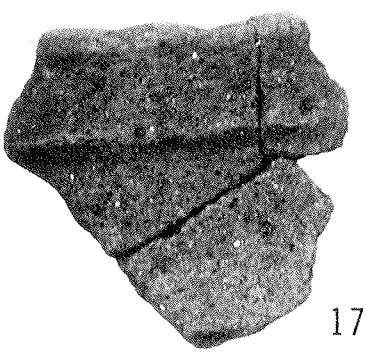
13

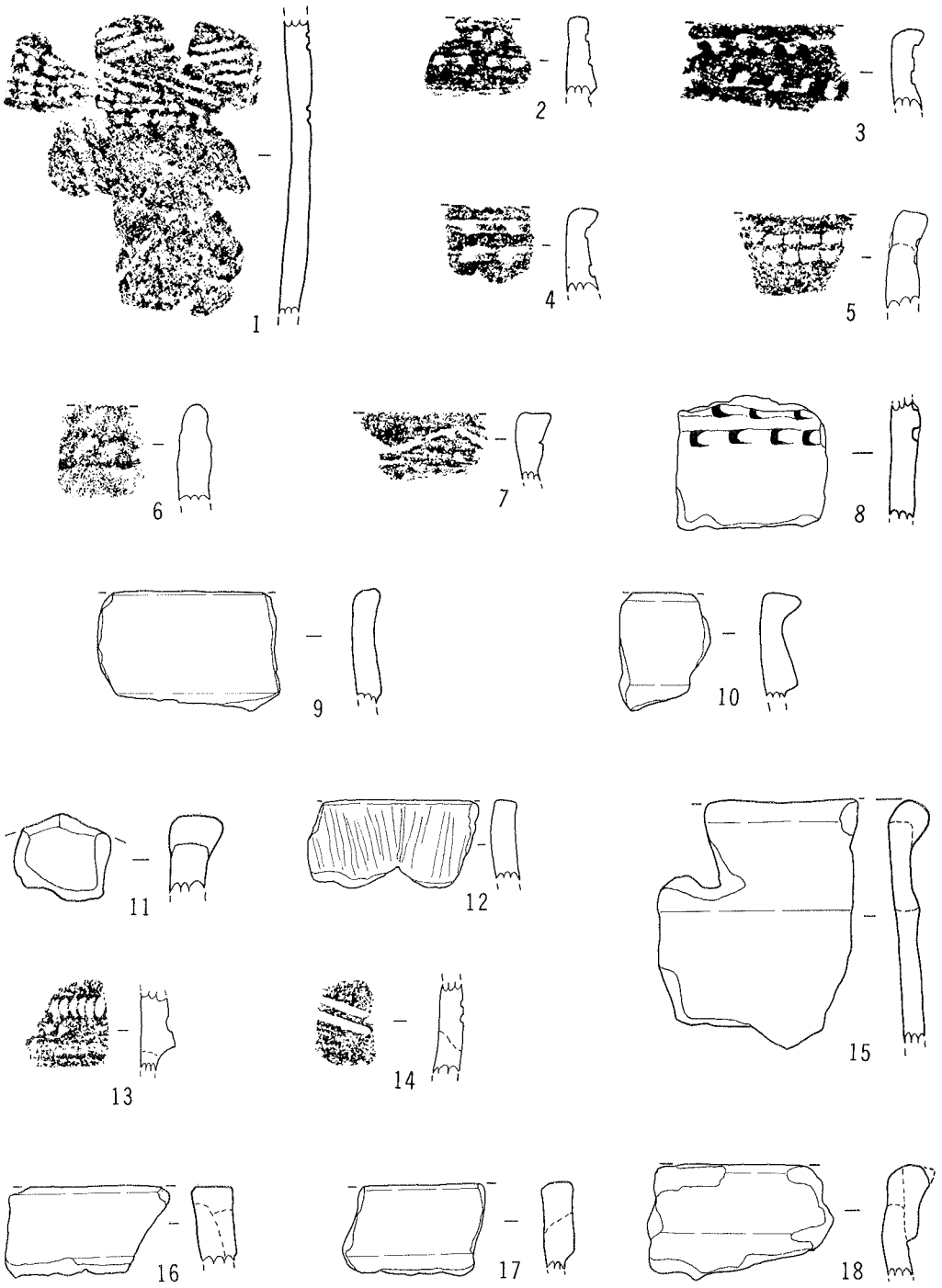
6


14

15


16

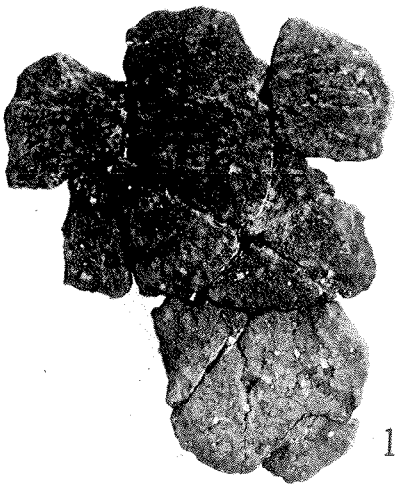

17

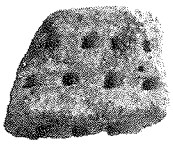


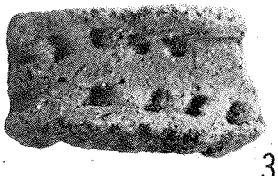
第26図　D地区，第4試掘穴出土の土器

0　5cm

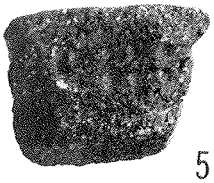
荻堂式（1）大山式（2～5.8）地荒原A式（7）
沖縄的土器・型式不明⑤（11.12）面縄東洞式（13）カヤウチバンタ式（9.10.15.～18）沖縄前期の土器（14）D地区Ⅰ層（5）Ⅱ層（2.3.4.6.7.9.10）Ⅲ層（1.11.12.15）第4試掘穴Ⅲ層（13.14.16.～18）


1

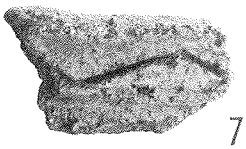

2

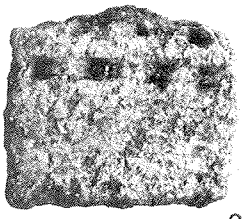

3

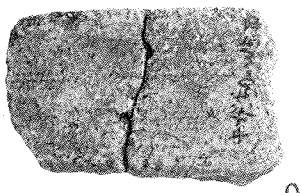
4


5

6

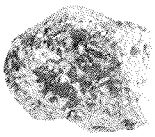

7


8


9

10

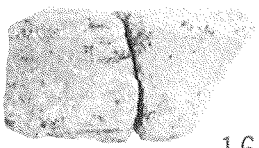
15

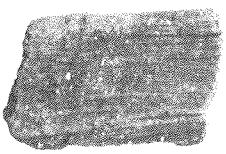

11

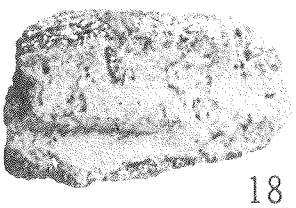
12

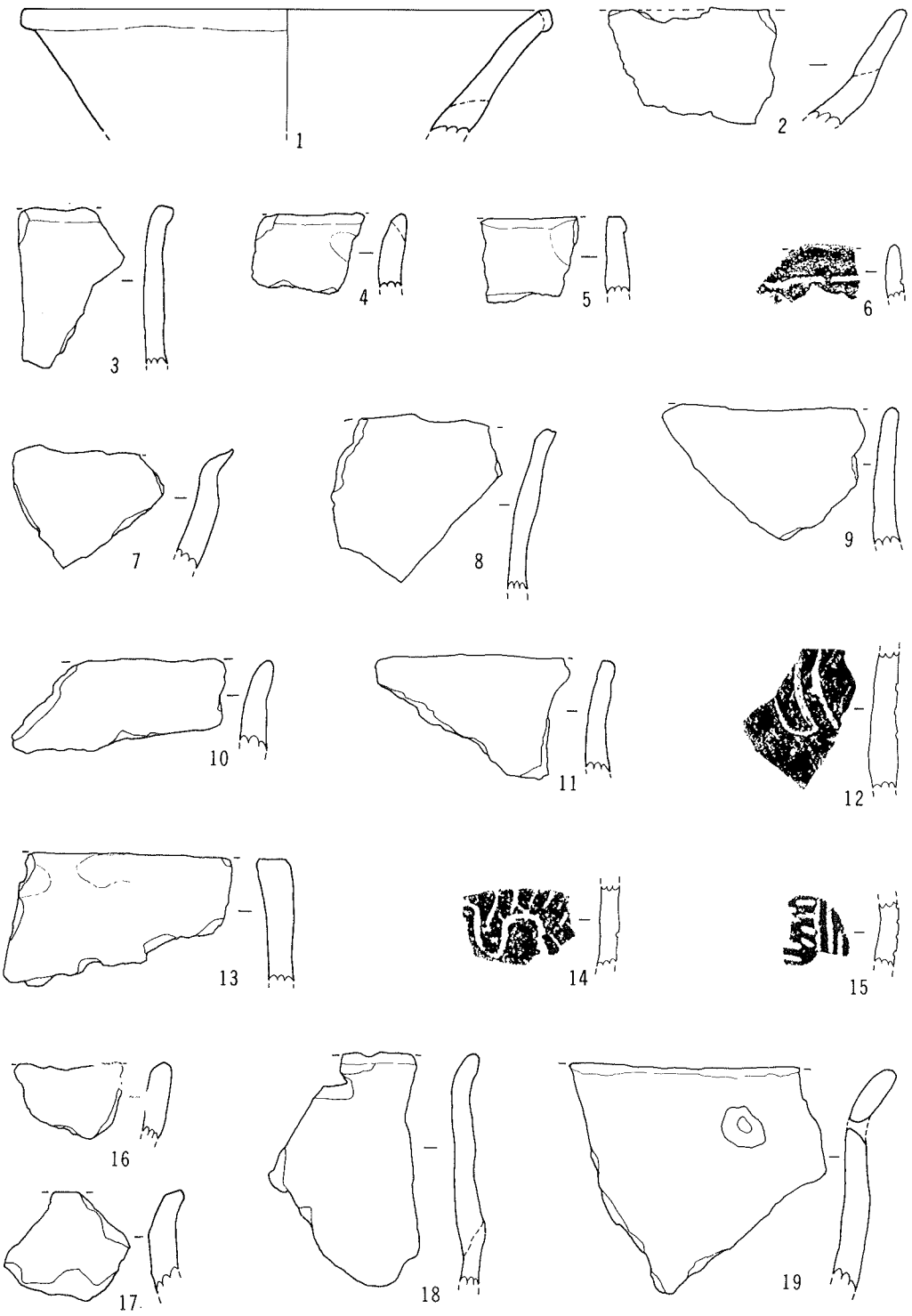
13

14


16


17

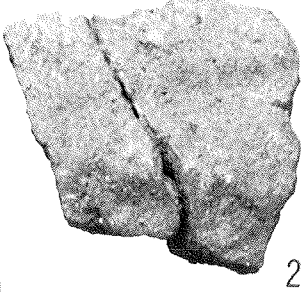

18

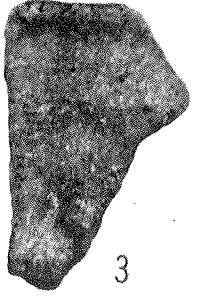


第27図　E地区出土の土器

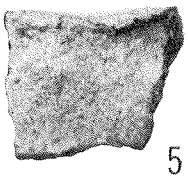
後期土器（1～14. 16～19）伊波式（15）Ⅱ層（1～9. 11.12）Ⅲ層（10.13～19）

1

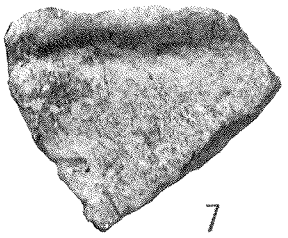

2

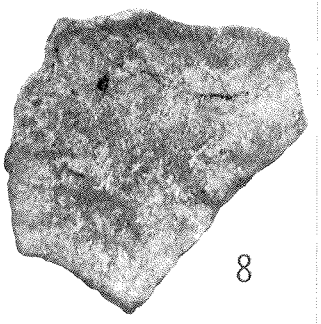

3

4

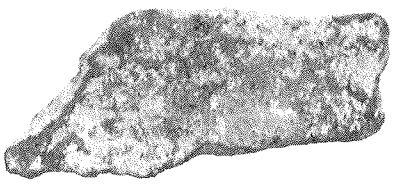

5

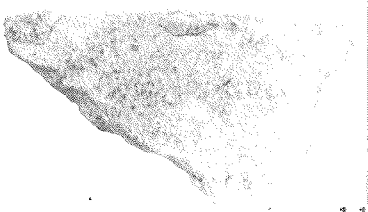
6

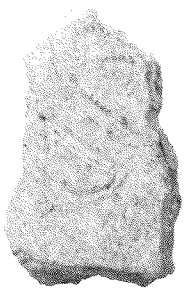

7

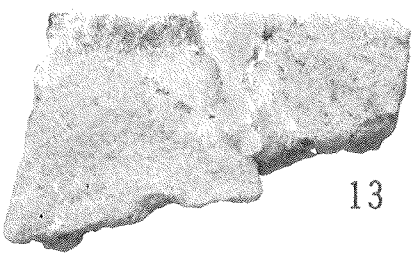

8

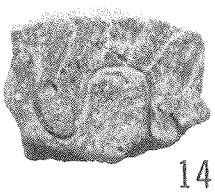
9

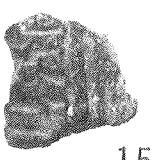

10


11

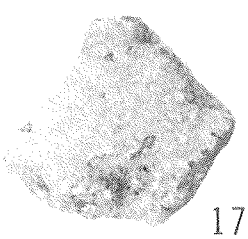

12

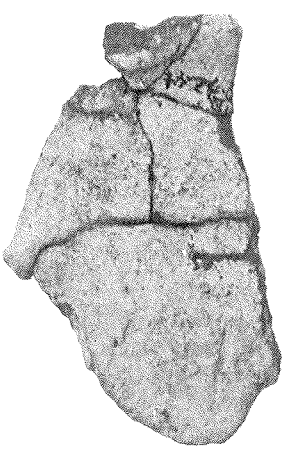

13

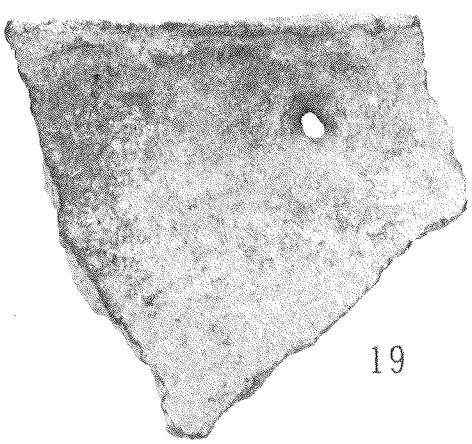

14


15

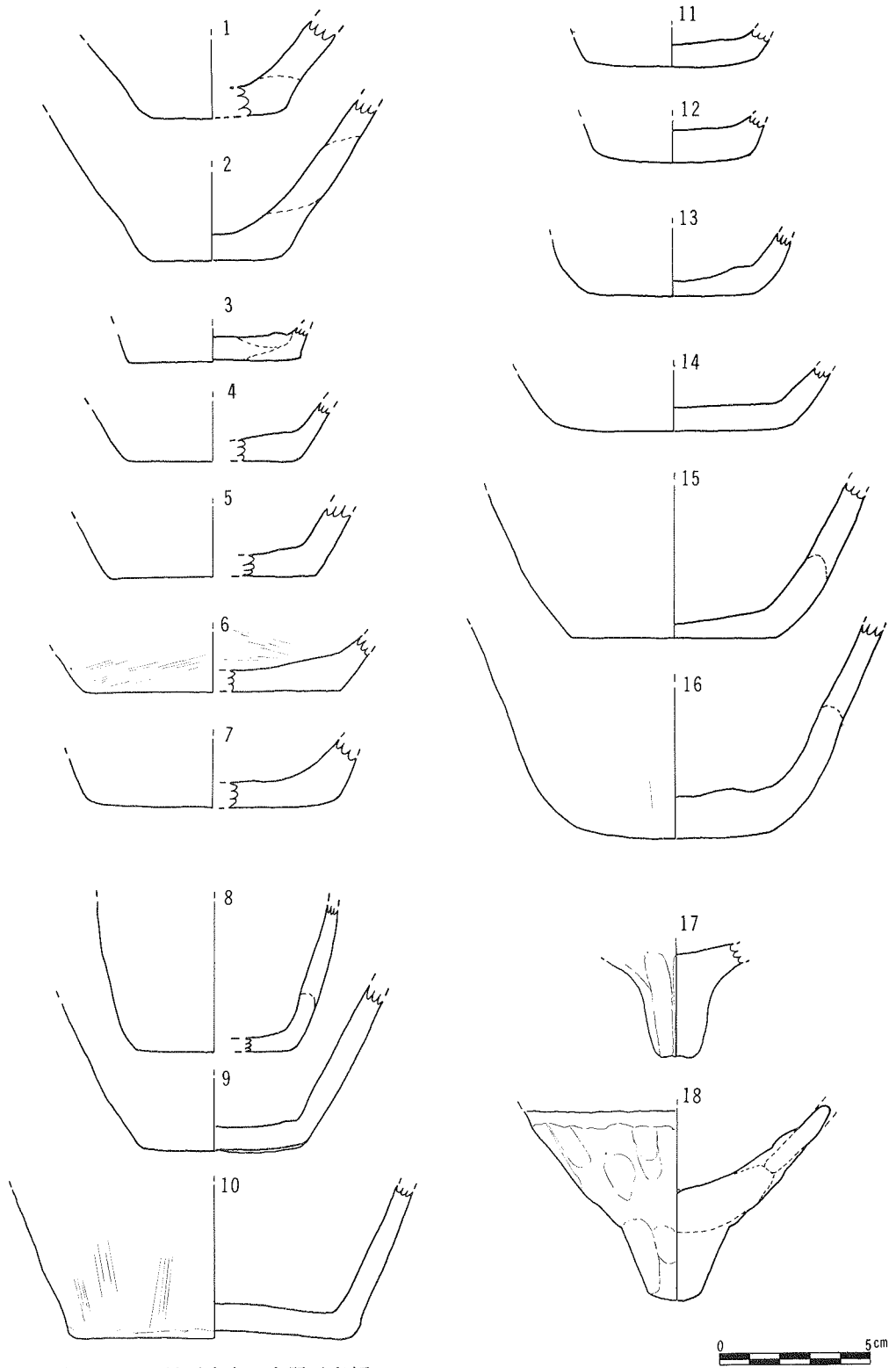
16


17


18

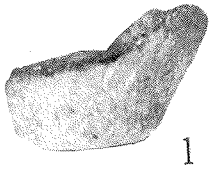

19

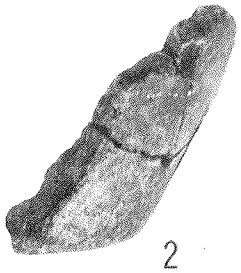
PL. 25



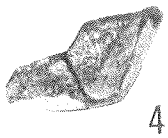
第28図　A・E地区出土の土器（底部）

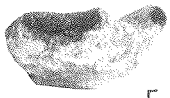
A地区　Ⅲ層（1～4.7）Ⅳ層（6.8.10.12.13.15.16）Ⅴ層（5.9.11.14）E地区　Ⅲ層（17.18）

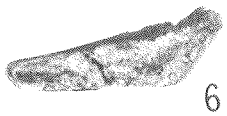

1

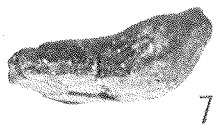

2

3

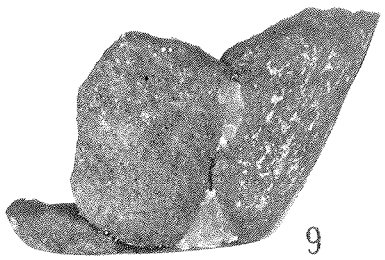

4


5

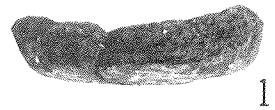

6


7

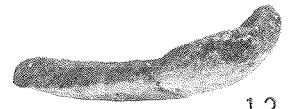
8

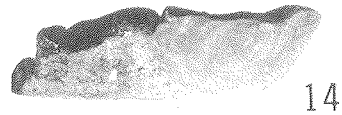

9

10


11

12

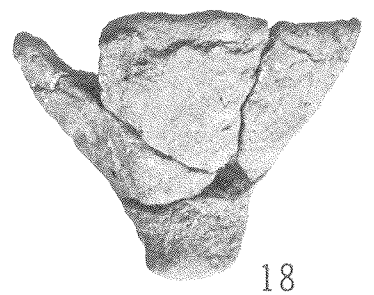

13

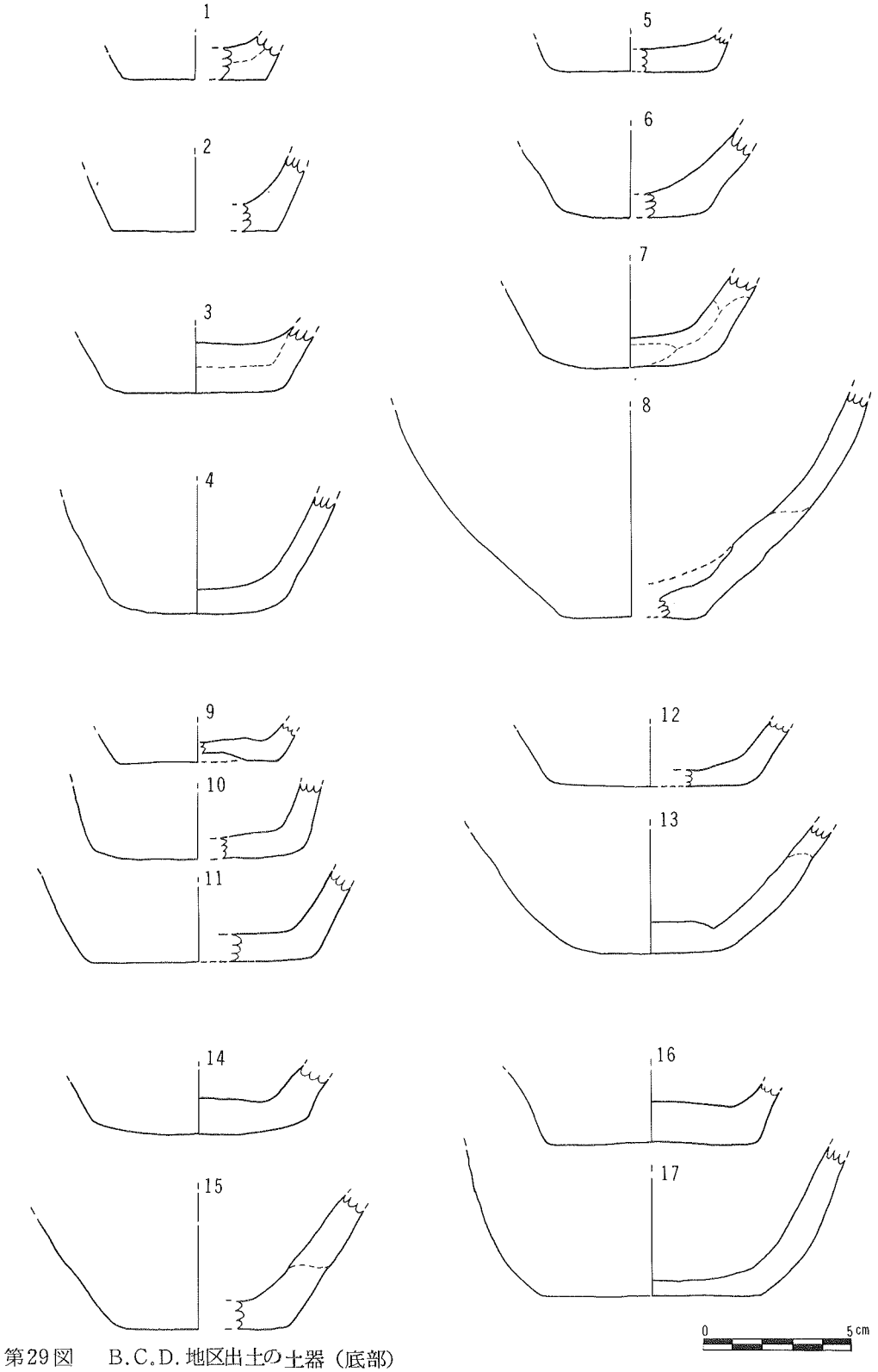

14

15

16

17


18



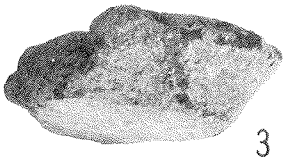
第29図　B.C.D.地区出土の土器（底部）

B地区　Ⅱ層（1～4）Ⅲ層（5～8）　C地区　Ⅱ層（9）Ⅲ層（11～13）Ⅳ層（10）

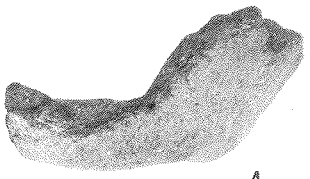
D地区　Ⅱ層（14～17）

1

2



3

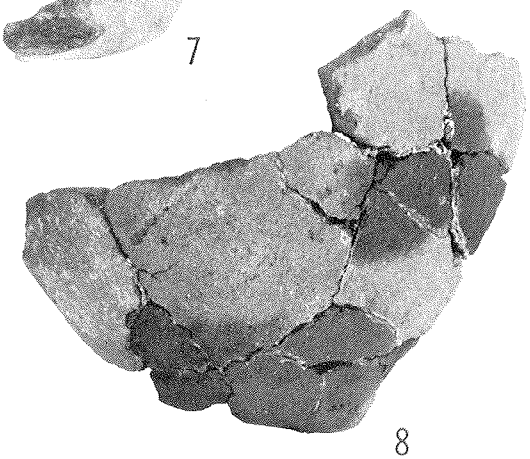


4

5

6

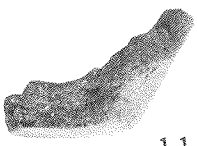
7



8

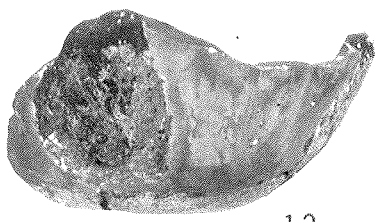
9

10



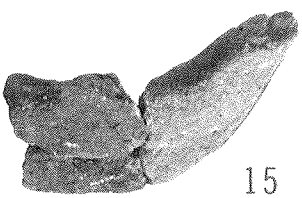
11

12

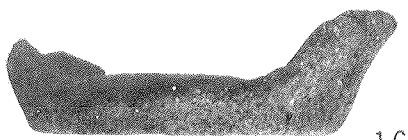


13

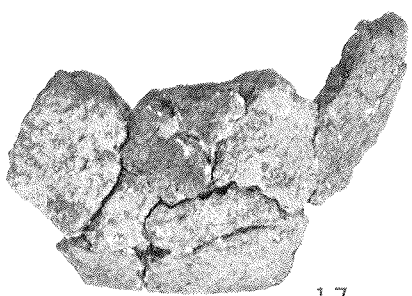
14



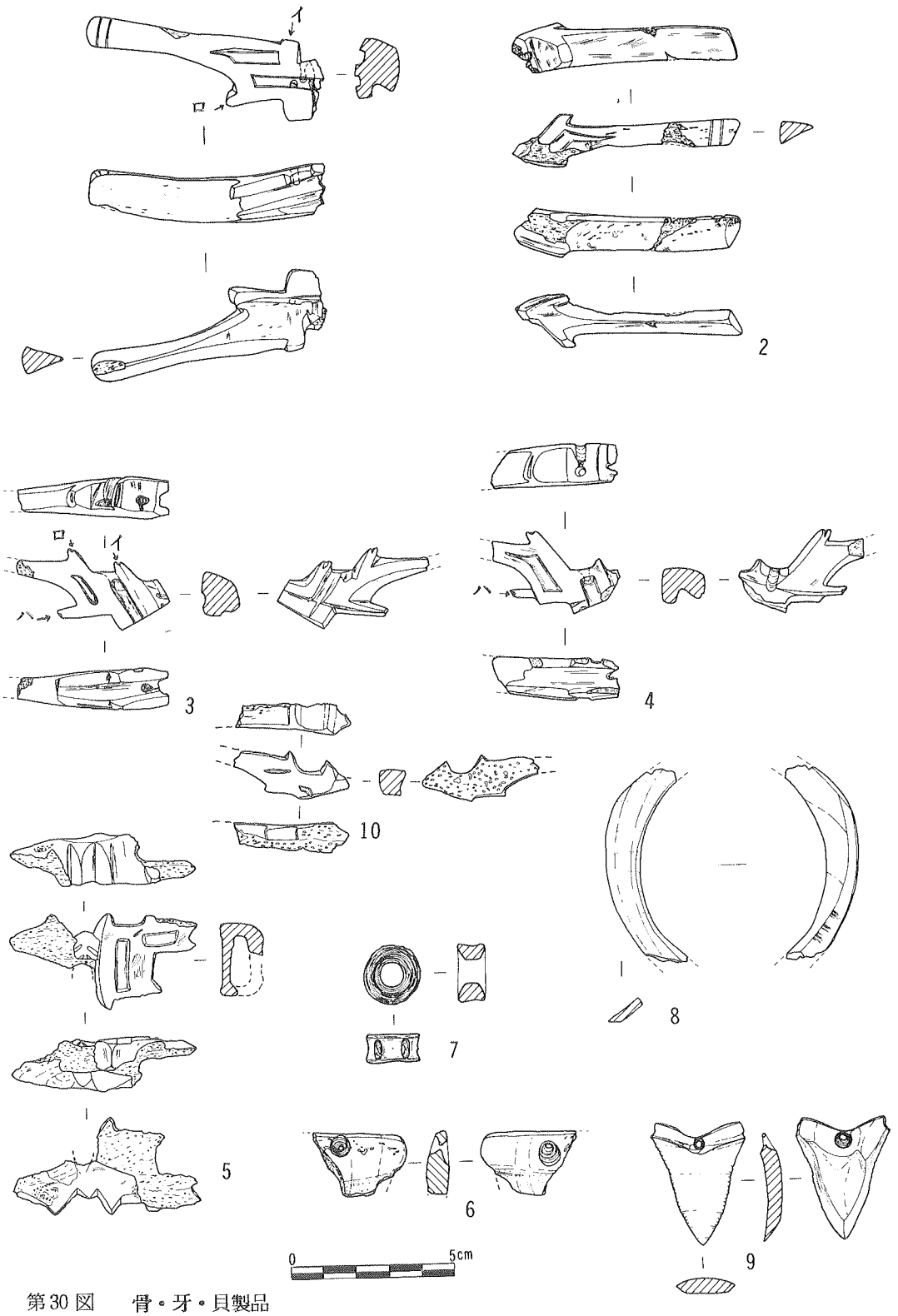
15



16

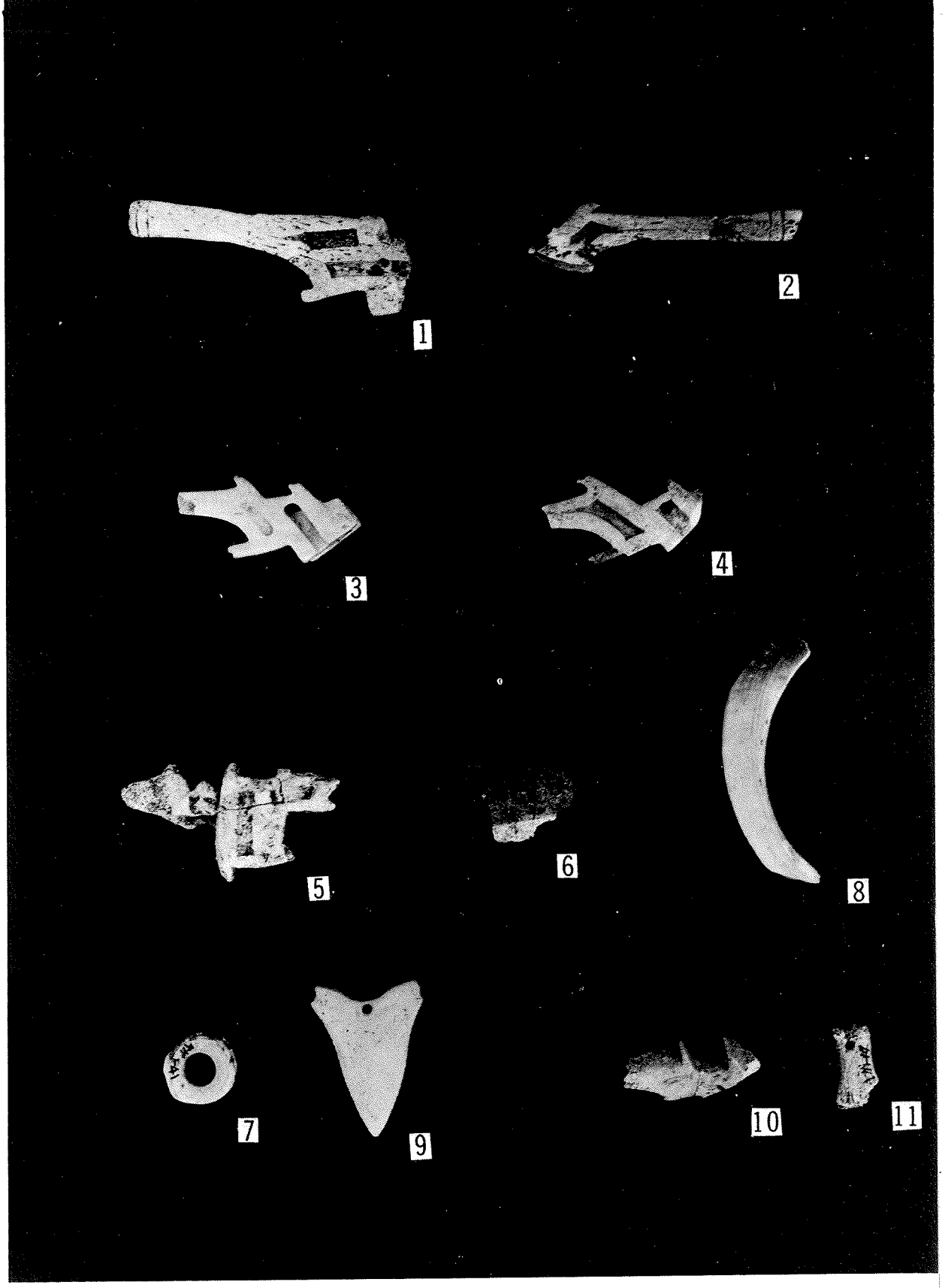


17

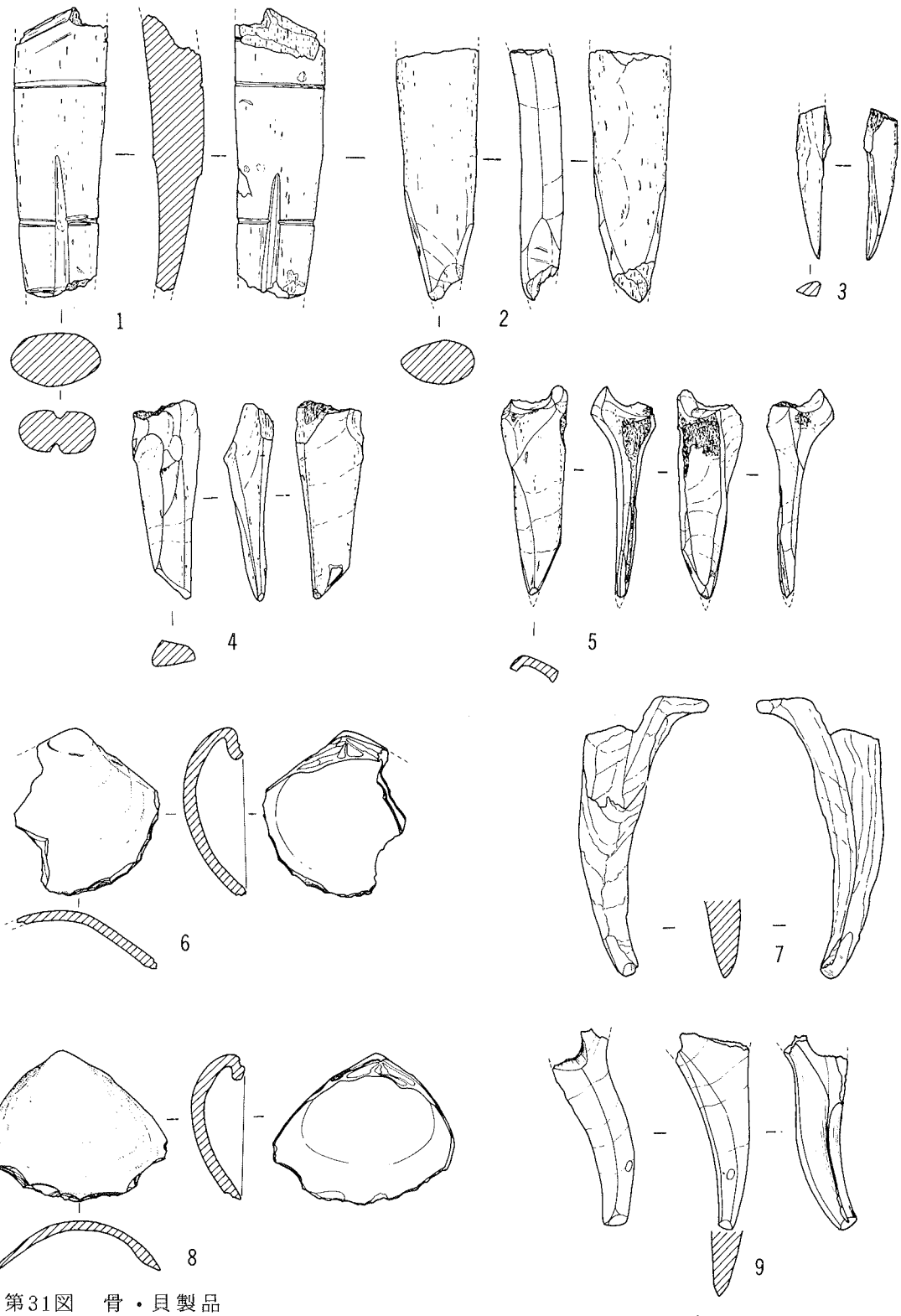


第30図　骨・牙・貝製品

1～5.7.9.10（C地区第Ⅲ層）　6.（A地区第Ⅲ層）　8.（D地区第Ⅱ層）

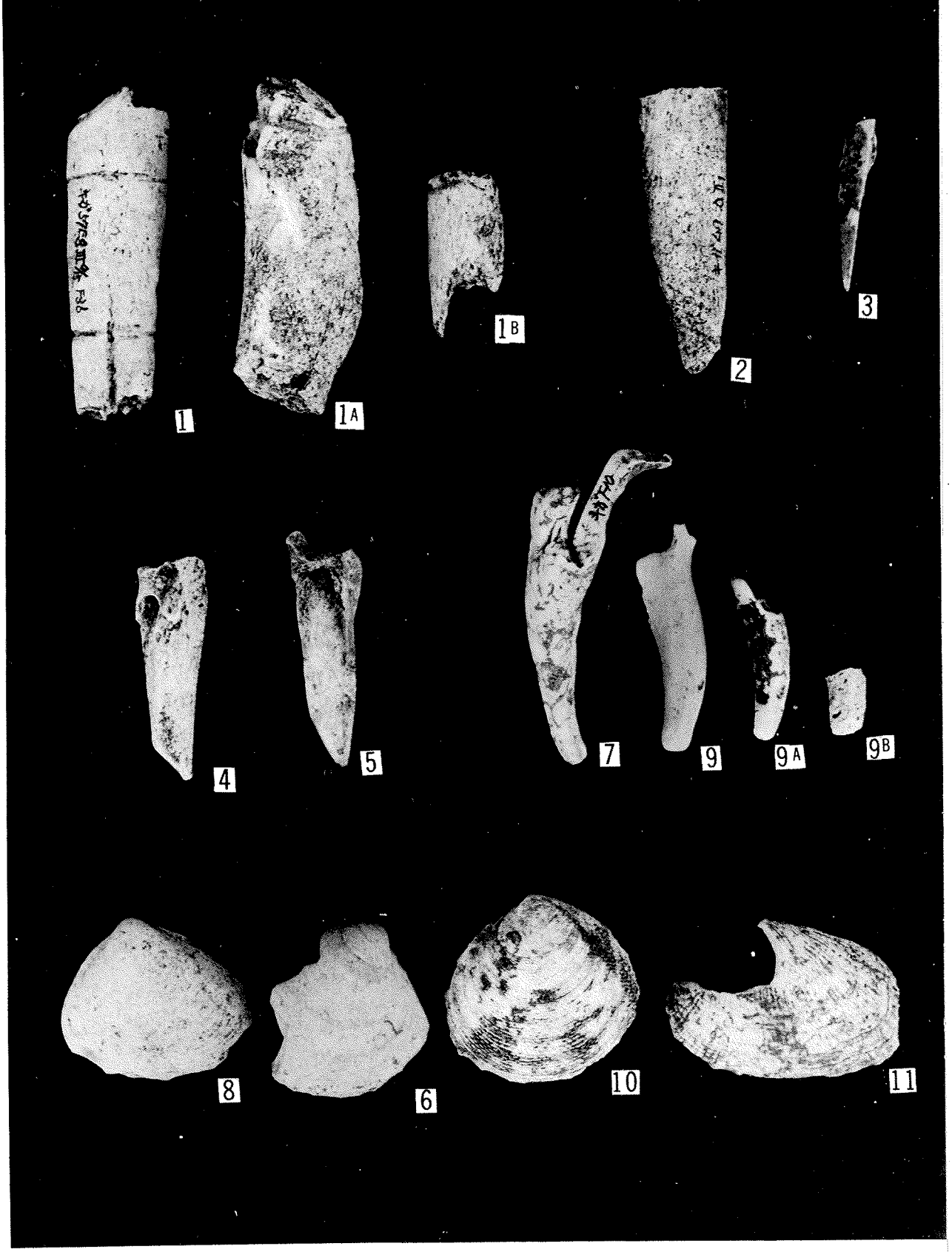


PL . 28

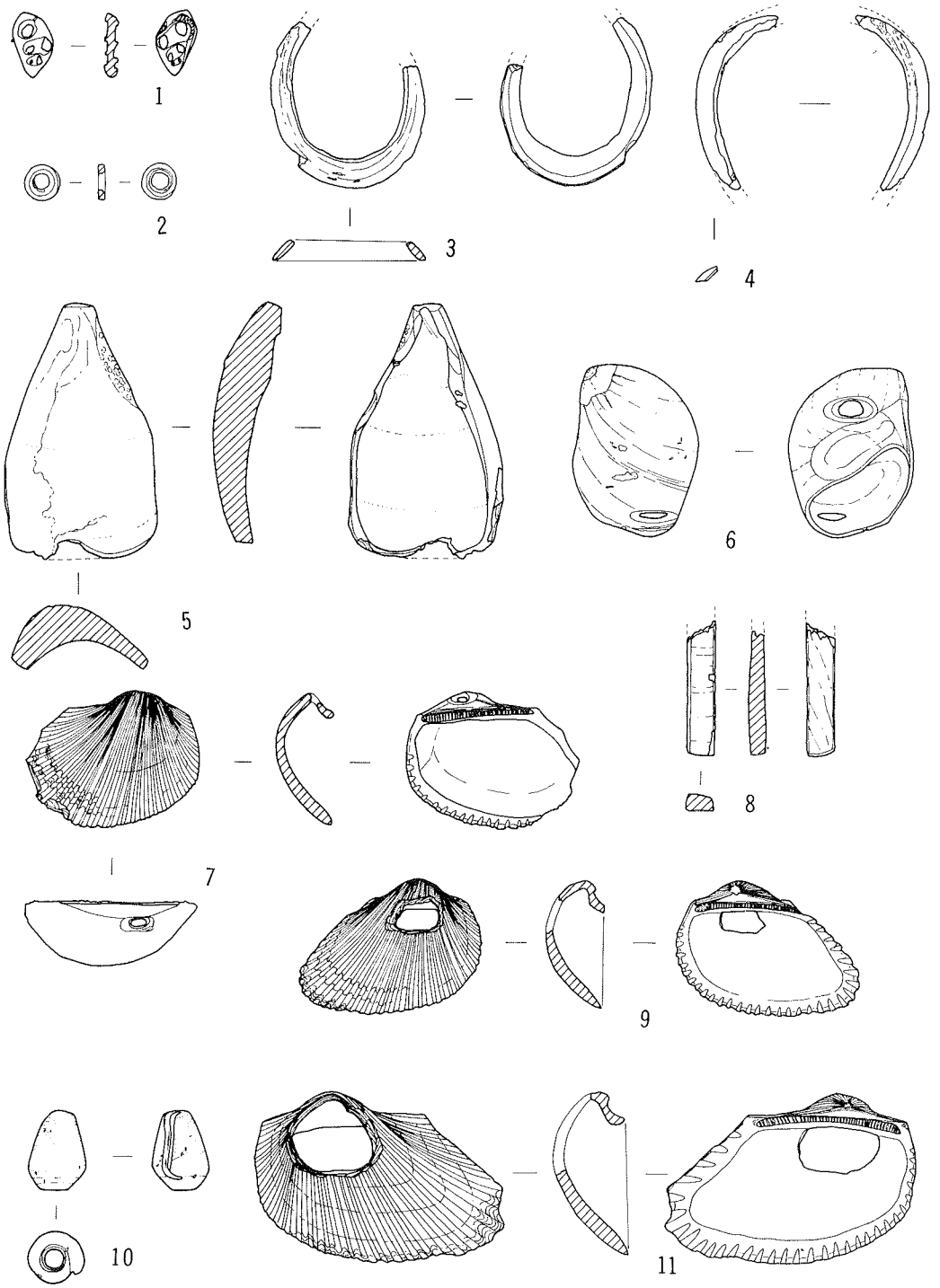


第31図　骨・貝製品

1.（A地区第Ⅲ層） 2.（B地区第Ⅱ層） 3.（B地区第Ⅲ層） 4.（A地区第Ⅲ層） 0 5cm
5.（C地区第Ⅲ層） 6.（C地区第Ⅲ層） 7.8.（A地区第Ⅲ層） 9.（C地区第Ⅱ層）



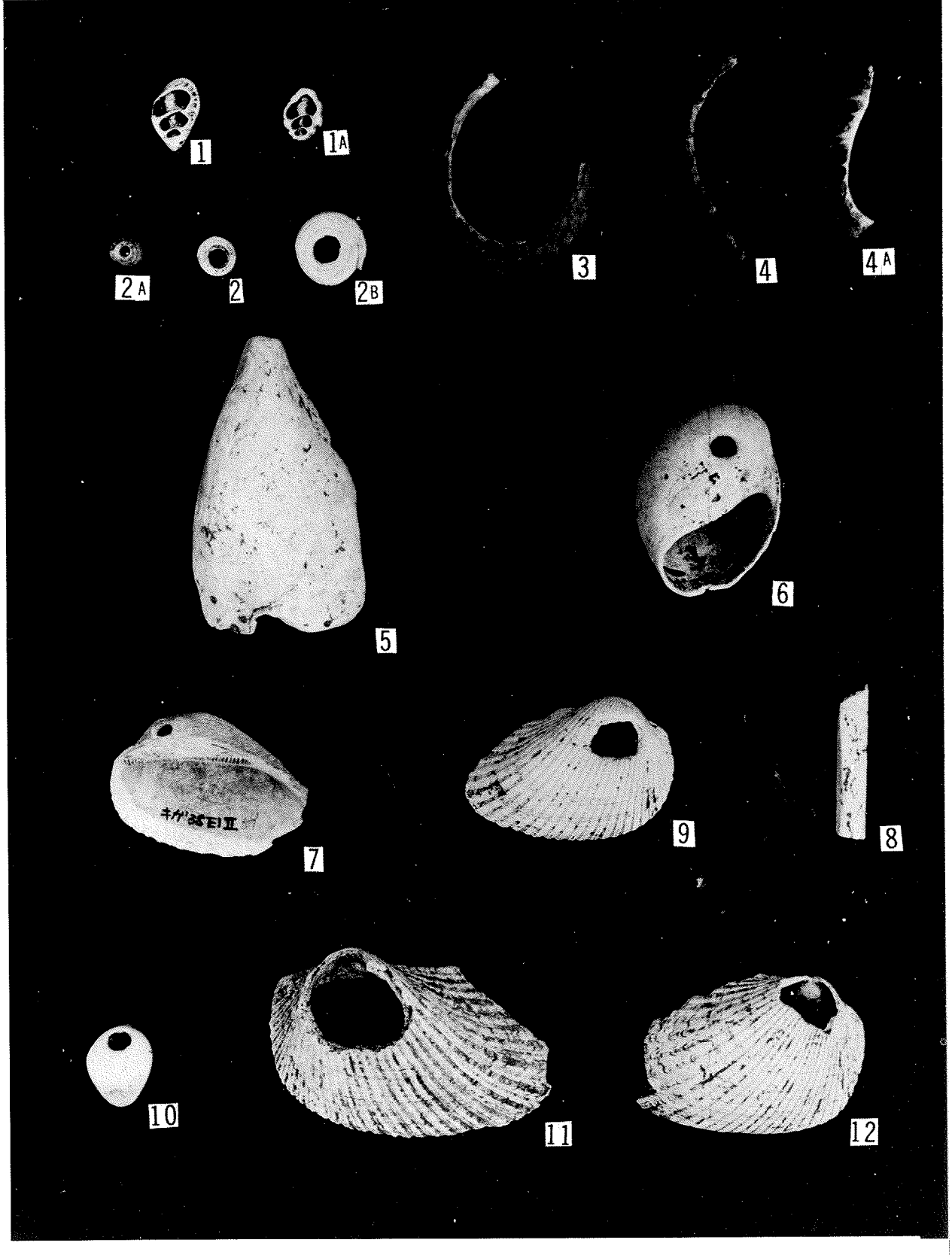
PL. 29



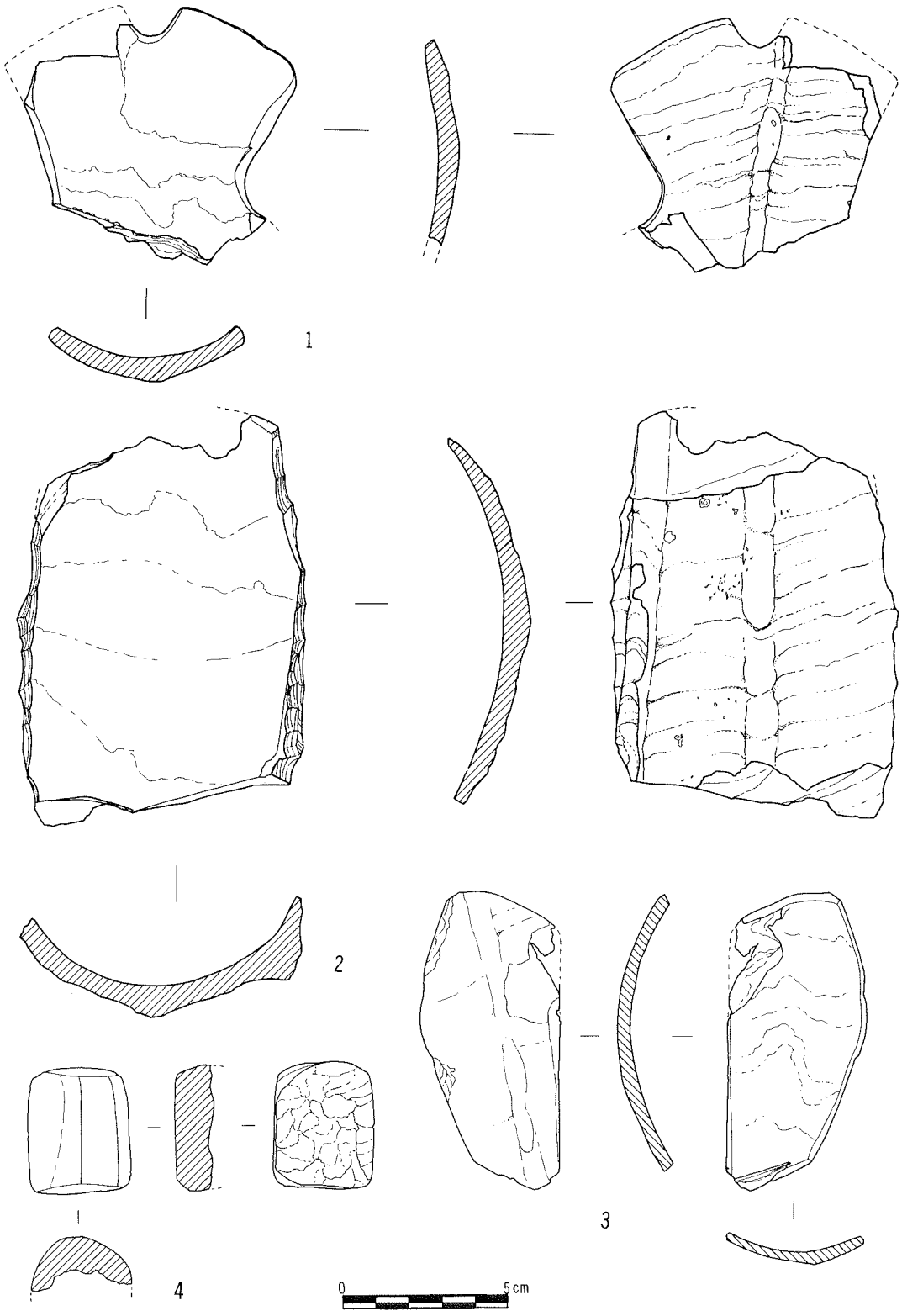
第32図　貝製品

0　5cm

1.2.6.9.10（C地区第Ⅲ層）3.4（A地区第Ⅳ層）5.8.11（A地区第Ⅲ層）7（C地区第Ⅱ層）



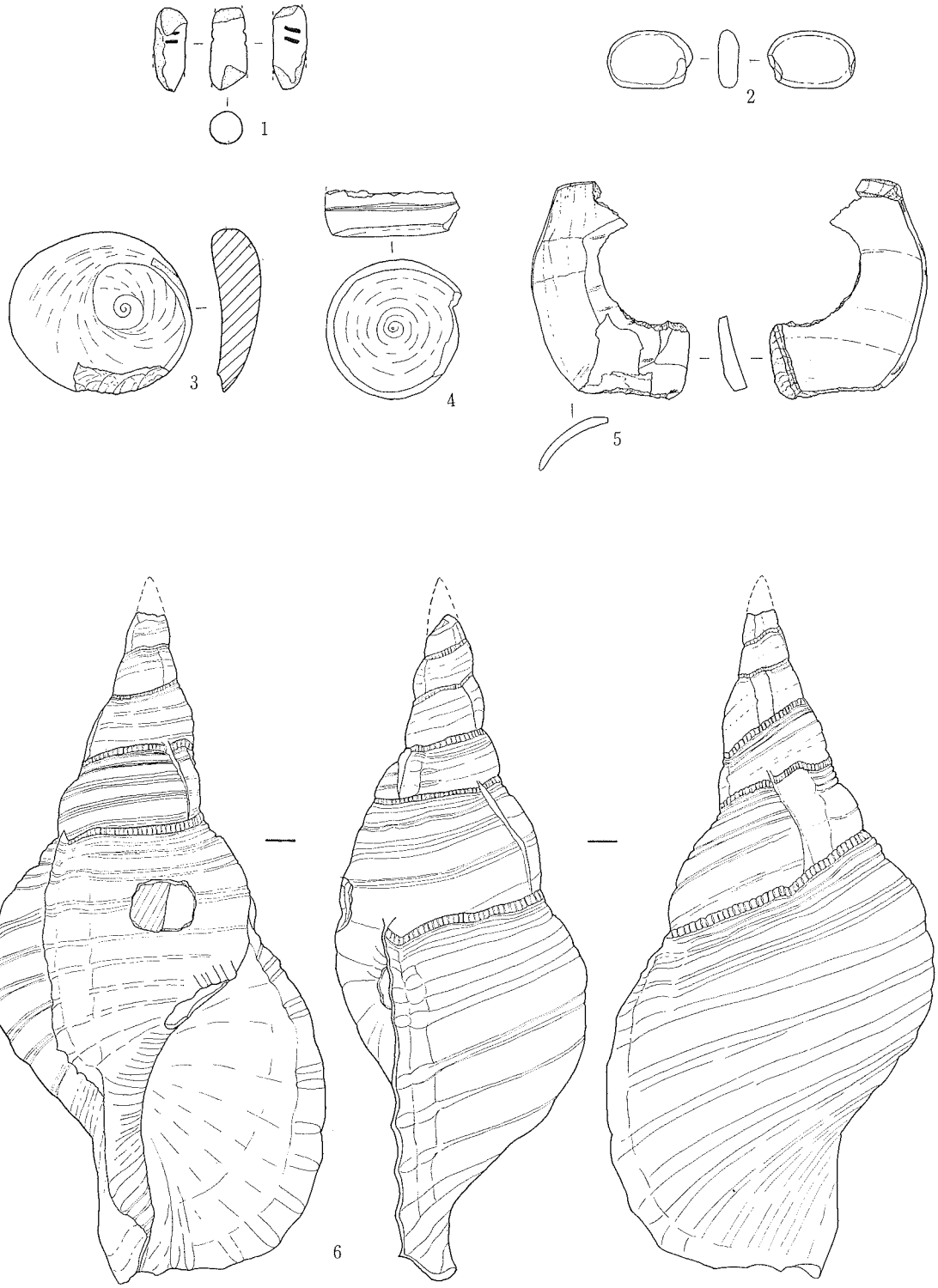
PL. 30



第33図　夜光貝製品・石製品

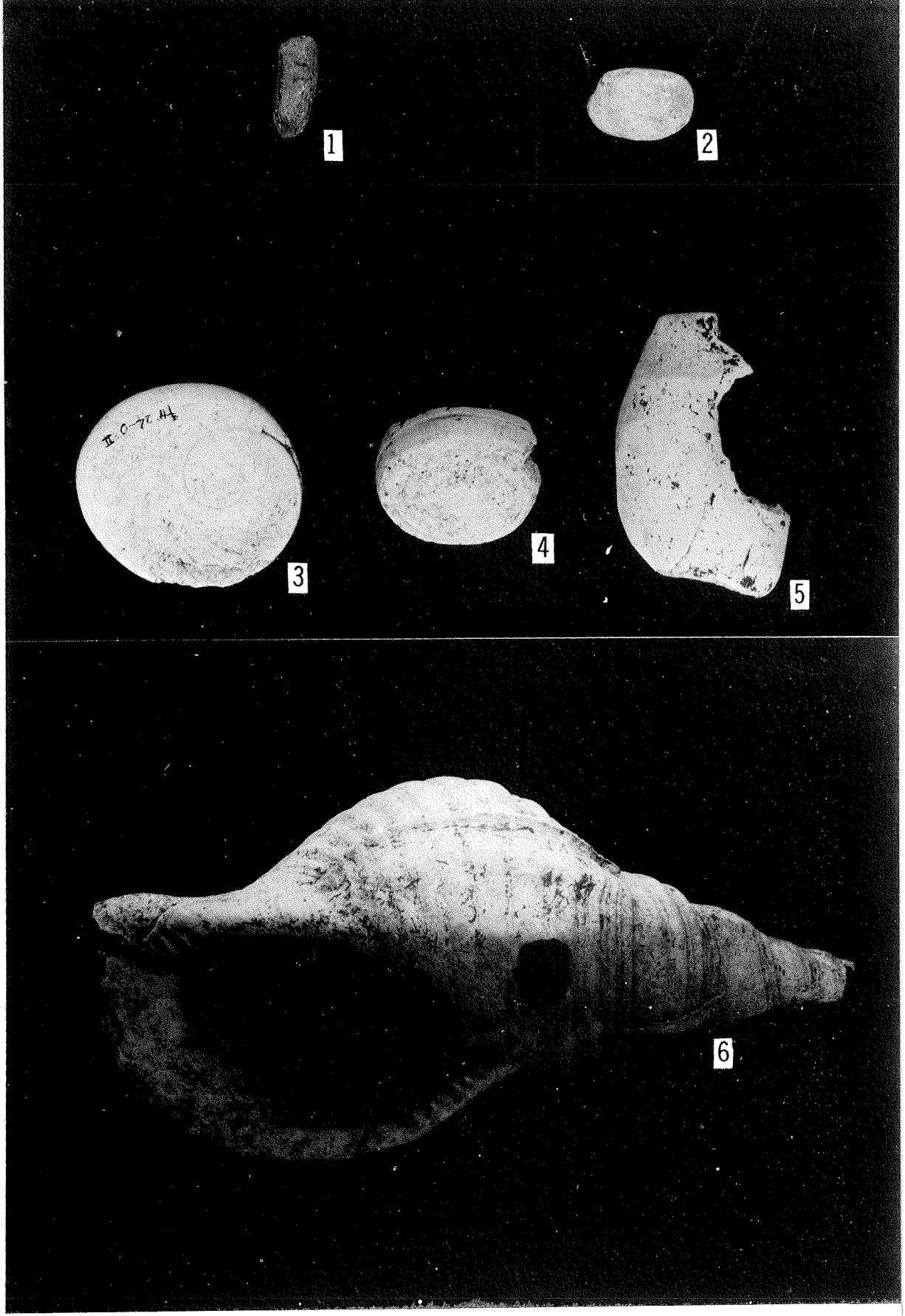
1.（E地区第Ⅲ層）　2.4.（C地区第Ⅲ層）　3.（B地区第Ⅲ層）

PL . 31

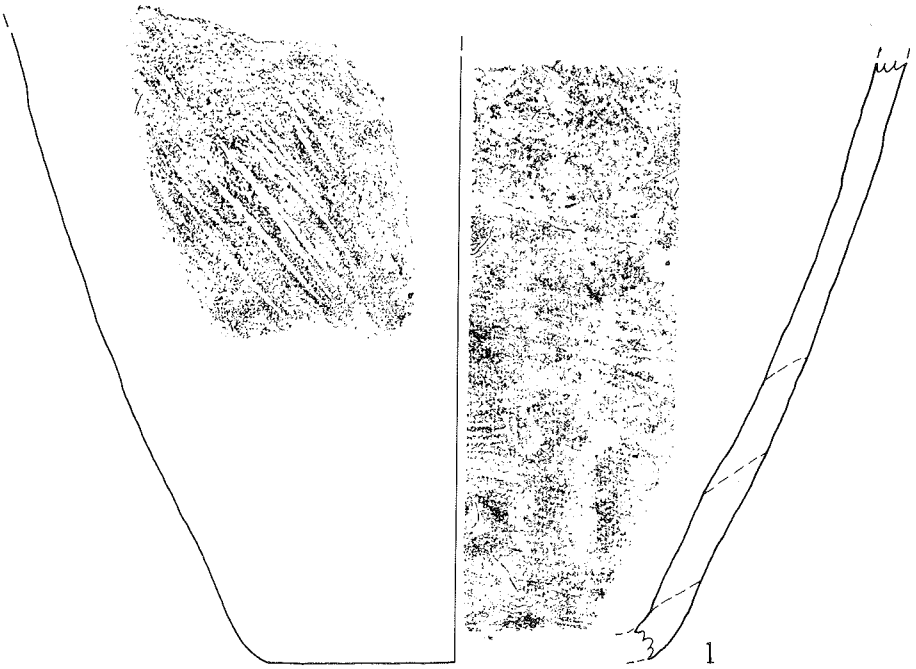


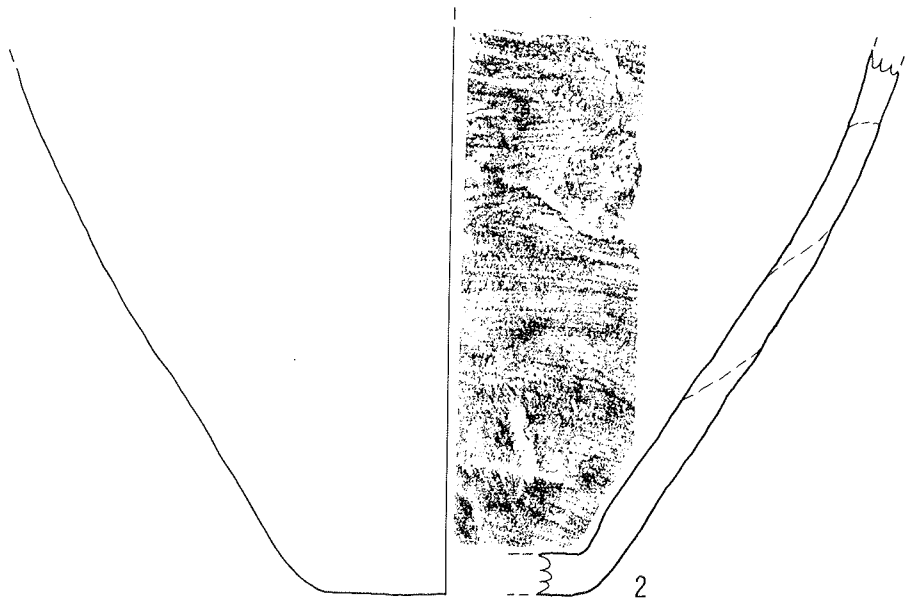
第34 図　土・貝製品

1 （A地区Ⅳ層） 2.（B地区Ⅲ層） 4.5.6.（C地区Ⅲ層） 3.（E地区Ⅱ層）



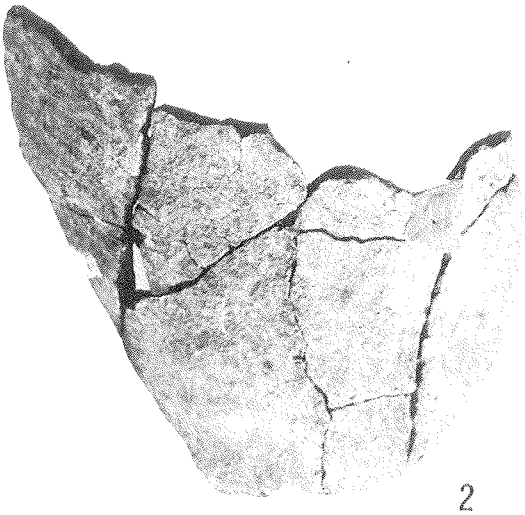
PL. 32

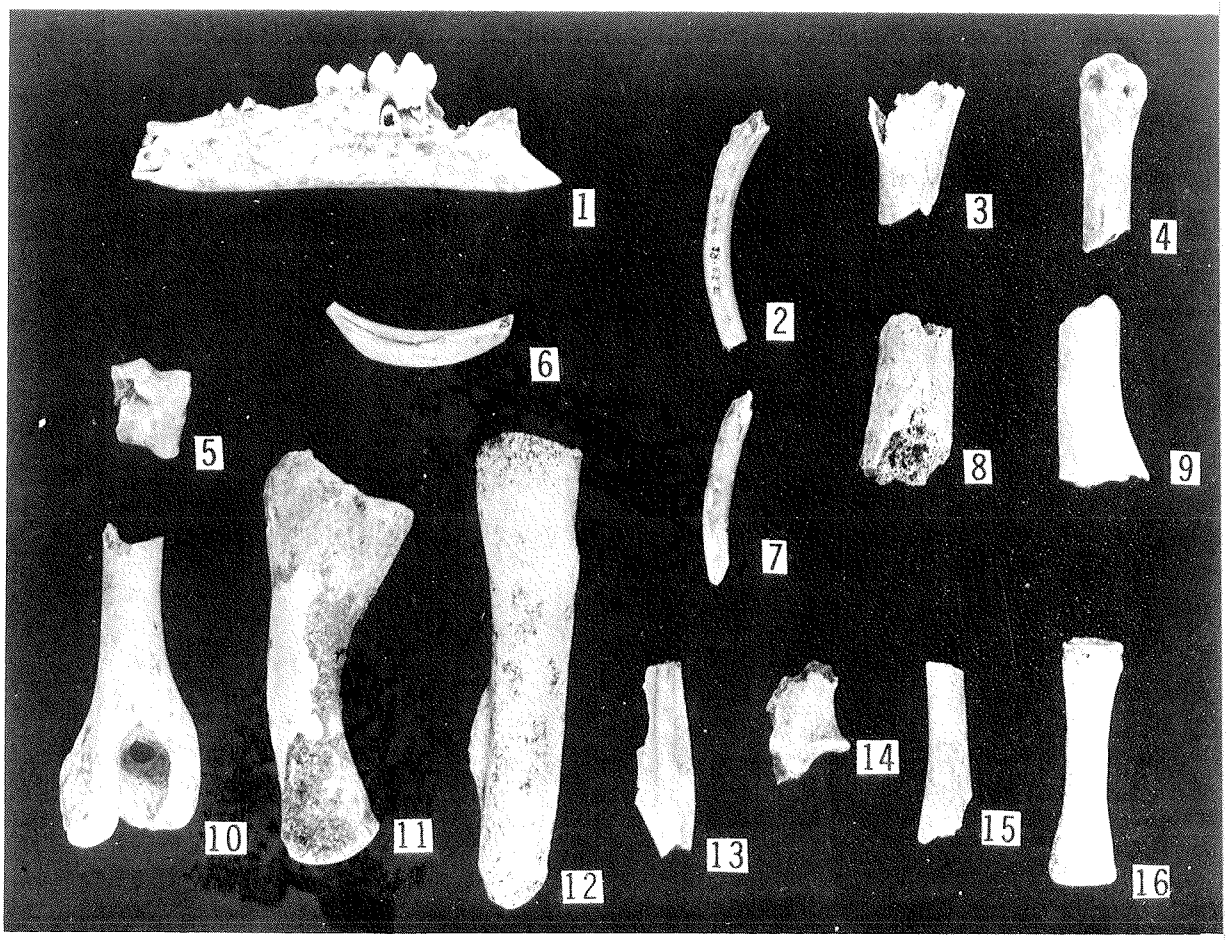




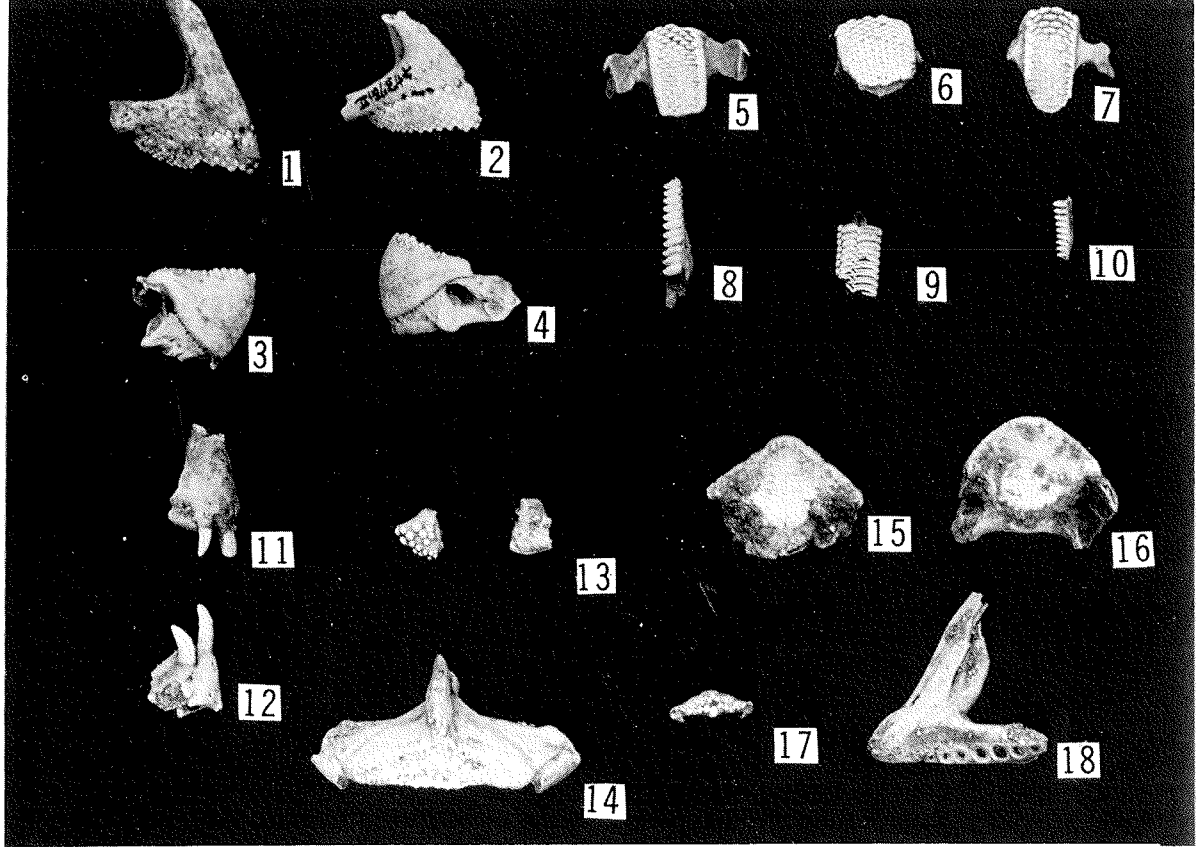
第35図　A地区出土の土器

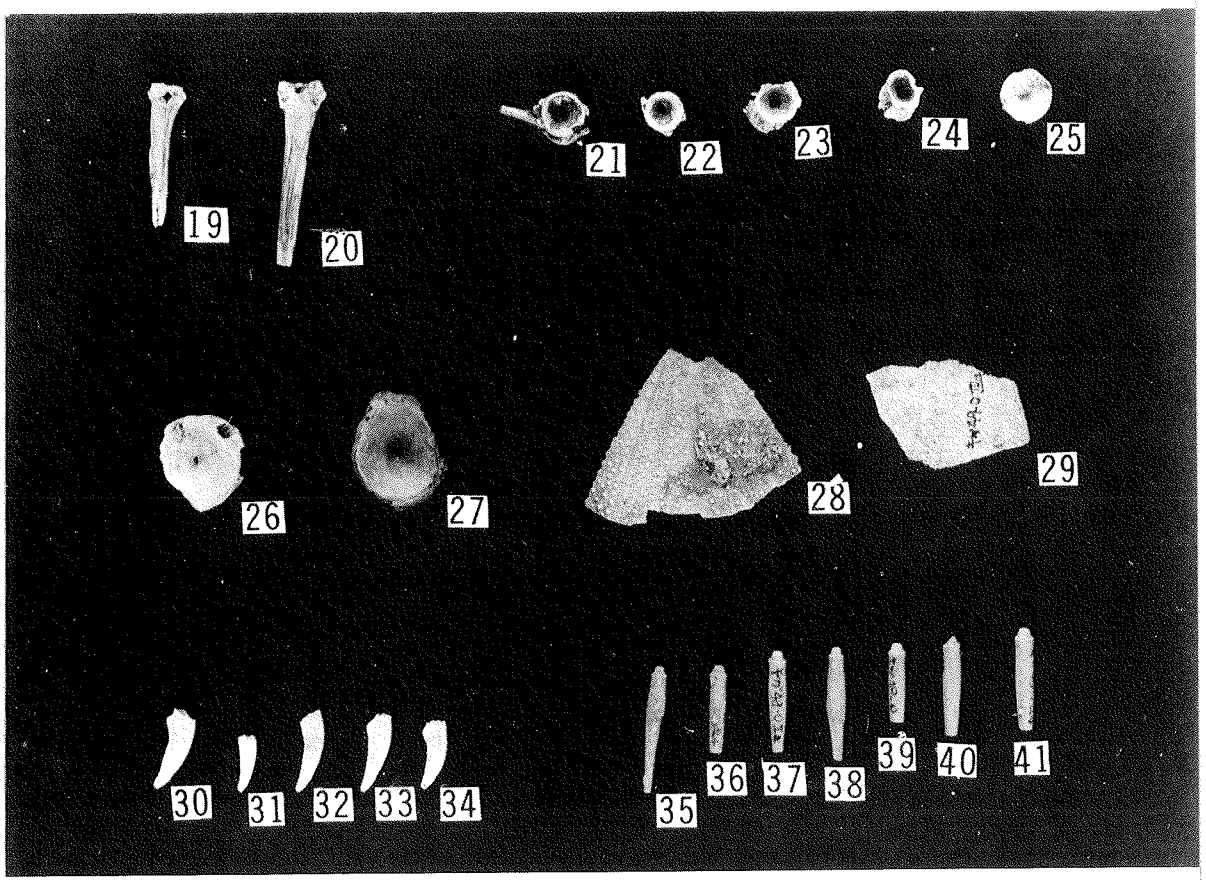
Ⅳ層（1.2）



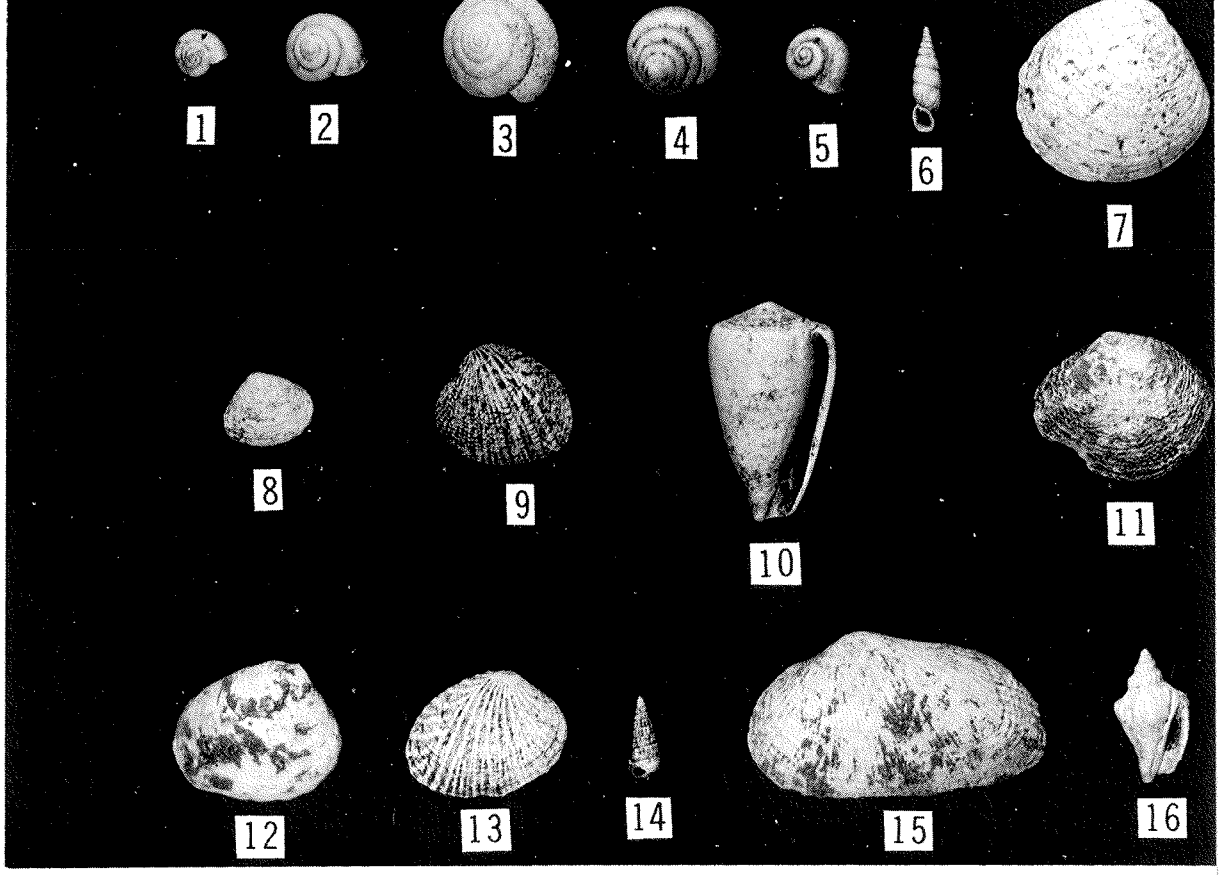


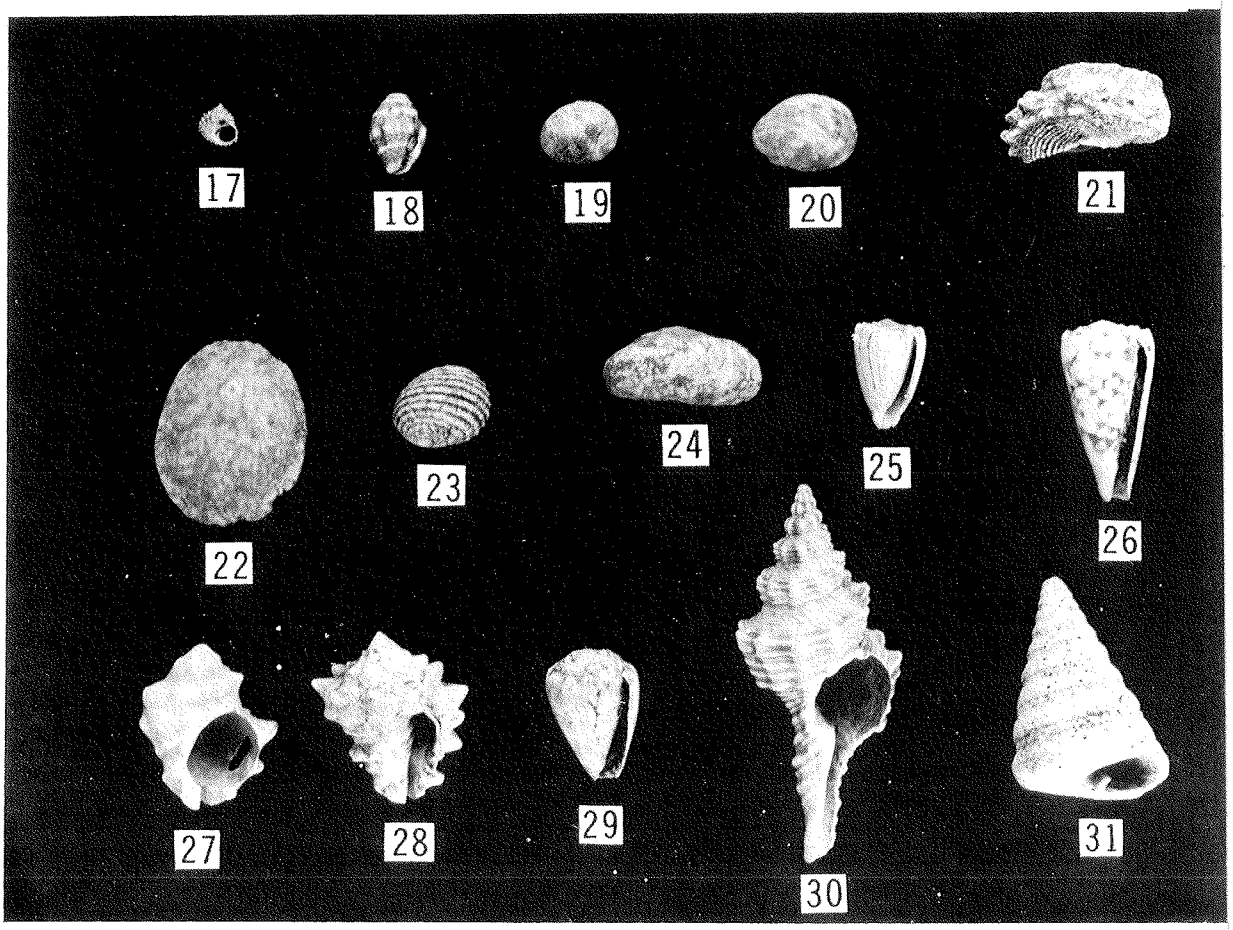
PL. 33　　上　土器底部(A地区)　下　イノシシ.他の獣骨類



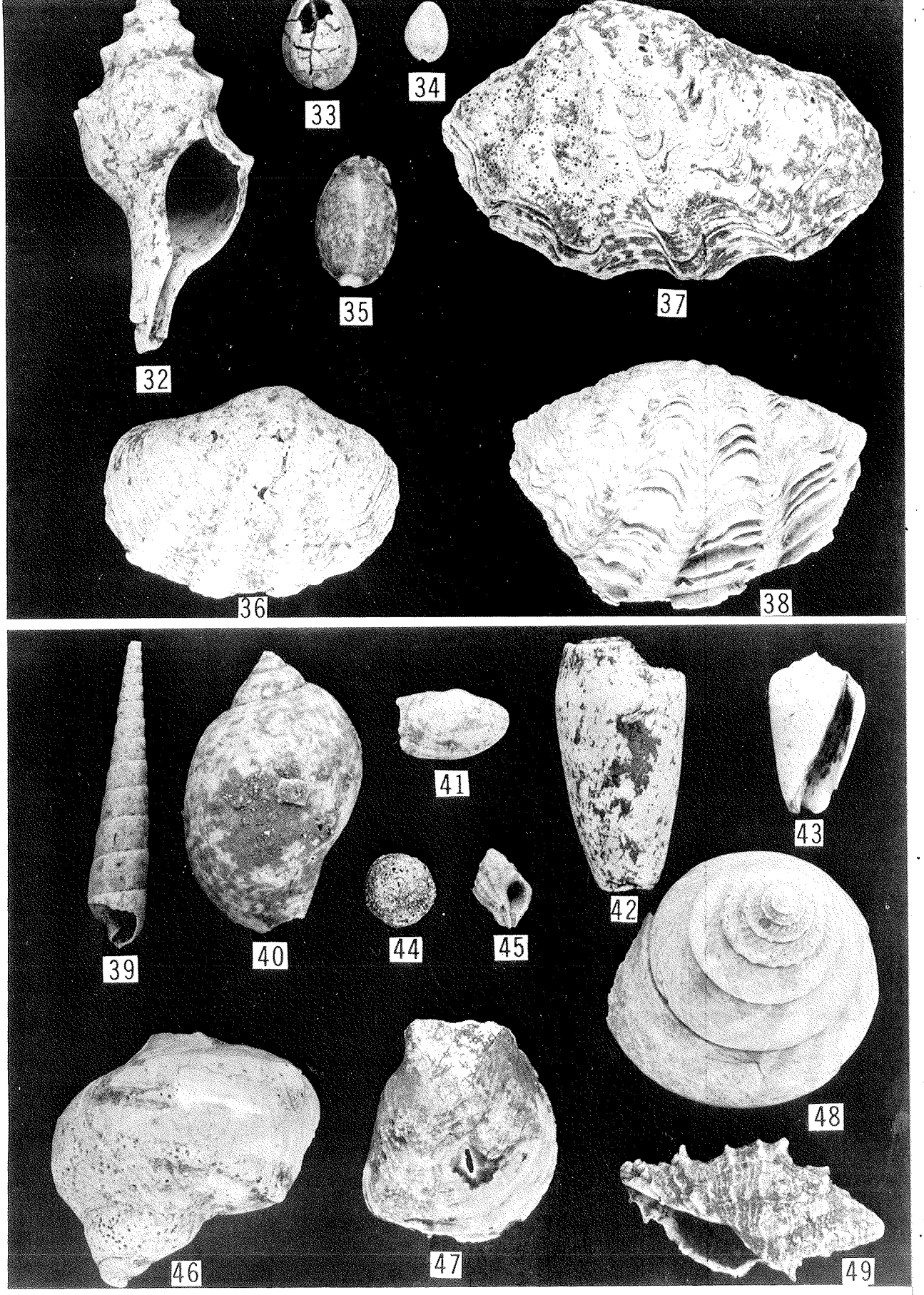


PL. 34　1～10 ブダイ科，11～14，17 ベラ科，15～16 ハリセンボン科，18 フエフキダイ科
19～20 刺　類，21～27 脊椎骨　28，29，35～41 ウニ類　30～34 甲殻類　カニ

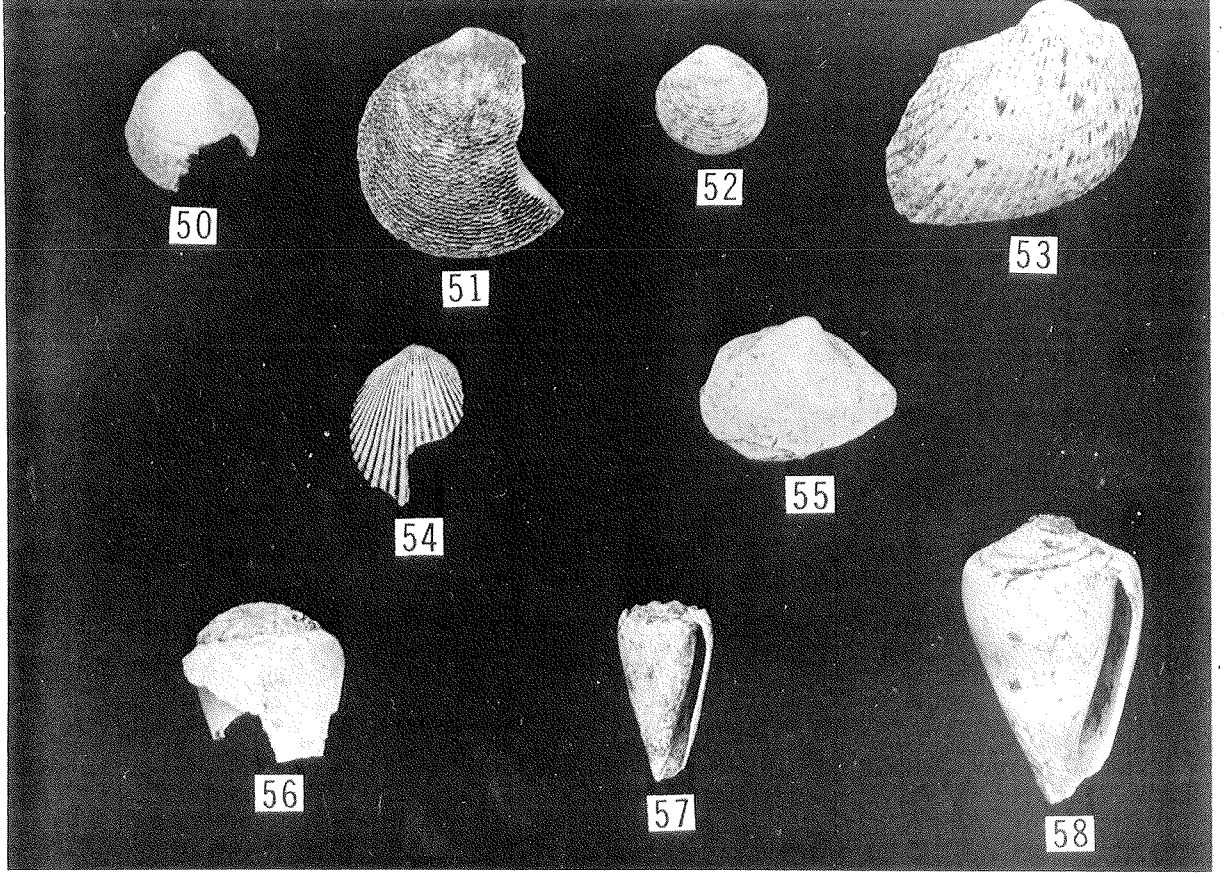


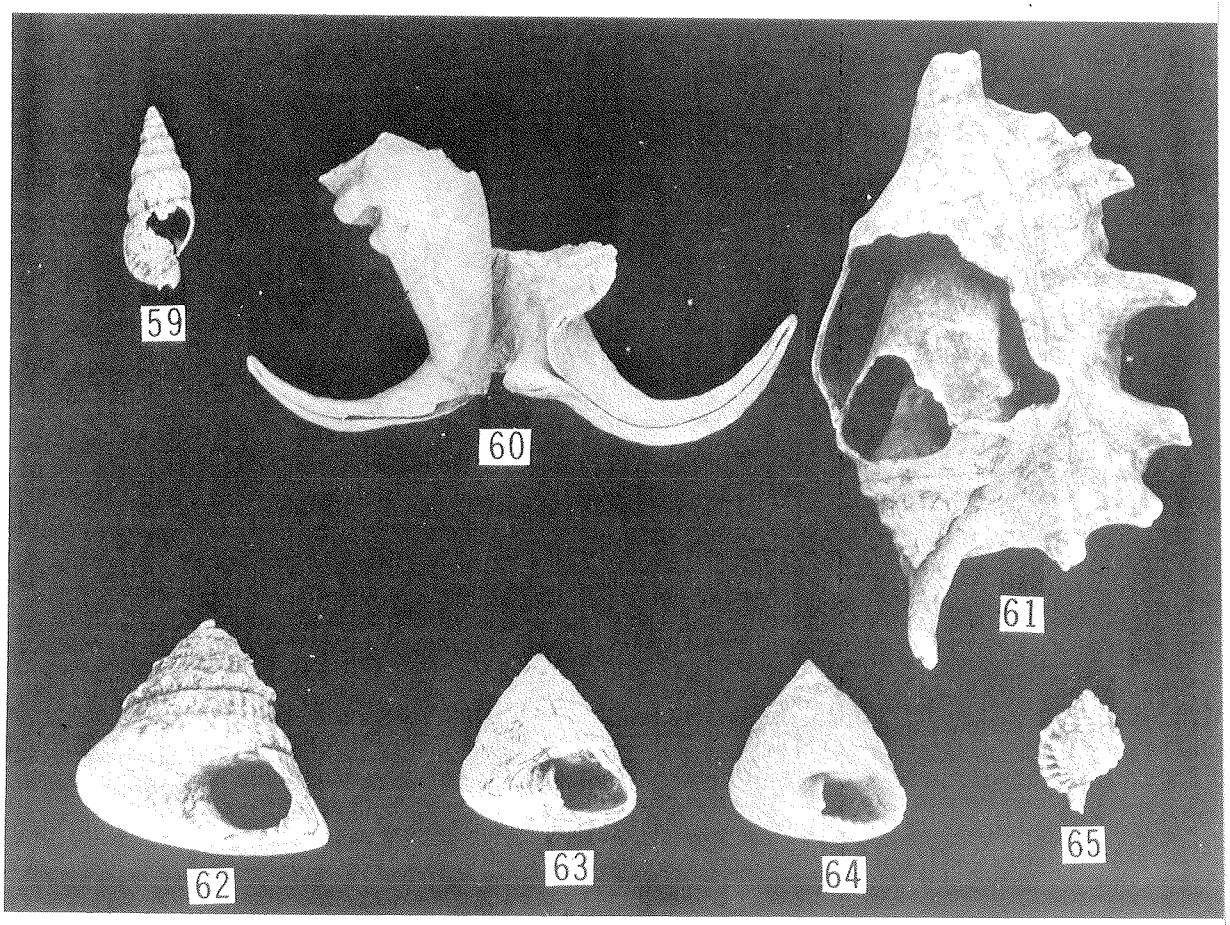


PL. 35　1～6　陸産貝　7 河川に棲息　8～16 潮間帯砂地及び砂泥地に棲息
17～31 潮間帯岩礫地及び岩礁に棲息

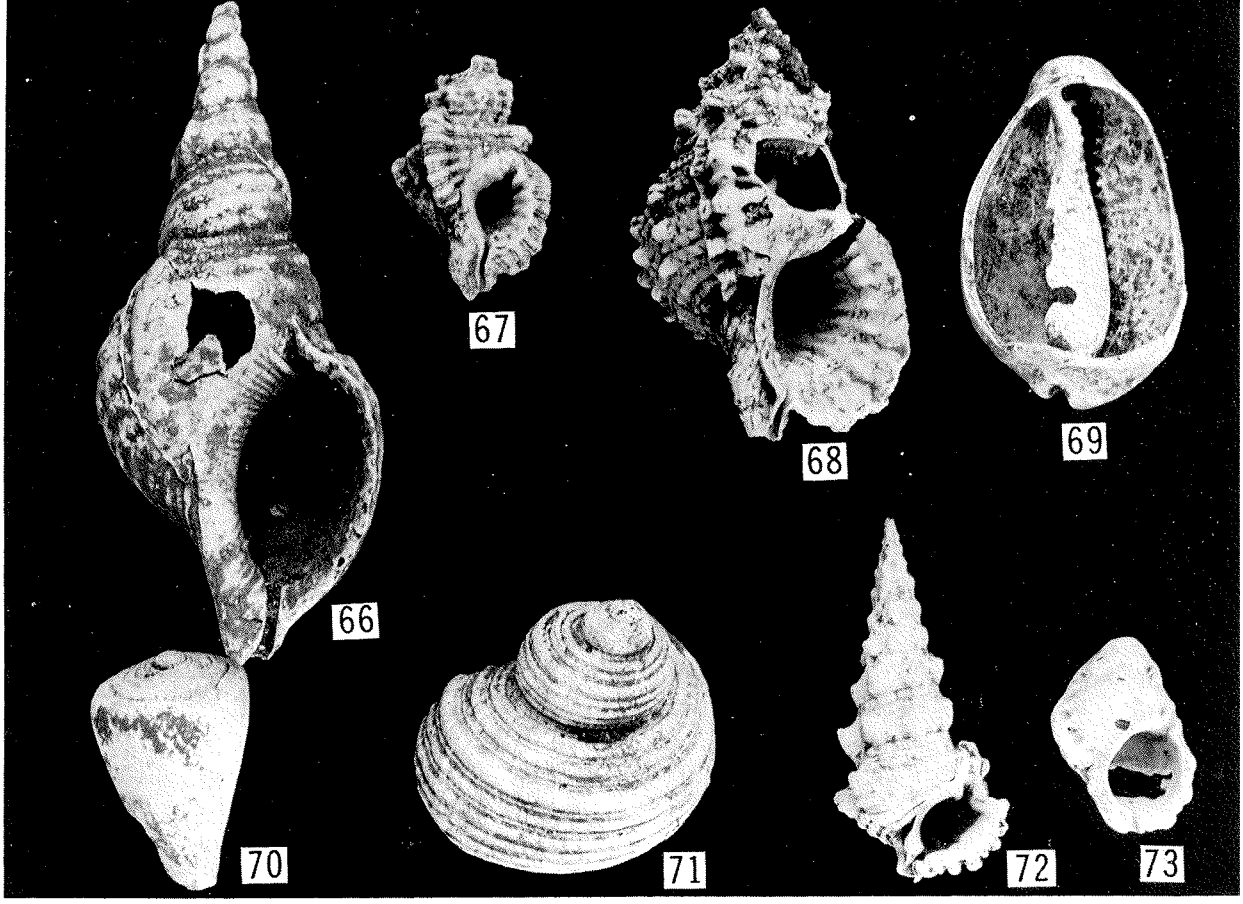


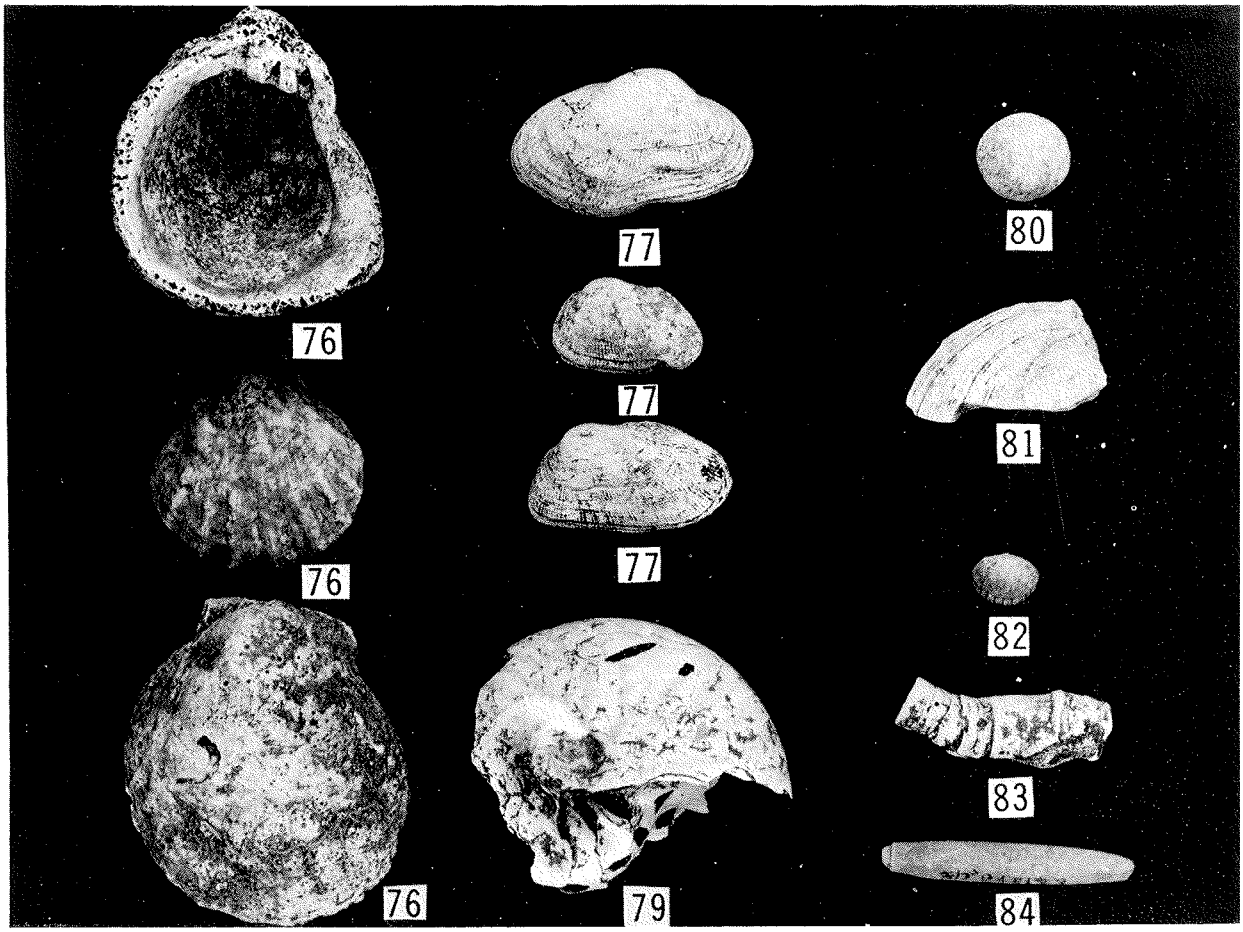
PL. 36　32～38　潮間帯の珊瑚礁に棲息　39～43 潮間帯～潮間帯下の砂地に棲息
44～49　潮間帯～潮間帯下の岩場に棲息





PL. 37　50～58　潮間帯下の砂地に棲息　　59～65　潮間帯下の岩礫地・岩礁に棲息





PL. 38　66～71 潮間帯下の岩礁に棲息　72.73 潮間帯下の珊瑚礁に棲息
76　うみぎく科　77　えがい科　79～84　その他

沖縄県文化財調査報告書第１７集

津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書

印 刷　１９７８年3月３０日
発 行　１９７８年3月３１日

編 集
発 行　沖 縄 県 教 育 委 員 会
TEL（0988）66−2731

印 刷　沖 縄 コ ロ ニ ー 印 刷
TEL（0988）77−2096